

なつかしい民具



裾野市教育委員会
裾野市立富士山資料館



お伊勢まいりの鞍

表紙説明

くらいぬけ

米を石臼で玄米ともみがらに分けたあと、選別された玄米を俵につめます。この俵づめの作業の時に「くらいぬけ」を使います。

俵が米などの運搬に利用された頃、つめこみの作業を手ぎわよく行うために考えだされた「くらいぬけ」はまさしく生活の知恵と竹編みの技術が上手にかみあってできた民具といえるでしょう。

伊勢まいりに使われた馬鞍

この馬鞍は人々が伊勢まいりを無事にやりとげ、地元に戻る時にその出迎えの馬につけられたものです。

旅が徒歩で行われる頃、伊勢までの旅をなしとげることがいかにつらい旅であり、これをやりとげ家族に大きな祝福をうける様子がこの豪華な鞍から感じられます。

発刊のことば

裾野市教育長 芹 澤 仁

私共の富士山資料館が、長年努力して蒐集されてきた貴重な民具に、体系的な考察を加え、「なつかしい民具」として発刊し、その保存と紹介の便に供されようとしたことは、極めて時宜を得たものと思います。

私達の郷土裾野には、誇り得る豊かな自然と、この風土に培われた、人情味あふれる、人々の生活があり、永く伝承された優れた生活文化があります。

しかし近年地域の発展と共に、この歴史的風土と、人々の生活は急激に変貌しようとしています。この時にあたり、私達の先人達ののこしてくれた貴重な民具を保存し、この民具と共に生きた、人間の知恵を継承し、後世に伝える試みは、極めて意義深く価値のある営みであると考えます。

序 文

富士山資料館館長 渡 辺 徳 逸

我国に於ける戦後の経済開発は、その進展と共に旧年の農山村生活を一変させた。

故勝又俊彦先生が須山中の教頭だった昭和44年から48年頃の須山では、昔からの養蚕室兼住宅の大きな家屋が、こじんまりした文化住宅に次々と改築された為永い間、農業や山仕事、養蚕等に使われ大切に保存されてきた諸道具類は、不用、かつ、置場にも困って不本意ながら焼却されたり捨てられたりしていた。これを察知した勝又先生はPTAに呼びかけてその収集を図った。区民は喜んで応じ収集に困る程だった。丹念に整理分類された民具は空室利用の民具資料展示室となって皆によるこばれた。

裾野郷土研究会収集の数々と共に市立富士山資料館建設の一因ともなった。

先生は富士山資料館の建設委員であり、かつ創立以来民具収集の専門委員として終始市内外の協力を得て活躍された。

沢山の資料の個々には先生の靈魂が宿されている所謂郷土館の生みの親、斯界の先覚者として敬慕に堪えない次第である。

目 次

発刊のことば
序 文

裾野市教育委員会 教育長 芹澤 仁
裾野市立富士山資料館 館長 渡辺徳逸

I. はじめに	4
II. 裾野地方の「なつかしい民具」	5
(1) 衣食住に用いられるもの。	6
つらぬき げた 地下たび わらじ作り台 わらじ はし どびんと急須 蕎麦猪口 箱膳 おわん うるし塗りの膳椀 メンパ すす竹のべん とうぼこ とっくり おひつ おはち台 すいのう しゃもじ 鉄びん・茶がま かめ 石臼 木鉢 白と杵 きねとせいろ 焼酎製造器 かま かまど 火吹き竹 たくあん漬と重石 伊豆石で作った電熱器 米俵 一升びんの精米器 自在かぎ おおど ろばたの生活 たたみ 金屏風 屏風 衝立 こたつ(亀の甲) いろり なべ 茶箱 ちゃぶ台 風呂敷 枕 いんろう 和傘 玉音放送が流れたラジオ 電気扇風機 柱時計 オルガン 分水升 手風呂 たらい 手桶 井戸ぐるま 釣瓶 火のしとこて くけだい 針箱 和ばさみ 車付きの豪華な長持 長持 総桐た んす つづら 長火鉢 火鉢 湯たんぼ あんか ちょうちん 燭台 行燈 油さし ランプ カンテラ 火きり具 昔の電気器具	
(2) 生産・生業に用いられるもの。	45
芝切り用のへら鋏 平鋏 鋏 じょれん へら からさお(くるり) 足ふみ縄ない機 俵編み台 み ふるい のこぎりがま 草かりがま 押 し切り まんが すき ころがし 唐箕 万石どうし あおり 農業用人力扇風機 回転式脱穀機 えぶり くらいぬけ 鬼歯 田下駄 横槌 むしろ編機 白と箕と槌 もみすり臼 石臼 茶摘み鋏 爐 蓑 とんぼ笠と日よけ たきぎとりの道具 うま 斧 鷲 や 割柄 きこりの道具 自分で作った鋸 鋸 ちょうな 金槌の柄 のみ 鯨尺と曲尺 サシガネ 墨壺 諸孔の錐 くぎぬき(えんま) 建具職の道具 ふいご 座繰 器 桑葉切り機 回転まぶし 毛羽取機 紡毛機 糸紡ぎ車 梭	
(3) 交通・運輸・通信に用いられるもの。	75
きんま ゴト車 大八車 さるの彫刻のある鞍 小荷駄鞍 背負子 てんびん いじこ 背負籠 人力車	
(4) 交易に用いられるもの。	80
斗ます ます 計測の用具 やたて 店番火鉢と算盤 大福帳 銭入れ はかり	
(5) 社会生活に用いられるもの。	84

龍吐水 腕用ポンプ 纏 竹製のヘルメット

(6) 信仰に用いられるもの。	86
神棚 おふだ 三方 八角の金剛杖 数珠 仏壇 福を呼ぶ“だるま” 念仏のかね	
(7) 民俗知識に用いられるもの。	90
穀聚山 干支	
(8) 民俗芸能・娯楽・遊戯・嗜好に用いられるもの。	91
菓子の木型 獅子頭 須山の屋台 神輿 提灯 花火の筒 かるた たこ 力石 化粧まわし 煙管 とうふ屋さんのラッパ	
(9) 人の一生に関して用いられるもの。	97
オチョウ・メチョウ 角樽	
(10) 年中行事に用いられるもの。	98
お雛さま 宝船 注連縄 おぶつけ	
III. 富士山資料館収蔵の民具資料	100
IV. 編集後記	101



ろばたの生活

I. はじめに

今回発行いたします「なつかしい民具」は、昭和54年7月15日から「裾野市広報すその」の1コーナーに、富士山資料館に市民の皆様から提供されました民俗資料を中心に、民具にまつわる物語・伝承・いわれなどを加え、人々の生活の知恵によって誕生したすばらしい民具を広く市民に紹介することをねらいにスタートしたものです。

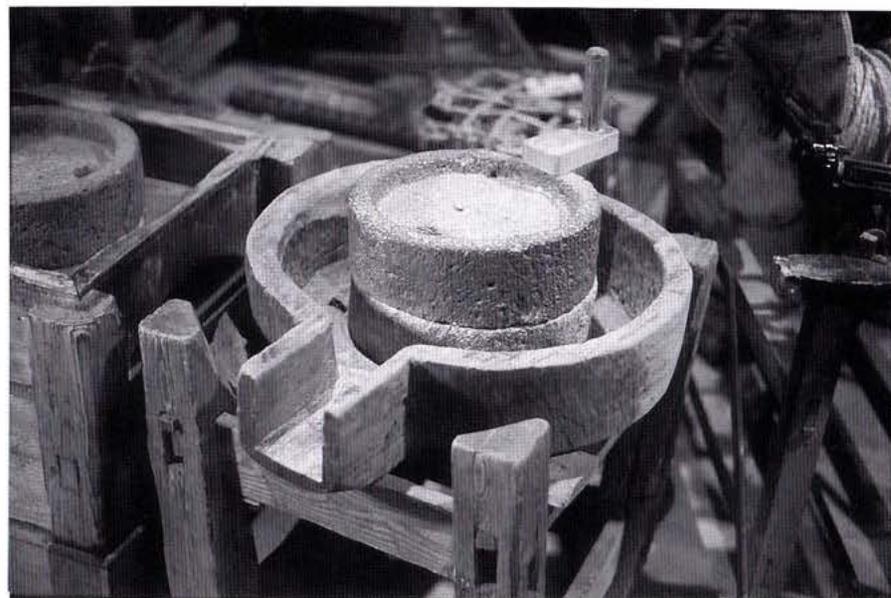
この広報すその連載の「なつかしい民具」は、昭和54年7月15日号から昭和63年7月15日号まで9年間におよび、資料約190点を取り上げ紹介しております。民具にはその当時の人々の暮らしの様子や生活ぶり、村々の様子などさまざまな点がしみこみ、生活の移りかわりを知る上で貴重な文化遺産と言えます。またその民具が教えてくれる物語や言伝え、歌などは民具とともに誕生し、民具の姿が消えると同じくして人々の声からも消えて行こうとしています。しかし、私達は現在まったく無用となった民具も多々あるなかで、これらは当時はしっかり人々の生活の中に根付き、重宝されたものであり、これらの民具を土台にして現在の私達の生活の道具(機械)が発達してきたことを忘れてはいけないと思います。今回は約190点の資料を中心に取り上げ、物語・いわれなどを紹介するわけですが、明治・大正・昭和にわたる庶民の生活文化の一端が十分に伝わってくるように思います。

資料館ではすでに約3000点以上の民具を収蔵保存し、その一部を展示紹介しておりますが、「なつかしい民具」は庶民の生活文化を知る上で、かけがえのない貴重な資料となると考えております。取り上げました資料の中には、学問的基準による「民具」としてはふさわしくない資料も取り上げておりますが、資料が語る生活文化の情報に深い意義があると考え紹介いたします。

民俗資料も多種にわたり簡単に分類することはできませんが、今回は文化庁の重要文化財資料指定基準の、有形の民俗資料の分類を参考に紹介します。

- (1) 衣食住に用いられるもの。たとえば衣服装身具、飲食用具、光熱用具、家具調度、住居など。
- (2) 生産・生業に用いられるもの。たとえば農具、漁猟具、工匠用具、紡織用具、作業場など。
- (3) 交通・運輸・通信に用いられるもの。たとえば運搬具、舟車、飛脚用具、関所など。
- (4) 交易に用いられるもの。たとえば計算具、計量具、看板、鑑札、店舗など。
- (5) 社会生活に用いられるもの。たとえば贈答用具、警防、刑罰用具、若者宿など。
- (6) 信仰に用いられるもの。たとえば祭祀具、法会具、奉納物、偶像類、呪術用具、社詞など。
- (7) 民俗知識に用いられるもの。たとえば暦類、占い用具、医療具、教育施設など。
- (8) 民俗芸能・娯楽・遊戯・嗜好に用いられるもの。たとえば衣装道具、楽器、面、人形、玩具、舞台など。
- (9) 人の一生に関して用いられるもの。たとえば産育用具、冠婚葬祭、産屋など。
- (10) 年中行事に用いられるもの。たとえば正月用具、節句用具、盆用具など。

II. 裾野地方の「なつかしい民具」



石 臼

(1) 衣、食、住に用いられるもの



つ ら ぬ き

日本の伝統的な皮沓かわぐつには、西洋靴とちがって、かかとがない。これは、日本人の歩き方が、つま先を主に使い、かかとをあまり使わなかったからです。鹿、猪、熊、豚などの一枚皮で、幅6寸にたち、これをまげて靴にする。山仕事、竹山などに入るには、これでないと鋭くとがった竹が足にささるからです。夜は水にひたして、革をやわらかくし、靴の中に、わらをしき、たびをはいて靴をはきました。防寒、防水に非常に効用があり、地下たびが不足している終戦後まで使われた。

写真は、猪の「つらぬき」です。



げ
た
(下駄)

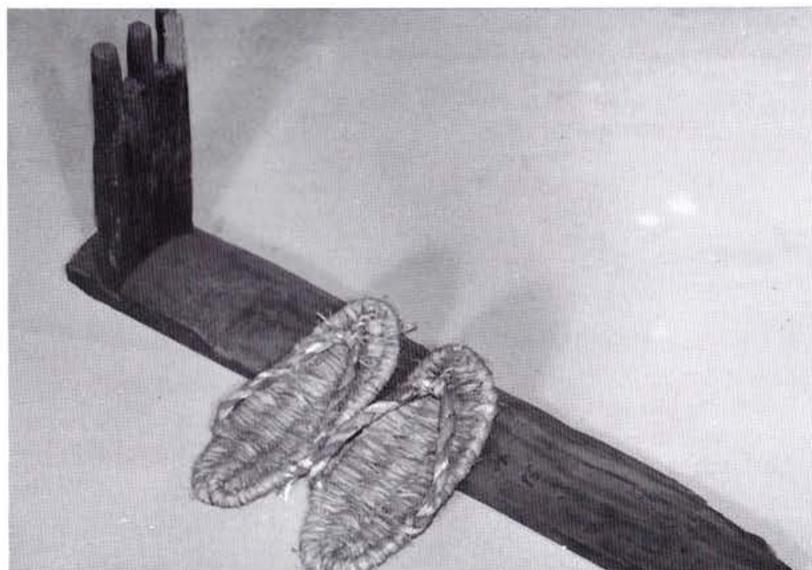
今から160年前ごろまでは、げたの歯の入れかえはなく、挽木ひきぎのままでしたが、このころ文政3年(1820年)よりげたも歯を入れかえることが始まりました。歯入れ屋は江戸の新商売で、履き捨てたげたを入れかえたりして江戸っ子らしくもなかった。鼻緒はなむすだけを売り歩く商売も、このころから始まり、「はなおや、はなおや、げたの鼻緒が二足三文」と呼び歩いた。二足三文という言葉がこれから始まった。



地下たび

地下たびは、日本ゴムの創設者、石橋徳次郎、正次郎の兄弟が輸入品のテニスシューズにヒントを得て大正12年に売り出した。

指先が二つに分かれているため、ふんばりがきき、軽くて、山歩きや労働、高い所へ登ったり、パイプの上を歩いたりするのが理にかなっています。大正から昭和にかけて、労働ばきの王座に君臨した地下たびですが、デザインの関係で、はく人がへり残念です。はいたことのない人は、一度はいてみませんか、山菜取り、登山に理想的、また値段も安いのです。

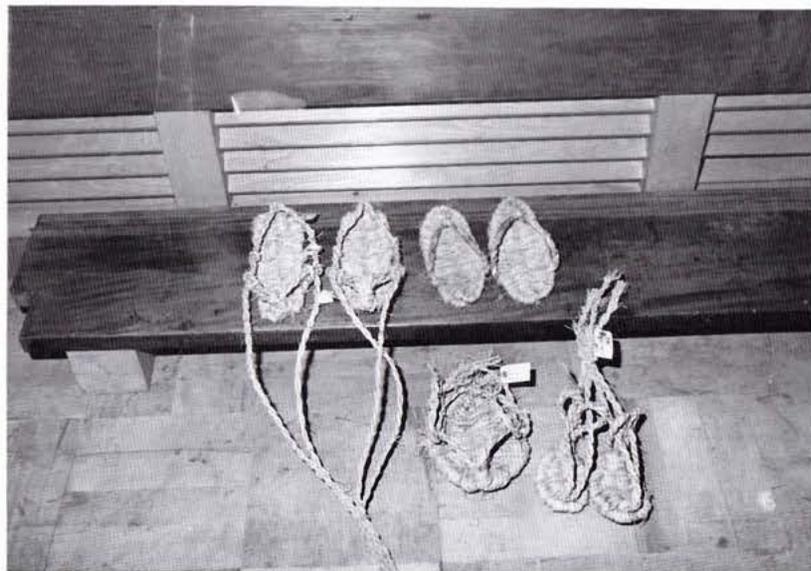


わらじ作り台(ぼっこ)

民具の原点は、物を使って身体の機能を高めるとか、疲労を少なくする、というようなことから発生しているともいえます。

写真の民具もその例ですが、足によく似せてあって、形が素朴であるからといってその発生が古い民具とは限りません。

藁わらを素材にした履物を作ることが庶民生活に定着し、藁わら細工する技術がかなり習熟した段階で工夫された民具といえます。

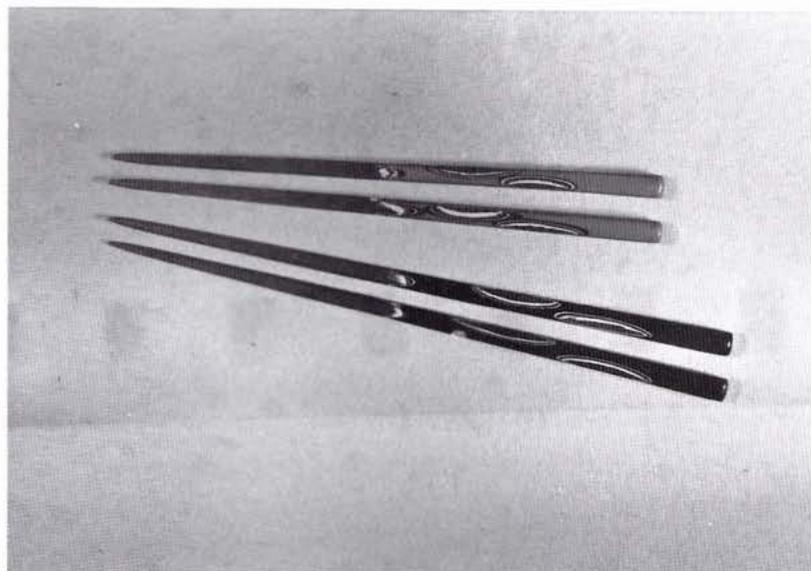


わ ら じ

雪国では、わらの長靴がいろいろ工夫されているが、裾野地方にはそうしたものは見あたりません。ぞうり、わらじが普通でした。

わらじはぞうりよりも構造がやや複雑で台部、かかと、受、^{びも}着装的紐と乳の四部分から成りたっていて、足にしっかり固定するように作られています。

また、わらじには牛馬用のものがあります。農山村でも都市化の波に押され、こうしたものを自給することなく、わら細工の技術が急激に失われてしまいました。



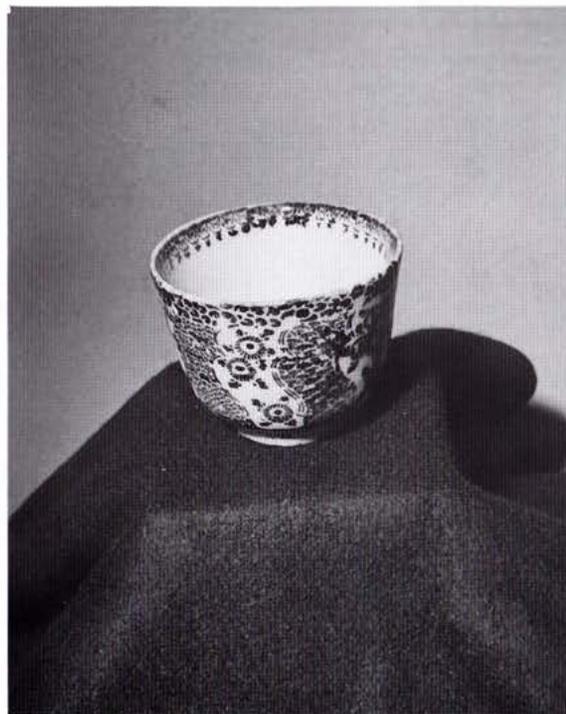
は し(箸)

三度三度の食事は、めいめいの箸で食べないとおいしくありません。どこの家でも、毎日使っている箸は家族全員「めいめい持ち」で、親、子、亭主、女房、姉、妹の箸が、みな違います。日本では、箸の重さに男と女、それぞれの好みがあり、20グラムほどの男箸と、16グラムの女箸が日本人好みでしょう。箸の重さの好みの微妙な性別は日本だけのことのようにです。箸はまた食事にも合わせる必要があるようで、いかの刺身、そうめん用には、「滑らない箸」が、料理にあうようです。



どびんと急須

煎茶の道具には、^{せんちや}盆、^{ぼん}茶入、^{ちやいれ}茶計、^{きこう}急須、^{ちやたく}茶托、^{ちやわん}茶碗などがあり、煎茶を入れるどびんや急須は、日に何回か手にするうつわです。どびんには、^{ちゆうこう}注口とつるをかける^{とつて}肥手をつけてあり、縄文時代晩期の土器にその原型をみることができます。急須は、中国からの伝来で、煎茶とともに日本化されたものです。写真のどびんは、沼津駅で、駅弁用に富士山をデザインしたものです。小田原駅では、「小田原ちょうちん」など、20年ぐらい前まで使用され、列車の旅も郷土色豊かでした。現在は、ビニール容器で、お茶の味も……。



蕎麦猪口（そばちやく）

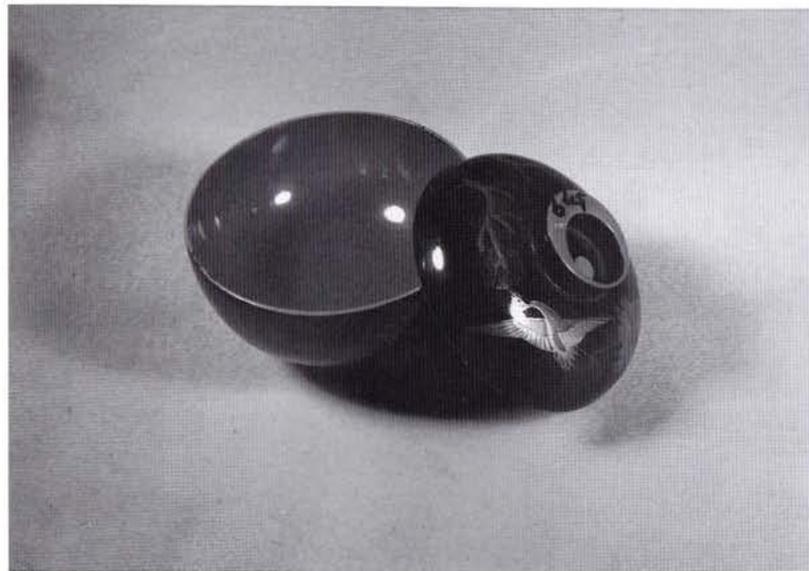
そば粉に少々的小麦粉をまぜためん状のそばの発明は江戸時代のはじめの頃のことらしい。そばちやくは申し合わせでもしたかのように白い陶器の肌、それに藍一色の簡素な絵付けだった。稀に漆器の猪口や陶器磁器でも赤絵のものも見かけるが、不思議とそばにはそぐわない。簡素の中の美しさ、それが時代が変わっても現代の我々を無上にひきつけるのである。今もって蕎麦猪口を愛し、たとえ一つ、二つでも手許におきたいという人は意外に多いのではないだろうか。



箱膳

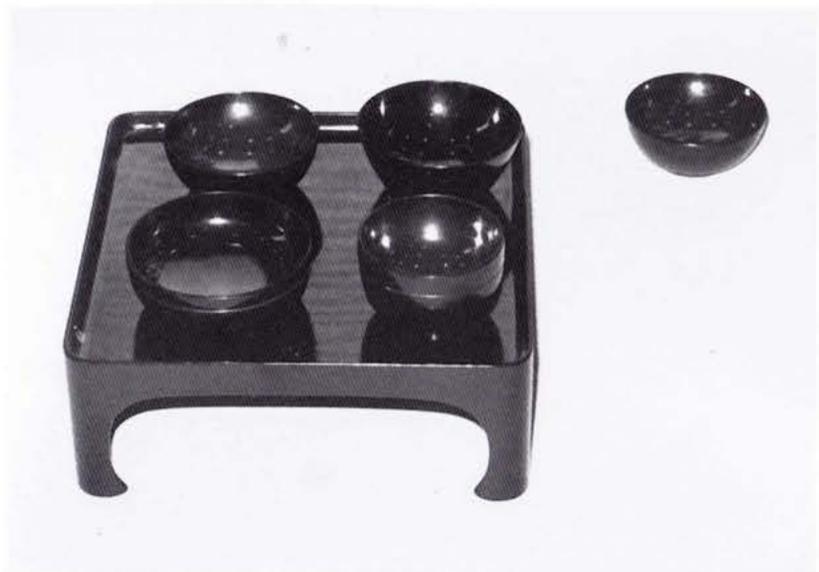
膳はあしの有無や形によってさまざまに区別されており、猫の足に似せた猫足膳やくるみの実を使ったくるみ足膳、足のない会席膳などがある。これらの他、この裾野地方で使われた写真の箱膳があります。

これは食事の時、ふたを裏返して箱の上に置き食器をならべ、食後、ふきんでぬぐうなどして箱におさめました。



おわん(お椀)

買い物のとき、一見同じかっこう、同じ色つやのお椀なのに、十何倍かの値びらきがあるのです。なぜこんなに違うのでしょうか。お椀の素地には、プラスチック素地、木の粉末を合成樹脂で練り固めて成型したもの、天然木をロクロで挽いた素地のものがありますが、安いのがプラスチック素地のもの、プラスチック素地のお椀には、塗料をかけたものと、無塗料のものがあり、一番安いのが無塗料のものです。一番高価なお椀は天然木の素地へ、天然漆を塗り重ねたお椀で、耐用年数50年で1万円もするそうです。写真のお椀は明治35年製。



うるし塗りの膳椀

うるしの樹液は、器物の保護剤、接着剤としては最古の物であり、また現在でも最高級のもので、古くから刀剣の装具や皮革、鉄製品にも塗られました。

平安時代には、すでにうるしを利用した蒔絵や螺鈿まきゑ ろでんの技術は高度に発達して、日本の調度品を世界的水準のものにしていました。江戸時代に入っ

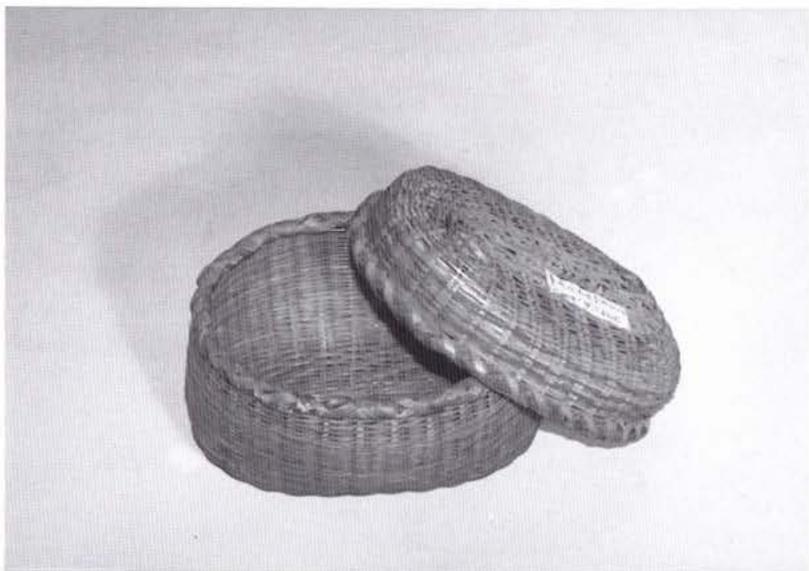
ては、より広く大小器物にこの技法が用いられた。
写真は客人のための膳椀などで、輪島塗りです。



メ
ン
ツ
パ

簿板の曲げもので、うるしぬりで作った弁当箱。アルミ弁当箱が普及するまで少なくとも4～500年と変わることなく愛用されたものです。

呼び名は土地、土地まちまちで、メンツウ、メンツ、メンパ、メツパ、ワツパ等あります。形は円、だ円、大きさは色々あり、漁師の使ったものは一升ほど入る大きな浜弁当、反対に小さいほうではお菜入れ専用の菜面桶は握りこぶし大。上下合わせて二食分として使うこともあった。



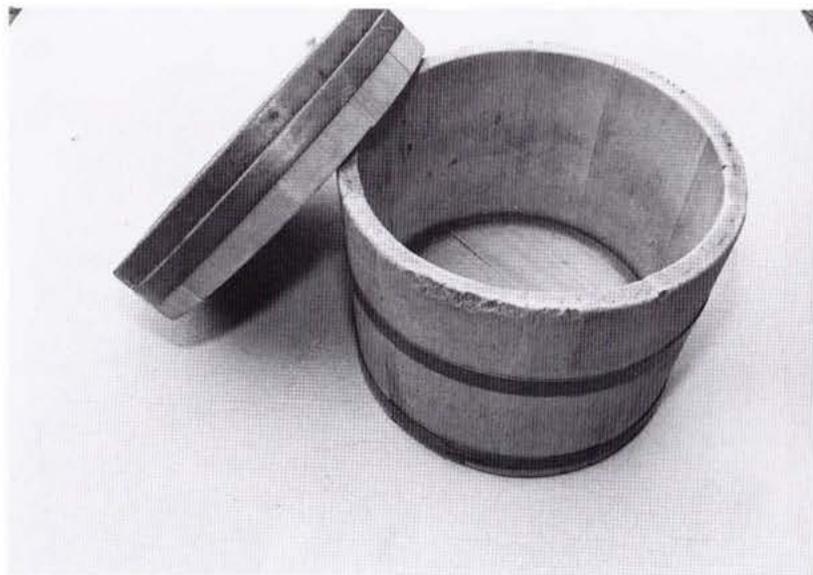
すす竹のべんとうばこ

材料になるすす竹は、裾野地方では海拔700～1000m付近に「しま」と呼ばれ群生している。すす竹は、箱根竹同様、竹と名がついているが笹の仲間です。竹に花が咲くと飢饉がくる、何か不吉なことがあると言われた。終戦の年は全国的に花が咲いた。竹の開花は60年周期とされています。写真は、すす竹で編んだ家族用の野良や山行きのごはん入れで、めんぱと呼んでいます。



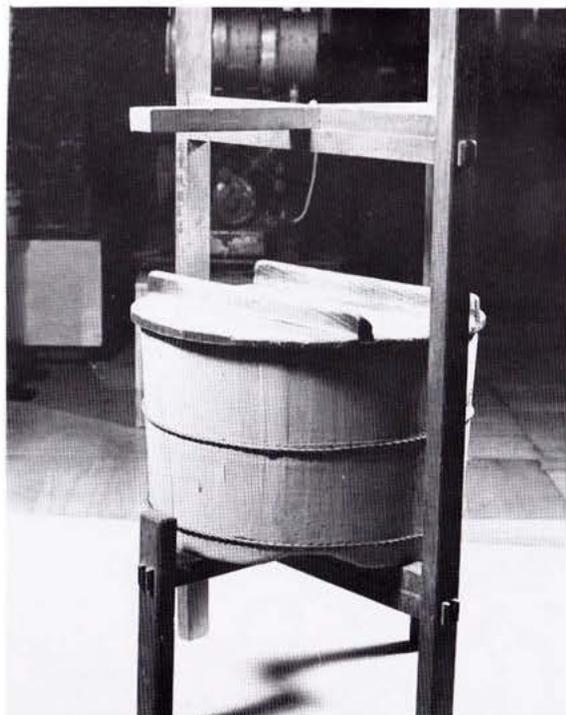
と っ く り

酒に関する民具は比較的多い。それは酒がそれだけ人びとの間に浸透していたからです。徳利とっくりの形は胴のふくらんだ美しい曲線で、細首の背の高いものであって、古くは酢や、しょう油や、油なども入れる容器であったが、今日ではもっぱら酒の容器となった。燗徳利は二合か一合のものであるが、もともとは冷酒を飲むのが一般的であったからそれほど古くからあったわけではない。写真にある燗徳利は正面から見ると「はと」に似ているので「はとどっくり」という名がついた。



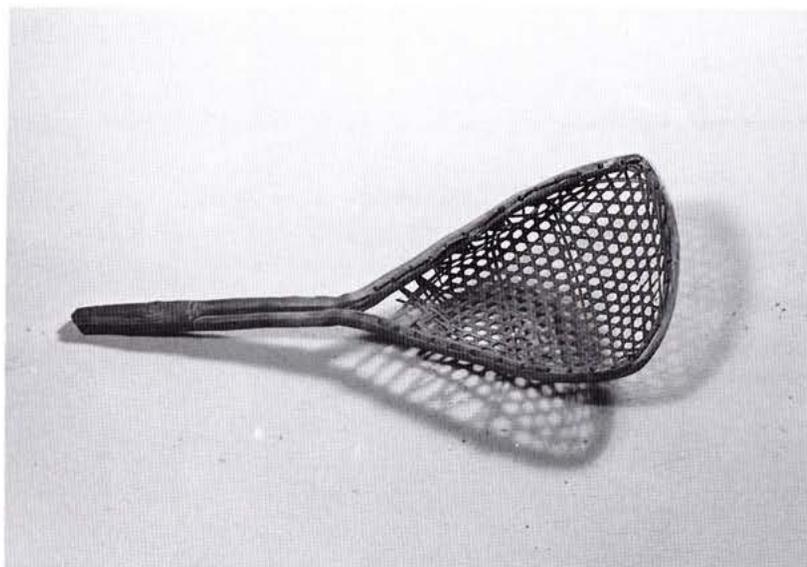
おひつ

ねていてもご飯がたけて、保温までしてくれる炊飯器、便利な時代ですが、おひつのご飯よりおいしくない。おひつは、吸湿性のある桐・榎きり・樺きわら、さらに吸湿能力の高い榎目きりめを使うので、おいしいのです。その反対に、水を吸ったり息をしては困るものに使う器は、板目を使う（みそ、しょう油など）。同じ材料でも切り方や処理法で全く異なった用途のものが生まれます。



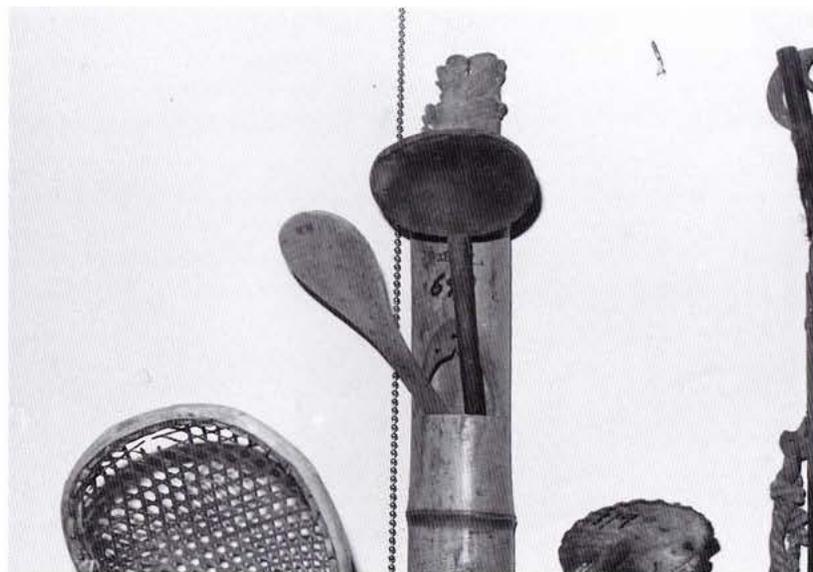
おはち台

おはちを下に直接おいたのでは、下のほうが風とうしがわるいので、ごはんがいたみやすい。そこで考えだしたのが、写真のおはち台です。家の風とうしのよい涼しい所におき、おはちをのせておいたのです。使わない時は、折りたためるようになっていて、部屋のすみにたてかけられ、邪魔にならず重宝だったのです。昭和初期のころは盛んに使われ、戦前まで実用されていましたが、電気がま、ガスがまの時代となり、おはちが使われなくなり、姿を消してしまいました。



すいのう

昔は人よせがあると必ず赤飯か、うどんをゆでた。特にうどんは長いので、長く縁を結ぶということで、結婚式にうどんが出されることが多かった。近所の人たちが集って庭でまきをたき、特に火力を強めるために竹をくべ、大きなかまを使ってゆでたものです。すいのうは竹であんだもので、一種のざるです。大きなかまの中をかきまぜながら煮えてくるのを待っている。ときどきつまんでみては、まだかなとまた煮る。そのうちに煮えるので、他のうつわに移す。はしなどではどうすることもできない、そのために考えだされた便利な道具です。



しゃもじ

木を材料とする工作物のうち、家屋や船など大形建造物を除く用具類が木工品です。

伝統的な木工には、ろくろを使って鉢、椀などを挽く挽物師、檜のうすい板を蒸して曲げせいろなどをつくる檜物師、のみや小刀を使って鉢や盆などをえぐる木彫師、簞笥などをつくる指物師などがあります。建具師、細工師なども木工の範囲に入る。

宮島の杓子は臭気がなく飯粒がつかないのでよろこばれた。今では本格的なものは数千円もします。



鉄びん・茶がま

今日ではどの家庭でも、ポットと呼ばれる熱湯保温器が使われていますが、ひと昔前までは、農家ではいろりの自在かぎに、町では火鉢に鉄びんや茶がまがかけられ、チンチンと音をたてて、蒸気でふたが動いていたものです。喫茶の庶民化は、江戸時代後半の都市生活の発達とともに普及してきたもので、また客に茶を出してもてなすという接待法も、このころから広く行われるようになってきました。



かめ

かめは、長崎県かめやまの甕山窯で作られたのが最初といわれている。有田焼の技法をとり入れ、天草の土を使ったといえます。平安時代には、中国、上海市のとなり蘇州の土を使ったが土質が悪く、のちに、全国の良質の土を使い良いかめを作るように改善された。台所の地下や物置などにおき、漬け物かめとして昔から使われ、塩、酸による腐蝕がなく、ねずみにかじられる心配もなく便利でした。欠点として割れたりすることがあるし、大きなかめを片手で持ち上げたりするから……必ず両手で移動したいものです。



石 臼(いしうす)

ひいておくれよ 二台 三台 人のうすだと思わずに ごろりん ごろりん

山の村では、昔、米を主食とするよりは雑穀を食べることが多かったの
で、石臼で大豆、とうもろこし、そばなどをよく粉にひきました。

粉ひきうたは、この作業中のうたですがもみを米にする唐臼での作業も
似ているので、もみすりうたも同じような歌詞でうたわれました。臼の石
は、富士溶岩を加工したものです。



木 鉢(きばち)

自給自足をたてまえとした山村では、陶器は貴重品、木鉢は飲食調理用
品として欠かせないものでした。

この地方では円形の物がほとんどで、用途は餅を臼からとってちぎった
りする餅とり用と、そば、うどんを作る時のねり台などによく使われまし
た。

木鉢は、板目にひいた木材をえぐりけずって作るのので、木目に沿ってひ
びが入るのを防ぐため、木口の部分の縁を厚くしてあります。(材料はけや
きが多い)



白 と きね 杵

玄米から白米への嗜好^{しこう}の変化は江戸時代の後半とみられ「つく、ひだす、ふるう」といった一連の精白作業は女の重要な仕事でした。白、堅杵と歴史は古く、遠く弥生時代^{やきゅう}まで遡及できますが、横杵の普及は江戸時代ごろとみられています。

なお精白作業の時に、反転をよくするために（月の輪）と呼ぶ円形の輪が臼の底に入れられたりしました。また臼には脱穀用と、もちつき用がありますが兼用したりしました。



きねとせいろ

十五夜のお月さんは、「うさぎが餅つきをしている」よ…よく見てごらん。ほとんどでしょう……そのように見えますね。そのきねはたてきね（堅杵）といって横杵より古い写真の杵です。材料はくり、ひめしゃらなど重い木でできている。主に神事用、みそを作る時などに使われていた。写真のせいろは縦・横45センチメートルの正方形で赤飯、餅つき、まんじゅう作りに使われた。円筒形のせいろのように蒸気の廻りがよくない欠点があったが、丈夫でよかった。二段、三段と「へっつい」（かまど）の上ののせて下から薪^{たきぎ}をどんどんくべ湯気をさかんにした。



しょうちゅう
焼酎製造器

焼酎は日本の代表的な蒸留酒、本格的なものは（かすとり焼酎）と（もみとり焼酎）ですが現在は（新式焼酎）が市場に出ています。かすとり焼酎は、清酒かすを1週間から1か月ぐらい密封貯蔵して、自己消化と後発酵をさせ、これにもみがらを混合して、酒かすにすきまができるようにしたものを蒸籠せいろうのたなの上にひろげ下のかまの蒸気で、このかすの中のアルコールを水蒸気蒸留し、冷却して作ります。

写真は、いも焼酎を作った蒸留器。



かま

親子で、はんごうすいさんをした時、若いお母さんが「薪まきでご飯が炊けるですね」と感心されたことがあります。

電気釜、ガス釜の普及でこんな時代になったんですね。朝暗い中に起き、背中を丸くして火吹き竹で火を起こし、「はじめちよろちよろ、なかぼっぱ、あかご泣くともふたとるな」など火加減のこつがあった。

写真のつばつきの釜は煙を防ぎ、熱効果をあげる、すばらしい日本人の発明です。

お釜のご飯、おこげの塩むすびがなつかしい時代となりました。



か ま ど

「へっつい」とも言います。

へっついとは「戸津火」のなまりとも言われ、民家の火を意味し、関東ではこのへっついの称が普通です。

江戸あたりでは火口は普通二つ、大世帯でも三つでした。

写真は二つかまどで、最近のタイル張りです。

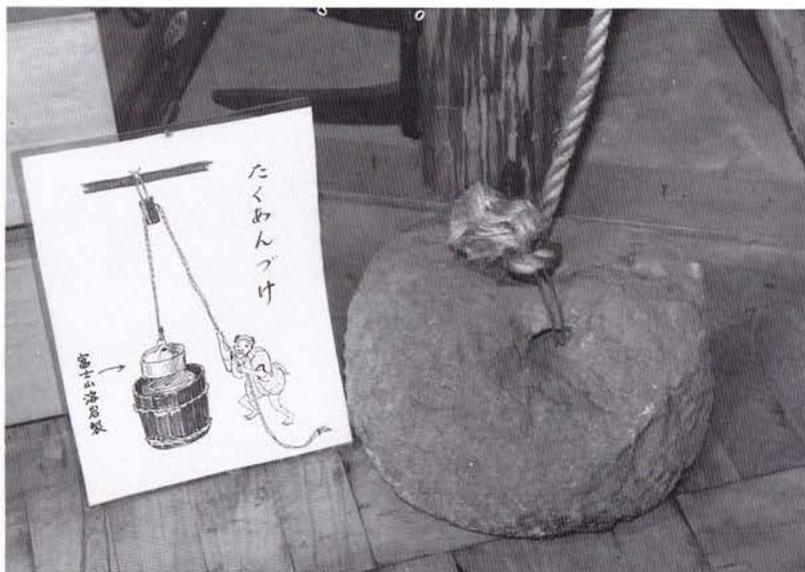
江戸のかまどは土間を背に据えました。



火 吹 き 竹

市内の一部ではまだ使われているかも知れないが、最近では、ほとんど見かけない。

石油やガスが急速に普及し始めた30年代、お役御免となり、歴史上の道具と化してしまった。かまどで燃えた薪が灰になる前に、そっと火消壺に取って、消し炭を作る。消し炭はこたつやコンロに炭火をおこすのに欠かせない。消し炭の上でほしておいたすすきの穂にマッチで火をつけ、さらに杉葉をたくと火がよく移る。その上に木炭を置いて「火吹き竹で」顔を赤くして吹いたものです。



たくあん漬と重石

たくあんは江戸時代の頃から、秋大根の「みやしげ」「ねりま」などが代表です。夏越しの物は乾燥の期間を長くするので。昔から4斗樽に漬けこみ、これに要する基準を1斗とし、糠8升、塩2升…これを2升塩といい、このような比率によって3升4升など言い、7升塩というのまでありました。一般には2升塩位が適します。夏を越す物は4升、5升塩。

このたくあん石は富士溶岩をくりぬき、写真のようにして重石として使ったものです。



伊豆石で作った電熱器

沼津市獅子浜の大久保山では採石が進んで、とうとう山が削り取られ、海上輸送で京浜方面へ運ばれて行った。石は伊豆半島の基礎をなす第三紀層の凝灰岩（2500万年～1300万年前）海底火山の火山灰が堆積したものです。その岩石を戦後物資の不足な時、写真のように加工して、電熱器を作りました。ずいぶん器用な方で裾野市にも関係あるとのこと、下田蓮台寺からわざわざ資料館へ寄贈してくださいました。

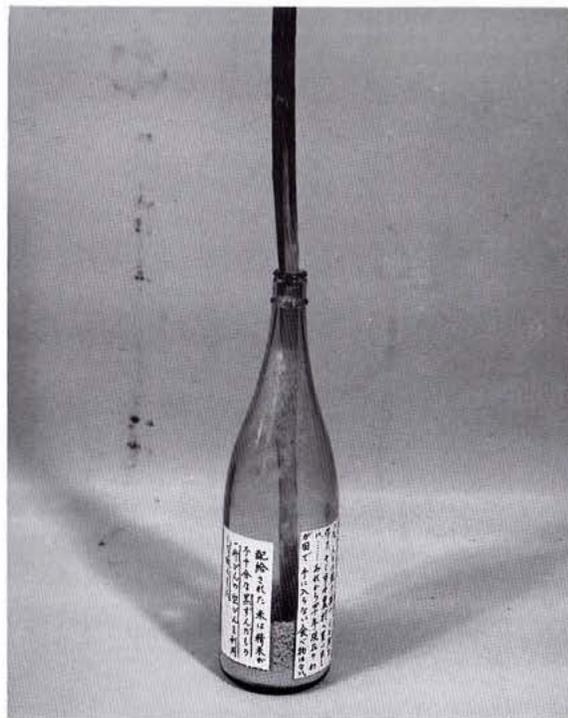


米 俵

丹精をこめて作った米は年貢米として農民の手を離れてゆく。その運搬および貯蔵容器が藁製の米俵で5斗俵、4斗俵などがあります。米俵は俵編み機で胴を作り、上下円形の棧さん俵でふさいたもので、その普及は中世頃です。これは稲束から粒の米で取めるという年貢徴収の変化によって生み出されてきた容器と言えます。

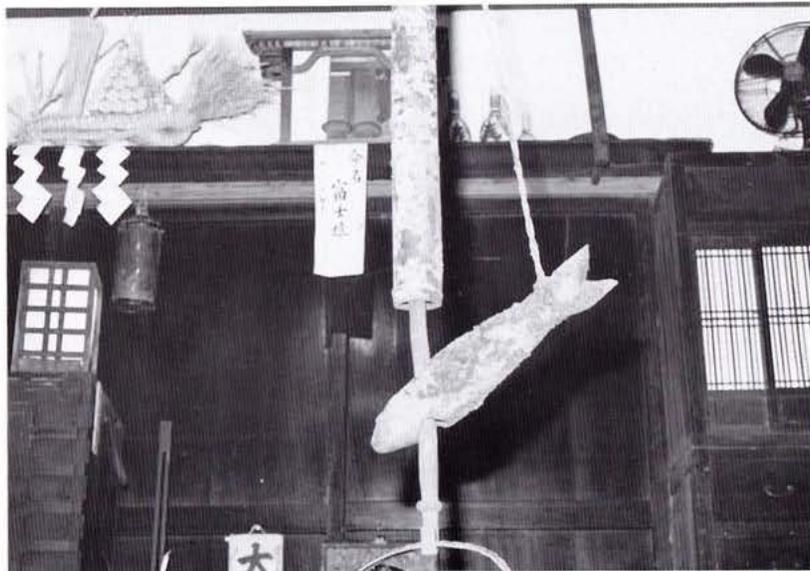
湿気の高い時の通風容器として米を守り続けてきたのです。

今では米俵で出荷するようなことがなくなりました。



一升びんの精米器

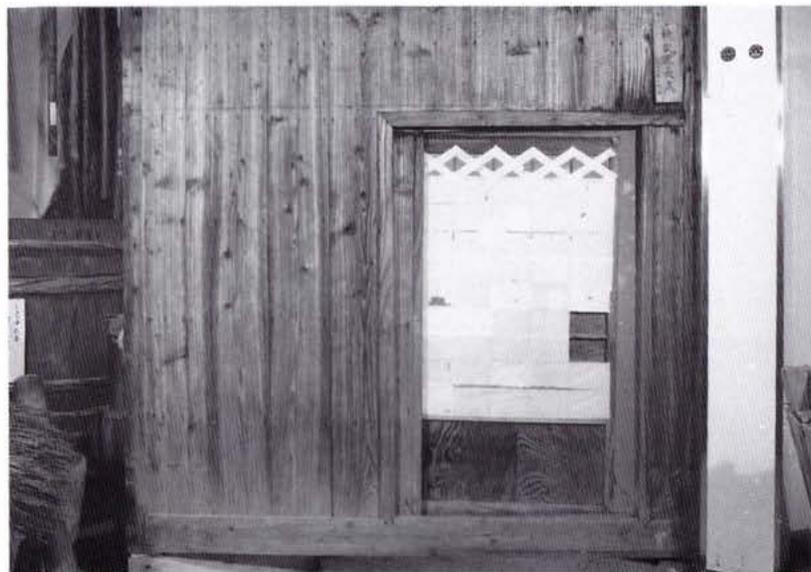
終戦の年の主食の配給は、1人1日わずか米300gでした。それも米だけの計算でなく、いもや脱脂大豆などの代用品が多く、腹ペコペコの毎日でした。農家へ衣類を運んで泣きつき、さつまいも、米を求めたり、空地にいも畑を作ったり、町にはヤミ市があり、岩波駅は、いもの買い出しの人々にぎわった時代です。配給された米は、精米が不十分でうす黒く、そのままでは幼児のごはんにはたけず、写真の一升びんに配給米を入れて、棒で何百回もついて白くしたものです。一升びんは、家庭精米器だったのです。



自在かぎ

農山村では、「いろり」が重要な役目をはたしてきました。そこには自在かぎ、火箸、灰かき、火吹き竹など用いられ、自在かぎには、竹、縄、鉄、くさりなどがあります。やや上流の民家で用いたものには、美術的にも、なかなかすぐれたものが存在します。

鉄びん、鍋など自由に上下でき、すばらしい生活の知恵であり大発明です。火の用心の縁起をかつぎ、水に関係する魚を形どり、梁には「みずき」の木をわたしてつるしました。



おおど(大戸)

農家の入口には、どの家にも一辺が一間(1.8m)の正方形の大きな引き戸がはまっていた。この引き戸を「大戸」といい、直径10cm位の鉄、または陶器製の戸車を二個付けて敷居の上をガラガラと走った。ここが玄関であり、また収穫物を土間(にわ)に運んだ入口であった。大戸には、潜戸と腰羽目のついた障子戸があり、寒い日や、夕方などには障子戸を使用し、土間の採光を工夫した。夜は障子戸の外側の板戸をしめて戸締りをした。大戸の戸締りには柱の穴に、はがき大の板をはめこんだ。貫録もあり、グッドアイデアだが農家から姿を消した。

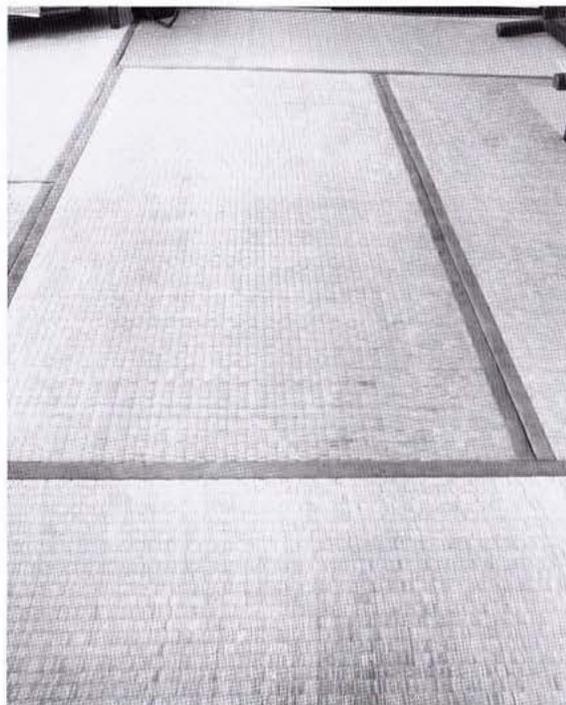


ろばたの生活

農家では台所あるいは勝手の間寄に設けてある。

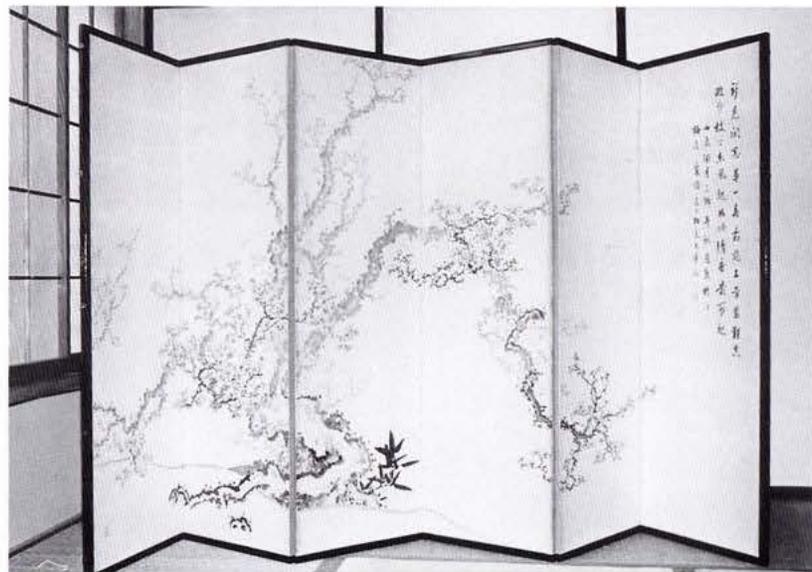
一日の休息の場所として、又養蚕、製芋、椎茸の乾燥あるいは防寒湯わかし煮物等いろりを最大限活用した。

ろばたには座る順序、且又神聖視し大種を3灰の中に埋める風習、いろりを中心として昔から屋内生活中心の場所であった。



たたみ(畳)

日本の畳はこれからどうなるのでしょうか。1部屋か2部屋はどうしても畳の部屋が欲しいといったところでしょうか。畳の語源は「たたむ」からです。起源はたいそう古いのですが、今日みるような「床」ではなく「座」でした。板張りの床の上に1、2枚置いて使う家具でひな人形の、^{だいり}内裏びなが敷いていたような、きれいなへりで飾った「座」だったのです。「たたむ」語源であることからわかるように、ふだんはたたんで積み上げておき必要なとき敷いて用いました。明治になると座敷が普及して敷きっ放しにする習慣に、一般化してきました。

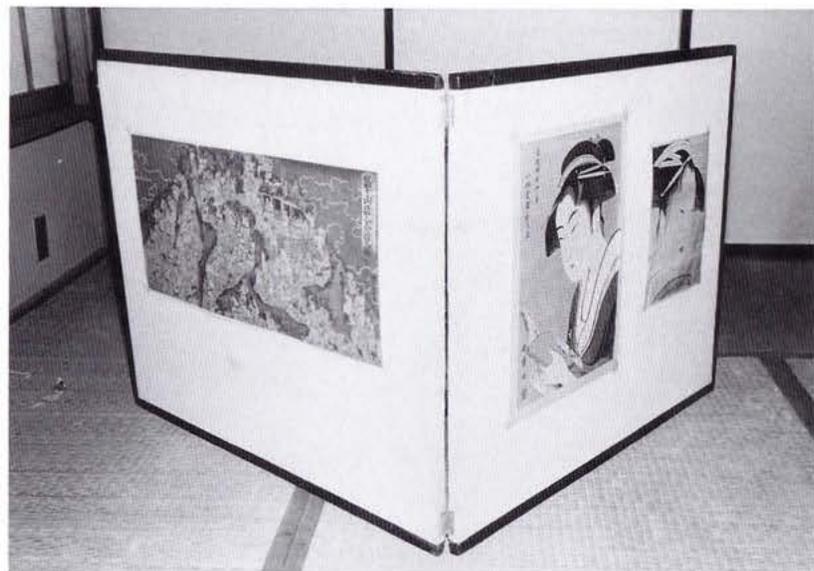


金 屏 風

破れ屏風の一雙や二雙はちょっとした家にはあったものだが、金箔張りのいわゆる金屏風ともなるとそうもゆかぬ。江戸の神田祭と山王祭、9月と6月の満月15日だが、その前の宵祭から2日、表通りの家では金屏風を飾るのが習い。とはいえ用意のある店はいいのだが――。

結局

- ――借りて来て見世（一店）へごころ後光が二日差し――
- ――気の痛む屏風を二日借りて立て――
- ――金屏風（自分）うぬがのように二日立て――
- ――という次第。



屏 風(びょうぶ)

小さな二つ折りの枕屏風、でも枕元のすきま風にはこれで一応安心できる。大きな部屋の一面をくぎり、ここに夫婦、老人、産婦の、気兼ねのない空間が生み出される。その屏風に描かれた名もない絵師のつたない浮世絵でも、日ごとと夜ごとこれに守られていると、いつとはなしに不思議と絵、絵師に親しみさえ感じる。新婚夫婦のプライベートも、この屏風が作り出した。

- ――うじつく（もじもじする）を仲人屏風へそびき（誘う）込み――
- ――屏風立てまわし仲人ちゃり（冗談）をいい――
- ――仲人の内儀ないぎおよれ（寝る）と一つ打ち――

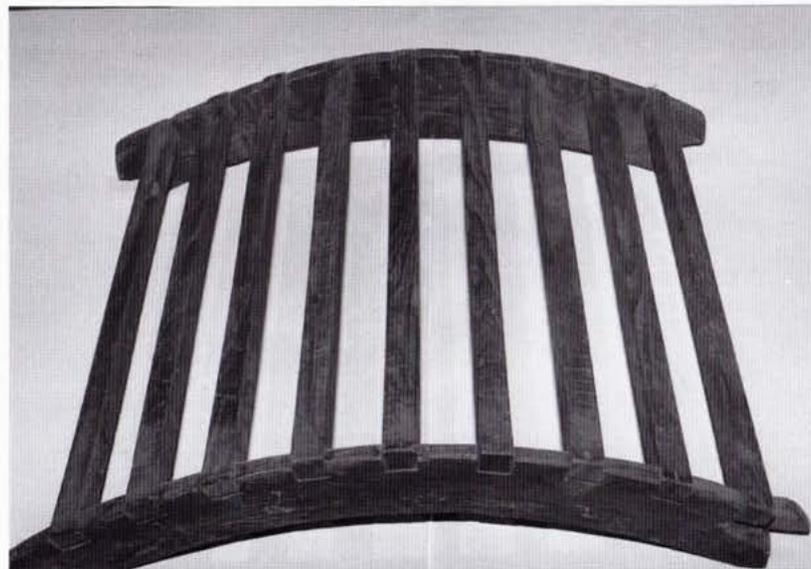


衝 立(ついたて)

農家では衝立をイロリのそばにおいて、風で火があおられぬようにしていた。

風下にいたらそれこそケムタクて目もあいていらなかった。

一家団覧のひとつき、持運びに便利な衝立を置く事によって保たれていたのではないのでしょうか。



こたつ(亀の甲)

囲炉裏やぐらに櫓こたつを設けた炬燵は、中世後期に始まったものです。このころは、木の「あて」を利用した、写真のような低いものでしたが、江戸時代になるとだんだん高くなってきたようです。

囲炉裏まきで薪を燃し、「オキ」になってから自在かぎを天井にかけ、じゃまにならないようにして蒲団ふとんをかけ、こたつにした。行火あんかは移動用の暖房具です。



い ろ り

いろりの歴史は、石器時代までさかのぼり、古い住居跡の発掘では、その炉跡の存否によって住居の性格を考究する手段ともなっています。農家では炉を中心にすべての生活が営まれてきました。

暖をとるだけでなく、炊飯のためにも重要で「かかざ」に座った主婦がその役をつとめ「よこざ」の家長は背後の神を祭った位置となり、火を司祭する祭祀者の意味のあったことも推定されます。いろりはこうして生活の中の古い歴史を語っています。



な べ

炊飯は昔は鍋^{なべ}だった。鍋にかわって釜で炊くようになったのは、囲炉裏からかまどに移ったことにある。囲炉裏の火が分離して、炊事専用のかまどがつくられると、こちらでは火のむだの少ない釜を用いる方が適していた。

麦、雑穀などを炊くには、水を多く入れて、炊いた後、その湯汁を取り、再び蒸す炊事には、鍋が便利だった。白米食が普及して湯汁を除かないで炊くには、釜を使用して重いふたをのせた。



茶 箱

茶箱は内側にブリキが張ってあり、お茶を大量に保存するのが目的で、お茶屋さんが使用するのが本来の用途であるが、その廃棄したものが家庭で使われてきた。

ブリキが張ってあることもあって、衣料の保存上、最適。湿気除けはもちろん、ネズミなどの害にもあわないので、使用するのに便利であった。茶箱の場合、本来の用途よりも、後の利用のほうに珍重されたというのもおもしろいことである。



ち や ぶ 台

食事ときに、めいめいが箱膳を運んでくれば、囲炉裏ばたは、立派な食堂になった(明治、大正)。大正と昭和の初めごろの食卓は、丸い座卓などで、「ちゃぶ台」といった。脚がたためましたので、食事が済むと脚を折りたたんで部屋のすみに片づけます。すると茶の間はもとのように広々とするのです。食事が済むと裁縫部屋に早がわり、裁縫道具も折畳式ですので折り畳んでさっと押入れに。学校から、こどもが帰ってくると、「早く宿題をやるんですよ」といって、ちゃぶ台が、脚を立てて勉強机にもなり、便利な机であり、茶の間も一室多用でした。



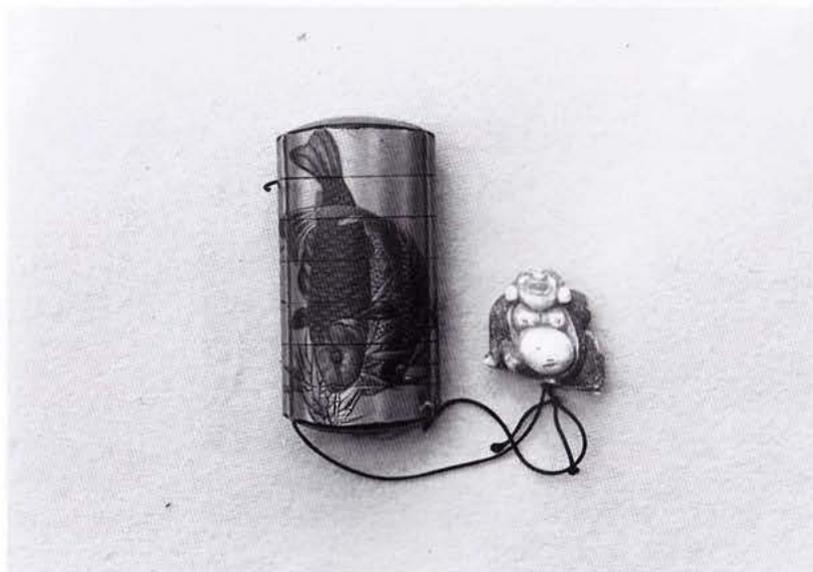
風呂敷(ふろしき)

今でも重宝されているが、江戸時代の風俗絵を見直してみると、商人、職人、旅人、主人の供をする中間や丁稚、女中などがその場で巧みに使い分けられているのにおどろく。大きい荷なら、首にかけて背負うか担い棒に通し、小さいものなら腰にまき、手にさげ、頭に乗せたり、小脇に抱えたりした。布地は木綿、麻布。この布切れは、正方形なるが故に、折り紙からいろいろ創り出された。スイカ包み、瓶包み、お使い包み、道具包み、四つ結び、ふくさ包みなどがある。日本人のグッドデザインだ。



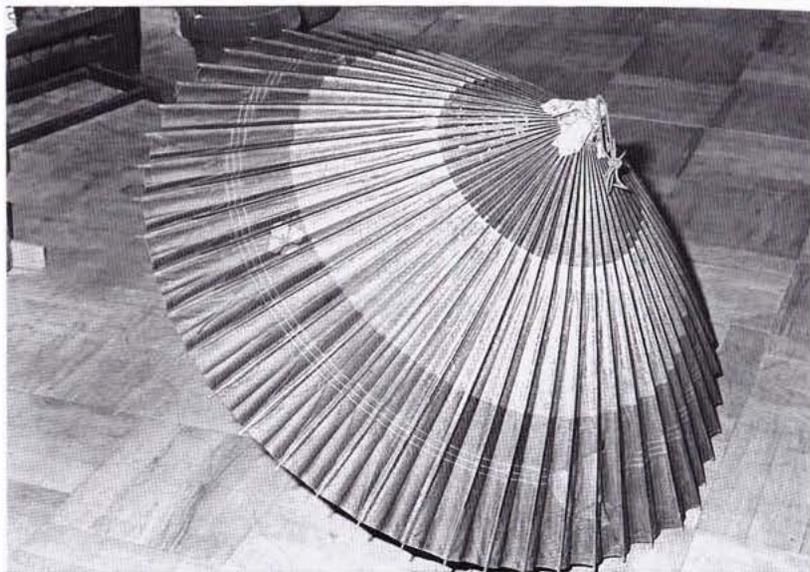
枕(まくら)

枕という字の作りは、沈むという意味をもっているので木枕が語源でしょう。材料は、ツゲ、ホオノキ、スギ、クワが使われました。草枕には、カヤ、ワラなどが使われ、木枕は後に箱枕に、草枕はくくり枕にと発達した。江戸時代になると箱枕が使われるようになり、箱型の木枕の上に小さなくくり枕をのせてしぼりつけ、底板は舟底のようにそらせ舟底枕ともいった。日本髪のかずれを防ぐためにつかわれ大正初期まで用いられ、昔の敷きぶとんの短いのは、ぶとんの外に枕をおいて寝たのです。くくり枕は主に男性に使われました。



いんろう (印籠)

印籠と書いて薬入れとは……だれでも疑問だが、室町時代の印籠とは、中国渡りで、印と印肉入れでした。当時は何によらず中国ものを棚や床飾りにすることが流行し、この10cm角ほどの重ね箱式印籠も、飾り物として珍重された。そして江戸時代になると、携帯用薬入れが流行して、中国の印籠を小型にして、ひもで腰に下げた。そしてこの薬入れも印籠と呼ぶようになった。



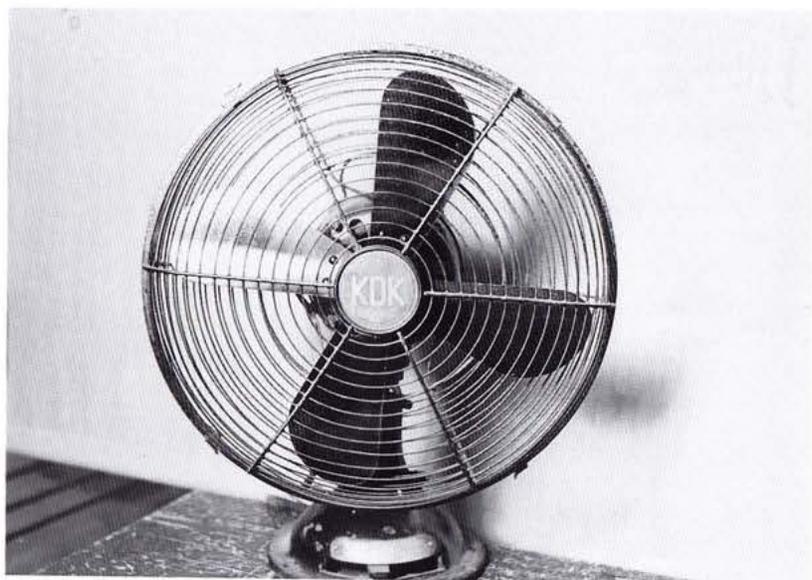
和 傘

頭にかぶる笠と区別して「さし傘」から「からかさ」とも言う。わが国では、古く、「きぬがさ」と言われる長柄傘を貴族や僧侶が使っていたが、現在の傘のように開閉のできる「ろくろ式傘」は、16世紀末、堺の納屋助左衛門がルソンから持ち帰ったと言われる。初め、庶民は蓑笠を着て雨雪を防いでいた。雨傘として、蛇の目の骨は46本、4枚の和紙を染めて張る。



玉音放送が流れたラジオ

昭和20年8月14日、わが国は、ポツダム宣言を受諾し翌15日、天皇陛下による「玉音放送」が、日本全土に流され第2次世界大戦に終止符が打たれました。その玉音放送の流れた当時のラジオ（ナショナル受信機NP-48）です。国民の奮起を促す陛下のお言葉を予期していたのですが玉音（耐えがたきを耐え、忍びがたきを忍んで……）は、終戦をお告げになった。今日の繁栄……心から英霊の冥福を祈り、いつまでも平和な時代でありますよう、平和の貴重さをいま一度かみしめたいものです。



電気扇風機

大正当時は電気扇と呼ばれていた。日本で電気扇風機が本格的に販売されるようになったのは大正期に入ってからで、関東大震災後に急速に普及し始めた。大正15年頃の電気扇の説明書によれば、「電気扇から起こる冷たい気持のよい風は三伏（暑いさかり）の苦熱（あま）に喘ぐ人々をよみがえらす神のような力がある。」と書かれている。また、昭和3年東芝製のカタログには「単に夏の暑さを凌ぐ（しの）だけでなく健康、室内の換気に効果があり、ご使用することに重大な意味があります。」とあり、価格は12インチ型金15円。



柱 時 計

精工舎の柱時計です。世界的商標（セイコー）をもつ日本最大の時計販売会社で、系列に精工舎をもち1917年に設立された会社です。写真の時計は、精工舎の設立されてまもなく販売されたものと思います。小学生の歌にある、もう動かない古時計……………でなく、約70年前の設立当時に生産され、須山の地で、チクタク、チクタク、現在まで休むことなく動いている時計です。顔の文字盤は、いろいろの煙で黒くなったのではりかえた。まだ記憶に残っているよ……………と、菅沼正さんのお話でした。昔は文字盤のはりかえ用を売っていたそうです。



オルガン

写真は、大正時代に製造され、70年間3代にわたって美しいメロディーが流れたストップ付きのヤマハオルガンです。日本楽器製造KKは、創業明治20年(1887)、わが国最古の楽器メーカーとして、山葉寅楠翁によりオルガン製造が始められ以後100年の間、その品質の優秀さと、技術革新のたゆまない努力によって、発展の一途をたどり「世界のヤマハ」として声価を高めました。本社工場は浜松市にあり、ピアノ、エレクトーン、オルガン、管楽器、ステレオ、スキー、洋弓、テニスラケット、家具、住宅機器、特殊合金などを製造しています。



ぶん すい ます
分 水 ます

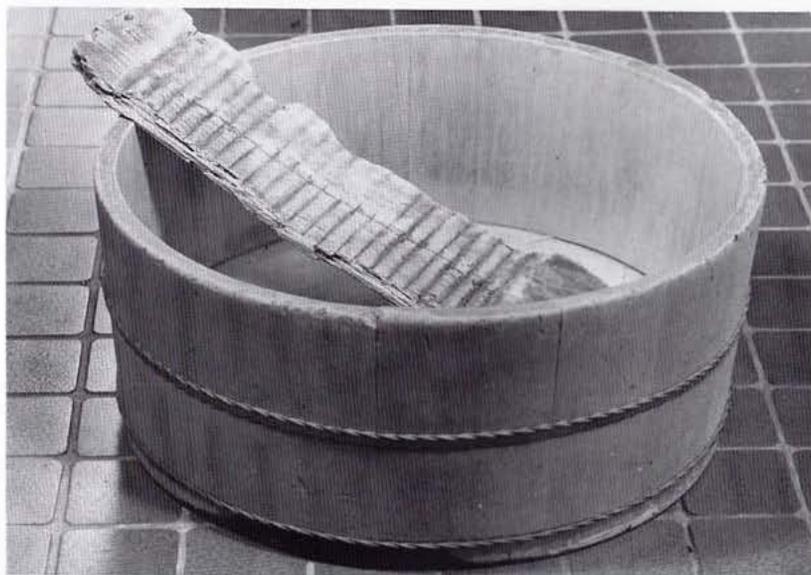
須山地区は富士溶岩流のため飲料水にとほしく、山のしぼれ水を竹どいで何キロメートルも村まで引いてきた貴重な水を、家々に平等に配るために工夫されたのが写真の分水ますです。右側の穴の大きさを1とすると、左側は5の割合になっています。小さい方が一戸で、大きな方が5戸で使用されたものでしょう。

山のしぼれ水を竹どい、土管、木管等で引いたのが冬の寒さで割れ、そのすきまからイタドリ、竹の根等が入り、つまってしまい苦労したようです。



手 風 呂

特別に作った手桶の内部片側に金属製の火入れを立て、炭火を入れて桶の中の水を保温し、冷えた手を暖める道具で、紙すきの人たちが使用しました。この写真の手風呂は、お医者さんが診察用に手を暖めたものと思われます。



た ら い

電気洗濯機の発達によって、木製の「たらい」はほとんど影をひそめた。小物を洗うには、プラスチック製のものができている。たらいは「おけ」の1種類で、材料には、さわら・ひのき・あすなろなどが使われ、洗濯用は円形で、洗濯のほかに産湯たらいもあった。こちらは楕円形だえんで、嫁の実家から、初めての子どもの場合に贈られた。共同井戸では、おかみさんたちが井戸端会議をしながら、ゴシゴシするのもよいコミュニケーションの場であったのですが……。

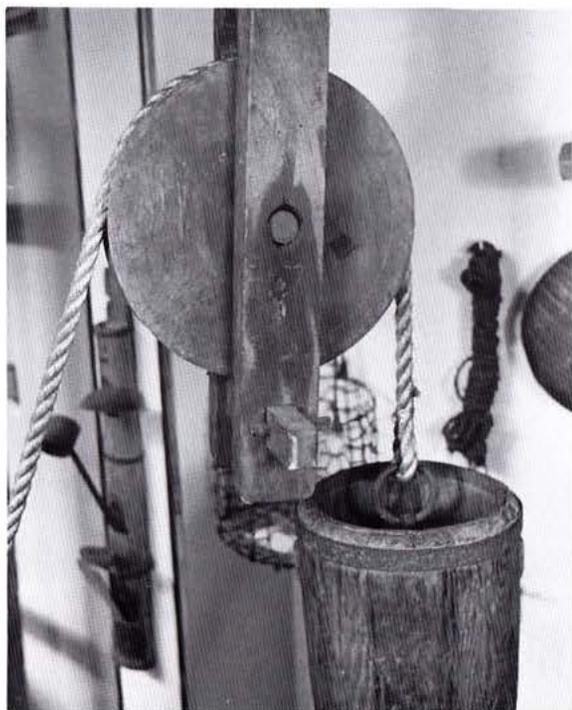


手 桶(ておけ)

古代すでに檜板の薄片を筒形に曲げて底板をつけ曲桶（椀桶）が作られ、この系統は社寺の水桶、すし桶などとして伝えられています。

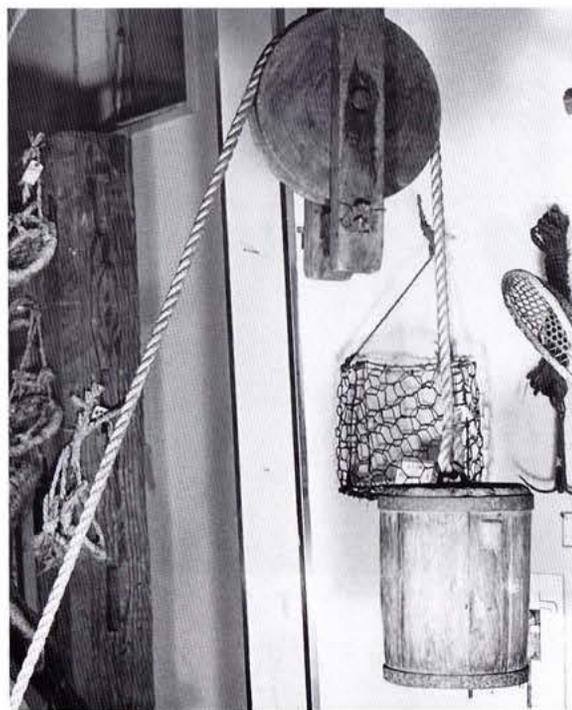
一般的には針葉樹林の板を縦にならべ、たがをはめて固定する組立桶が江戸時代に作られました。桶は火桶、水桶、風呂桶など用途が広い。桶屋は小職人で家内工業のものが多かった。

写真は、山からのしほれ水を運んだ手桶です。下の泣き輪ができれば一人前だといえます。



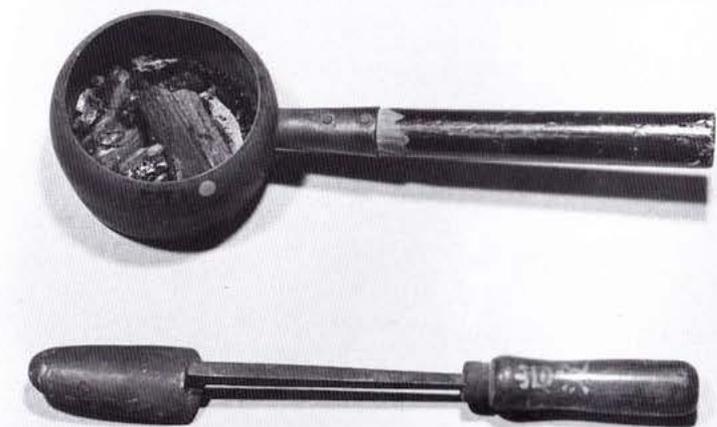
井戸ぐるま

原始的な縄文時代には、水の便の利のある地形を選んだ。弥生時代になると、1つの村の中に必ず井戸を設ける。井戸に方形、円形のわくを組んだ。裾野地方は富士山の溶岩流上にあるため、たて井戸は他地方より少ないが、深い井戸を利用するとき写真の車つるべの滑車が使われた。鉄製、木製、陶器製の別はあってもその車輪に色々なデザインをしてそれとなく飾った。井戸も最近は水道の普及でほとんど使用されなくなった。つるべおけに直接口をあてて飲む、冷たくおいしい水は忘れられない。



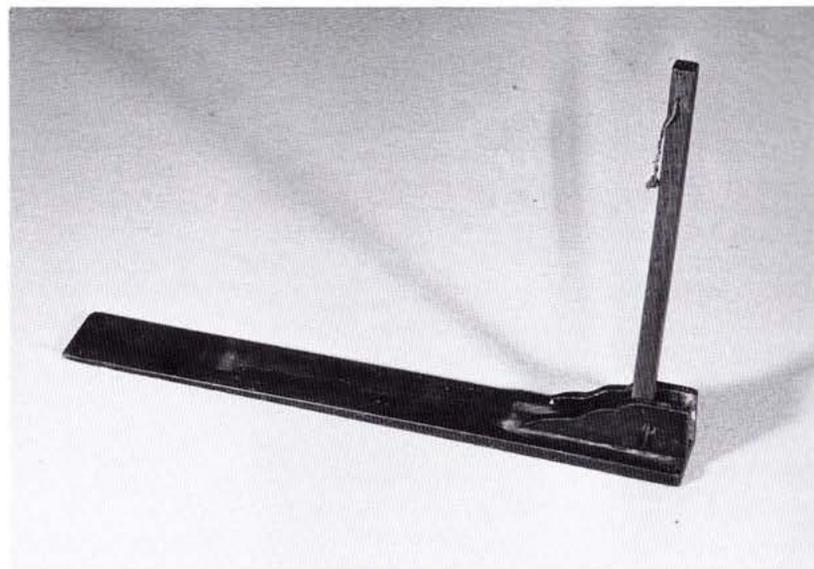
釣瓶(つるべ)

縄や竹竿の先に桶をつけ、井戸の中へおろして水をくむのは「振り釣瓶」。柱をたててその上に横木を渡し、一方の端に石、鉄などの重みをつけ、反対側に釣瓶をつけはね上げてくむのが「はね釣瓶」でテコの応用、滑車に縄をかけ(写真)かわるがわる水をくみ上げるのは、「車井戸」これがもっとも機能的です。「つるべ打ち」という言葉がありますが、鉄砲を、つぎからつぎへ連続打つことをいいます。また、秋の夕暮れはアッという間に暗くなるので「つるべ落としの秋の日」と形容しています。写真の桶は、明治製で「かやの木」で作った高級品です。



火のし と こて

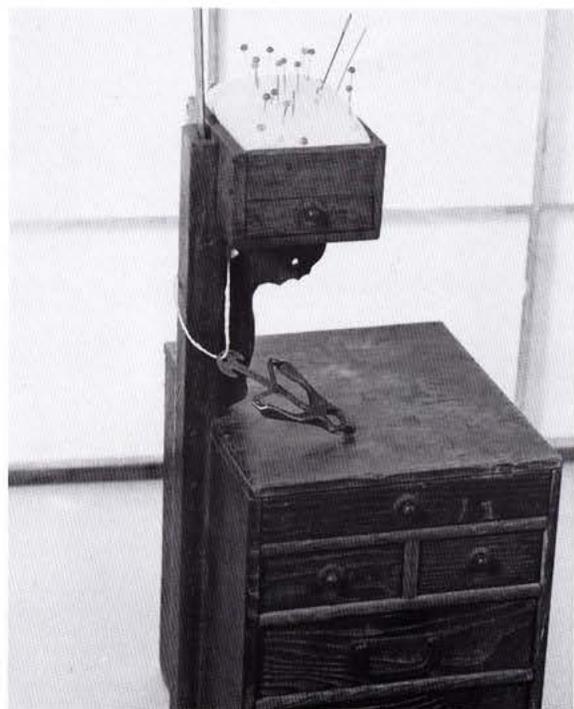
火のしとこては和裁にはなくてはならない道具です。衣服の仕上げ、洗濯後のしわのばしに使いました。火のしは「火熨斗」と書きます。銅、真ちゅうなどの金属製で浅い円形の火入れに柄がついたもので、容器の中に炭火を入れて熱くなってから布に押しあてて、しわをのばすのです。こては、熱い灰の中にさしこんであたため熱さ加減を指先につばをつけ、「ジュン」という音で判断しました。裁縫の時、ぬいしろを作るのに小さくて便利でした。昭和20年ごろまで使われたでしょうか。今では、電気ごて、電気アイロンと変わりました。



く け だ い

くけだいは、紵台と書きます。

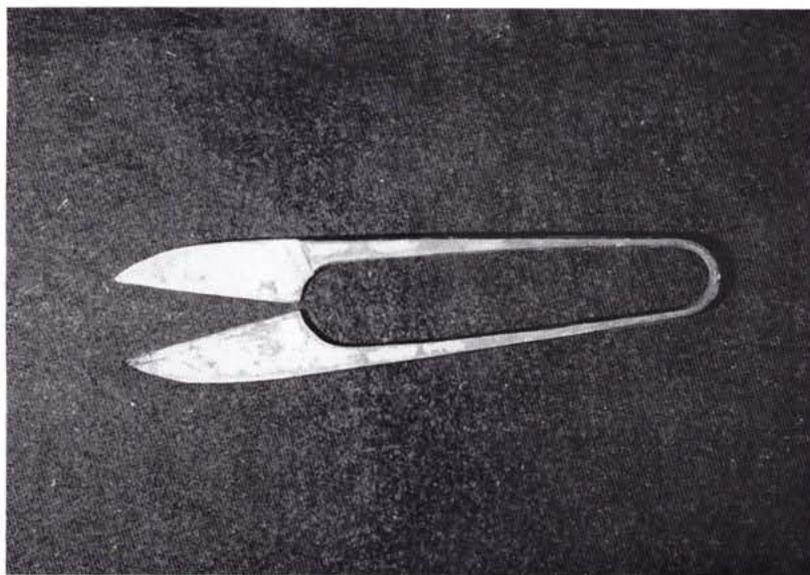
和裁にはなくてはならない裁縫道具です。折りたたみ式・作りつけのもの、差しはずしのものなどがあり、現在でも使用されていますが、和裁をやらないものには、縁遠いものです。棹さざの先端に、ぼうずを作り針山とし、針差しとして使った。針差しの中には、人間の頭の毛（髪の毛）をまるめて入れ、その上を布でおおった。頭の毛は、油があり針がさびなくてよかった。片方をくけだいで押さえ、片方を手でくけていくと、とても能率的だった。



針箱

針箱は女性の専用用具で、朱塗りの漆塗り仕上げの豪華なものや、優雅なそして趣向をこらしたものが多く、引き出しなども、大小何段もついたり、上部をちょうつがい（ちょうつがい）でふたをつけ開くようにし、中をいろいろな形に区切って、はさみ・へら・ゆびぬき・針・糸まきなど種類別に入れて、自分の体の一部として使用しました。

写真の針箱は、和裁の師匠さんが100年前から30年前まで70年間も使用した、裁縫の歴史を語る貴重なものです。



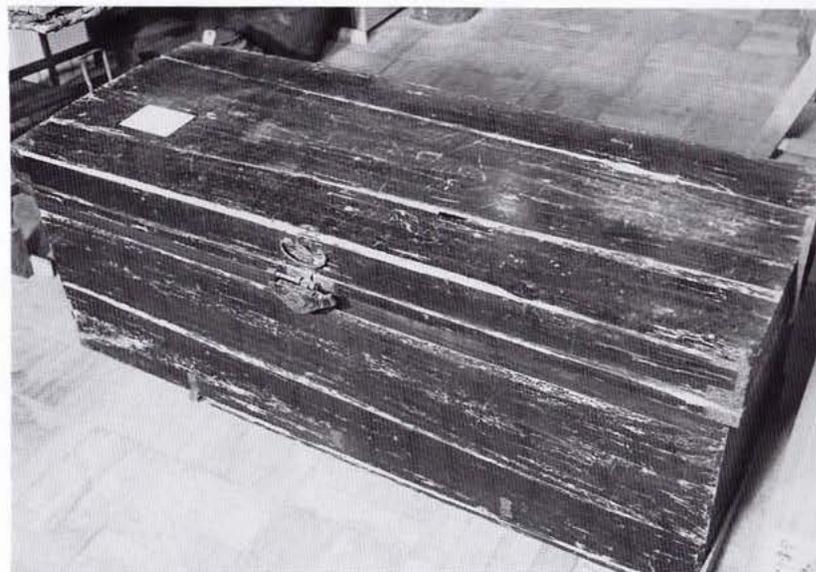
和ばさみ

今日では「和ばさみ」と呼ばれるが、元来は古代のエジプトやギリシャが起源。しかし西欧はもとより、中国でも16～17世紀の頃ほとんど滅んでしまっており、ひとり日本だけがその後も長く改良、工法を凝らして多彩な「はさみ文化」を展開した。なにより日本人の手指の働きの巧みさがそれを発展させたのだろう。しかし、長い刃で力のある使い良いロシア切り鋏が舶来されると、たちまちその座を奪われてしまった。



車付きの豪華な長持

長持は、棹きおで担いで運搬するのが多いようですが、写真の長持は、直径23cmの木の車が4つついていて、超大型で、6面たて（75cm×170cm×100cm）よことも一枚板たかきでできている豪華な婚礼道具です。約200年たったもので、婚礼の日、この長持にロープをかけ、引く人・おす人が、車を軋きしませながら、「お前～百まで、わしゃ九十九までなあ～ともにな～しらがのよ～はえるまでな～」…と嫁入り時の長持唄が、きこえてくるようです。



長 持

長持の棹で担いで持ち運ぶ担金具が付いている長持は、黒塗りが多く、ふとんや着物を入れて運ぶ長方形の大きな入れ物です。

婚礼道具として貴重品とされ、その数によって、家の格を競ったりしました。嫁入りの時の長持唄も各地に今なお残っています。長持を運ぶ荷担ぎの人によって道具類の豪華さをしめすために歌われました。

お前な～百まで、わしゃ九十九までなあ～
ともにな～しらがのよ はえるまでな～

写真の長持は総桐でうるし塗りです。

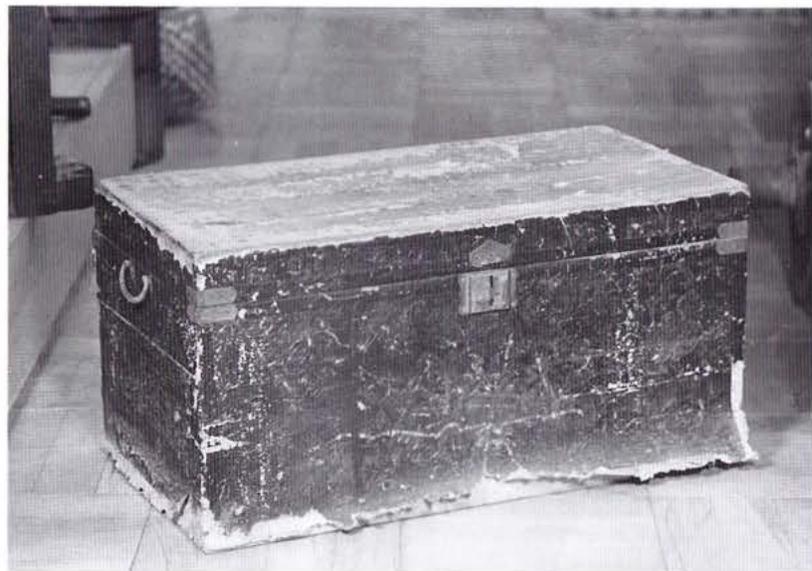


総桐たんす

江戸中期からは一番だいな嫁入り道具で、長持ちと共に欠かせないものでした。

女の子が生まれると庭に桐の木を植え20年もすると、ひとかかえもある太さになるので、嫁入りのたんすの用材に備えるようになりました。

桐は温度など自然調整が具合がよく、木肌が上品である事などから、たんす材として広く利用され、総桐、三方桐、前桐など利用度に応じた名称も生まれています。



つづら

童話「したきりすずめ」のおばあさんが背中にしょっているのがつづらです。写真は縦37センチ・横72センチ・高さ35センチで、明治から昭和初期にかけての嫁入りの調度品で、着物をいっぱい入れて嫁に来たのです。つづらは葛羅・葛籠・衣籠などを書いた。近世になると紙をはって、しぶ・うるしを塗るのでどれも黒色です。元禄のころ、葛籠屋甚兵衛が作ったと言われています。



長 火 鉢

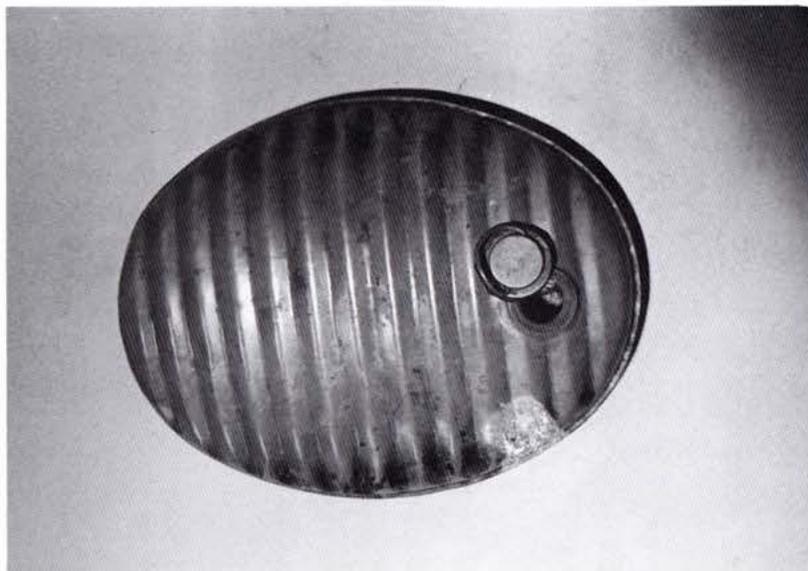
暖房具としては火を直接に用いる火鉢、行火、炬燵などがあり、わかした湯を入れる湯湯婆、懐炉灰による懐炉などがあります。火鉢の歴史は古く奈良時代にさかのぼります。火鉢の利用は、農山村の民家より都会的要素が強く薪より炭を用いることに意がそそがれました。特に長火鉢は農山村の囲炉裏に対応するものとして町家の茶の間に普及して今日に及んでいます。

今では貴重なこっとう品として扱われるようになりました。



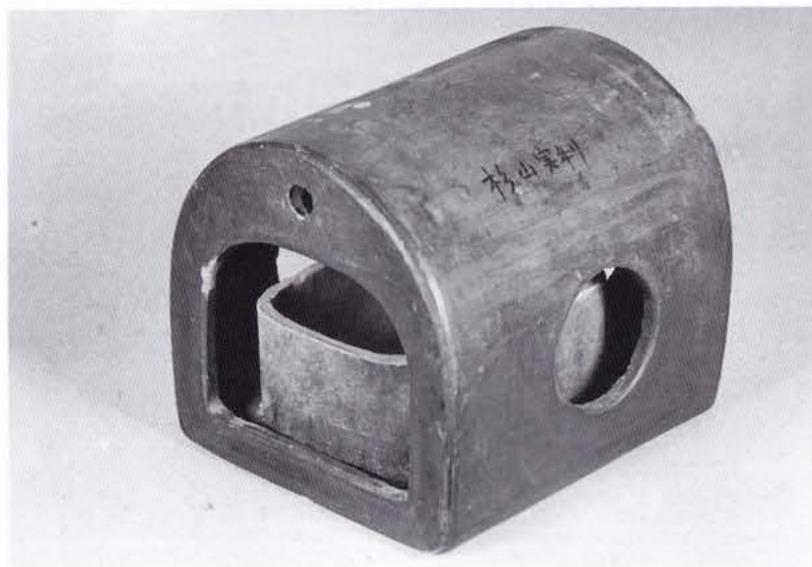
火 鉢

火鉢の中に灰を入れ、炭火を入れて用いた。日本間の暖房には重宝なもので、長所としては臭気も煙も出さず煙突の必要もなく、どこへでも簡単に移動できる。短所としては、手先だけは暖まるが全身、部屋全体を暖めることは困難だった。火鉢の種類には、木製、銅、鉄、合金、陶器などがあった。火鉢にとりすがって寒さをしのいでいた昔も、石油、ガスの暖房により忘れられてしまいました。



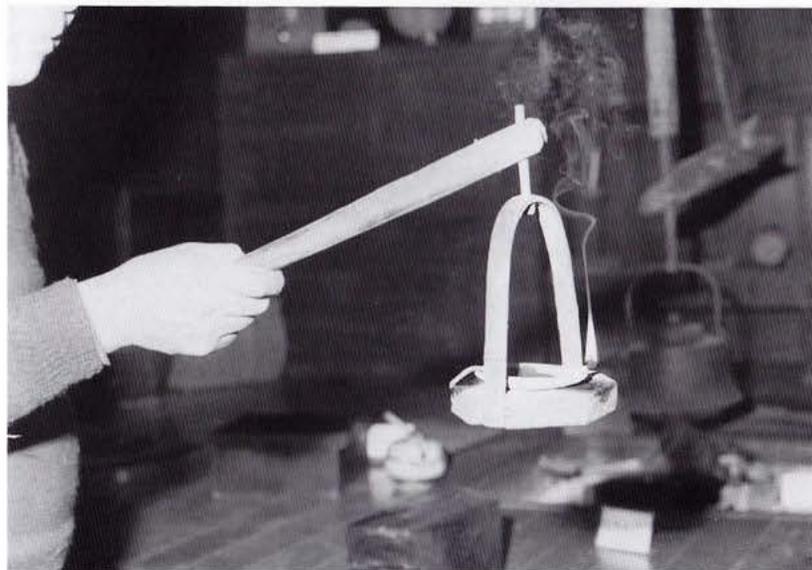
湯 た ん ぼ

トタン製の湯たんぼ。この中に湯を入れて布でつつんで暖をとった。金属製だからそのまま火にのせ温めても破損の心配はない。行火は火災や一酸化炭素中毒の心配もある。湯はしだいにさめるので、ひと晩中熱すぎて眠れないということもないので、電気時代の今日でもお年寄りに好まれている。湯たんぼの表面の波型は熱の反射をよくし、力学的にも強く熱の膨脹、収縮にも耐えるよう工夫されている。しかし、火にかける時うっかりふたをしたままだと大変！ 蒸気爆発する



あ ん か (行火)

あんかは、持ち運びできる暖房器で、こたつは、作りづけにされた固定なものです。あんかは、江戸時代に用いられたものは木製ですが、明治、大正になると写真のような土製のものが多く使われるようになった。一升ますのような形をした土製の箱の中に炭火やたどんを入れ窓のついたあんかの中に入れ、ふとんをかけ、手、足をあたため、ねるときには、ふとんの中に入れて足先の保温に使われました。現在の電気毛布、電気足温などの前身ですが、ほとんど姿を消しました。



ちょうちん

螢の光 窓の雪……卒業式に歌われる歌です。螢の光、窓の雪は勉学に用いた照明をさしていますが、両者が実際に読書の用をなしたかどうかは問うまでもありません。

でも、照明に心した古人の思いは知ることができます。

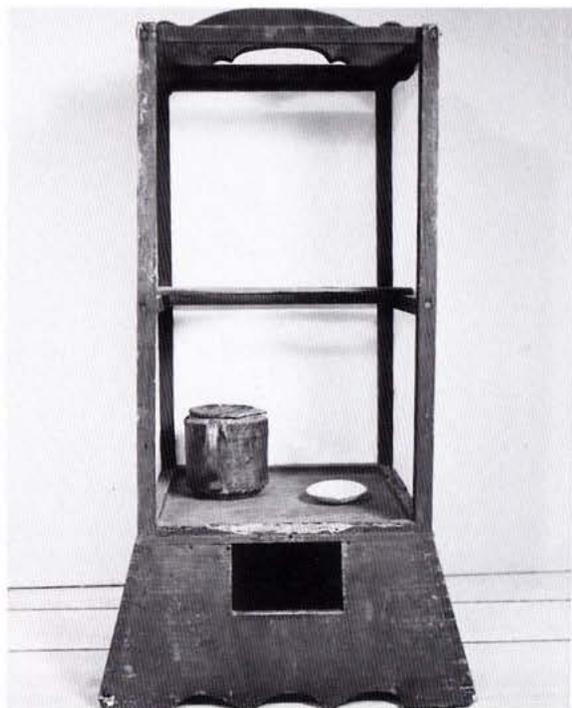
写真は現在で言う懐中電燈ですが、土間などで夜間の縄ない作業や簡単な採し物に使用されました。皿になたね油を注ぎ、灯心をともします。灯心には山吹の芯を用い、明るさをますために、へだまの油を加えたりしました。



燭台

室内用のローソク立てで、座敷の照明として使用されてきた。古くから神仏具として用いられ、しんちゅう製が多い。その他、手に持って足もとを照らす燭台があるが手燭という。

ローソクは、仏教といっしょに中国から輸入されたが、日本でつくられるようになったのは、中世で、和製ローソクは、ウルシ・ハゼなどの木の実にからとった、脂肪を原料として作り貴重であったためあまり利用されず、明治となって西洋式のローソクが販売されるようになった。



行^{あん}

燈^{どん}

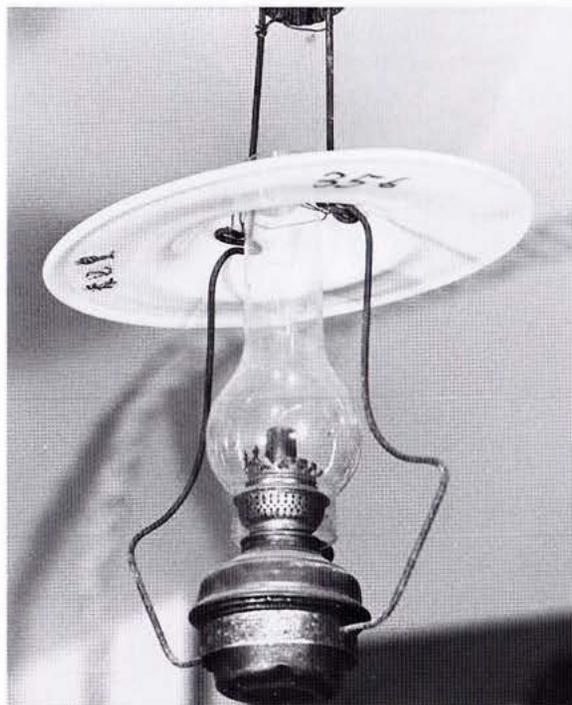
油を燈心でともす照明用具。竹、木の角形円形のわくに紙を張り、中に油皿をいれて火をともした。燈油には、菜種油、魚油など用いられ、明るさを増すために「へ玉」の油を入れた。元はさげて歩いた照明具だが、後にはもっぱら室内において用いた。

用途によって様々な種類がある。夜の明け方までともしておく有明行燈、屋号などを書いて家の入口や店先にかけておく掛行燈、木製の燈籠形の街路に立てられた辻行燈などあった。



油 さ し

「あんどん」などの油皿に油を入れる時に重宝なもので、油さしも貴重なものでした。容器としては瀬戸物・ブリキ・銅器などが使われ、大きな「あんどん」などの下の方に置かれていました。この容器がなければ、びんから直接さすか茶わんを使ったりして油をささなければならず、こぼしたり、尻に油がまわって困ったことでしょう。油さしのことを「あぶらつぎ」の名称もあります。



ラ ン プ

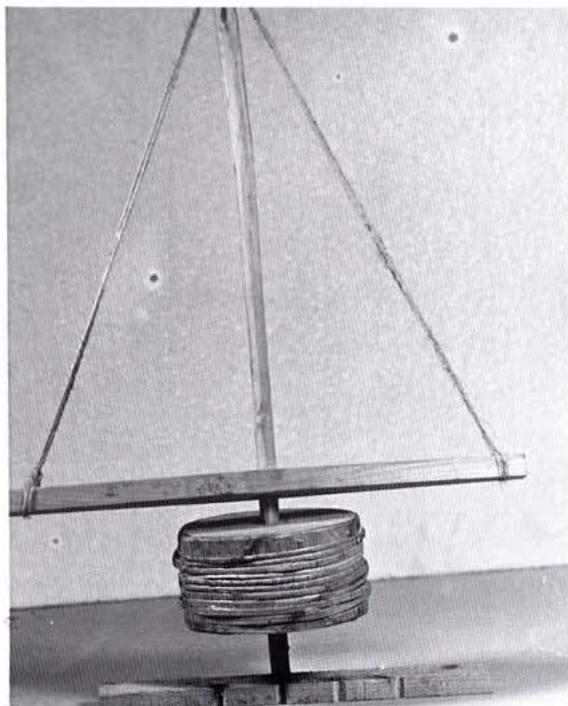
外が明るくなれば起き、暗くなれば炉辺で夜なべ仕事でもして寝る。炉辺仕事をしない晩には、灯をともし家も少なく、囲炉裏の燃し火が、この家の照明であった。燈心、^{あんどん}行灯の時代からランプになるが、石油は燃える水と驚異の瞳を向け普及し、本もよめるようになった。乳飲み児でもいると、ランプの芯を下げて、火を小さくし就寝時でも、ともしつづけたので、煤けたランプのホヤ掃き日課がどこの家でも子供役となった。小さなホヤ口から大人の手先は入らないが、子供ならポロ布を指にはさんで、ホヤの内側を器用にふけた。



カ ン テ ラ

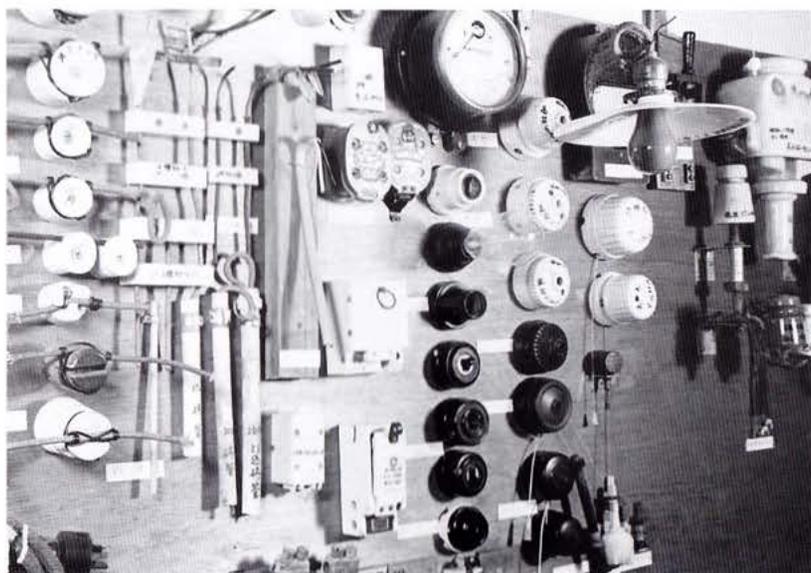
カンテラとは「広辞苑」によると、オランダ語で、ブリキの油つぼの中に石油を入れ綿糸をしんとして火を点じ携帯用とある。写真のカンテラは山小屋用です。縁日の夜、神社や道ばたで、カーバイトの匂いも強く、2つのノズルからハの字形に炎がでて、カンテラが輝いていたものだった。その匂いをかぎに行くのも楽しみでした。今では、どこの祭りも電燈にかわってしまいました。

「富士山測候所の50年」中島博さんの著書にも、カンテラ日記というのがあるが、富士山頂の測候所も気象観測の照明用に、懐中電燈が市販されるまで使ったそうです。



火 き り 具

人間が火を意識的に利用するようになったのは、万の年数をもって数える遠い昔のことです。その頃、人々はどのような方法で火をおこしたかは不明ですが、縄文時代では、住居跡の炉ばたの石に小さな凹みが多々見られることがあり、これは火をおこした跡だと言われています。発火の方法はきり揉法、摩擦法、火打石法などで、きりで孔をあける時と同じ方法で、棒状のきねとその受け台の臼とからなり、手で揉むのと舞きりといって弓を使う方法がありました。



昔の電気器具

わが国で、初めて点灯されたのが明治11年、当時は文明開化の象徴でした。室内の照明用で、一戸に1、2灯あるだけでした。もちろんコンセントではなく定額制といってきめられたワット数だけしか使用できませんでした。電球は、空気をぬいた後のあるキューピーさんの頭のような電球でした。また、戦時下に使用された真下だけを照らす電球、大正、昭和初期に使用した内外線の器具など電気屋さんが時代別によく収集し保存したものです。

(2) 生産・生業に用いられるもの



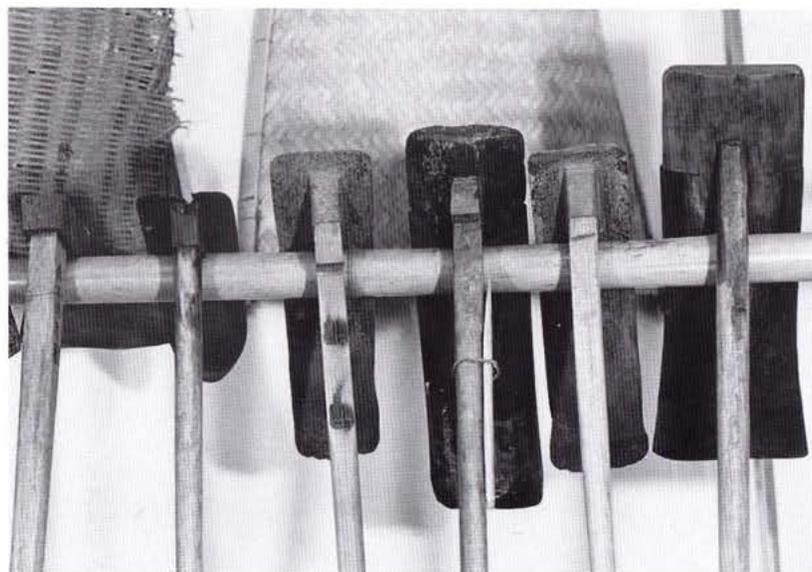
芝切り用のへら鋏

大野原の民地に自生する芝を、写真右のへら鋏（角度30度・刃巾21cm）で、1枚（1尺×1.5尺）1枚切り、12枚を1束（半坪）にして、1日1人100束～150束、体を「くの字」にして切り、竹のすこのこの台の上に芝をのせ太鼓を打つようにして土をとり、馬力で山だした。ときには、御領地に入って憲兵に注意されたりしたそうです。今では、機械化され、手間の掛からない省力作物で、ゴルフ場と間違えるほど栽培され、生産・品質とも日本一の富士芝です。もちろん裾野市の農業生産高では第1位です。



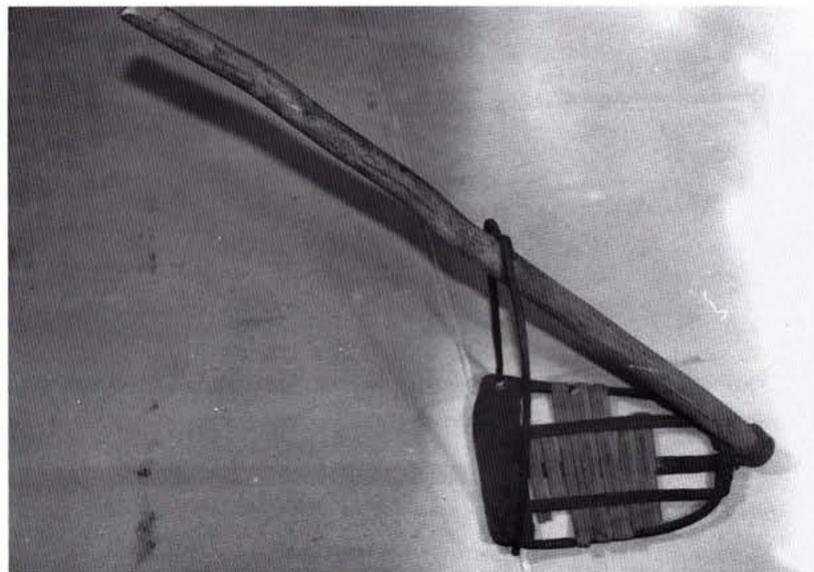
ひら平 鋏 鋏

平鋏は、改良鋏・金鋏とも呼ばれ、江戸時代の風呂鋏（木でできた風呂の部分に、鉄の刃先をはめたもの。写真右側）を原型にして、発達してきたものである。明治時代の後半から大正時代末期にかけては、全部鉄でできた平鋏が発達し、今までの風呂鋏とすっかり入れかわってしまった。平鋏は「うなう」「さくる」「よせる」といった畑作業において現在でも使われ、使いよい鋏とするには柄の角度が重要で、裾野地方のように火山灰（黒ぼく土）のかるい土の畑作業では、52～54度ぐらいがよいでしょう。



鍬(くわ)

畑うないは、重労働であり、その苦勞は、全部自分にかかってくる仕事です。使いこなした鍬は、農民の体の一部であり、大事にされてきました。昔は家族それぞれに使う鍬がきまっていました。刃先のさびた鍬は農民の恥だった。逆に、刃先のひかる大型の重い鍬（風呂鍬）を使いこなし、人より多くうなうことが自慢だったのです。写真のような鍬かけが、土間や物置の壁面の高いところに設けられてあるのは、湿気から刃先がさびるのを防ぎました。その自慢の鍬をかついだり、しょいこにつけて野良へでかけたのです。



じょれん

これはえぶりと呼ばれる道具といっしょに炭焼きに用いたもので、炭焼きがまから出した炭が燃えきらないように、土をかけるのに使われました。製炭が行われなくなってからは、泥あげなどに転用されています。

写真は先端鍬を用いていますが、かつては、すべて木製でした。木製のものはしばしば燃えるため、炭焼きがまのそばには火消し用の水槽が用意されていました。



へら

県東部には、「馬鹿土」^{ばかつち}とよばれる火山灰土の畑作地帯がひろがっており、秋になると野良のあちらこちらで畑うないがはじまる。畑うないのとき、鍬先に土が付くと土への通りが悪くなるので非能率的になってくる。時々この「へら」をつかって土を落とす必要があった。わずか10秒そこそこだが、腰をのぼしたりして休息にもなった。へらは、鍬の柄に針金、トタンなどでさしこめられるようにしてあり、人によっては「へら」にひもをつけて腰につるして使用した。「静岡県方言誌」によると「かきぞき」・「くわはらい」などと呼ばれている。



からさお(くるり)

通称くるりといい乾燥させた豆のサヤをたたいたり、麦の穂をたたいて実を取るときに用いた。

むしろの上一面に麦の穂などを広げて3～4人でカラサオで打って実を落したりする。



足ふみ縄ない機

わら細工は、言うまでもなく柔軟で細工がし易いわらを材料としたものです。

基本技術は組、編、織の三つであるが製品は多岐にわたり、縄、履物、むしろ、こも、容器、家具、被服、信仰用具など大まかな分類である。

縄といっても太さで細縄、中縄、太縄があり、荷縄、引縄、しめ縄もある。

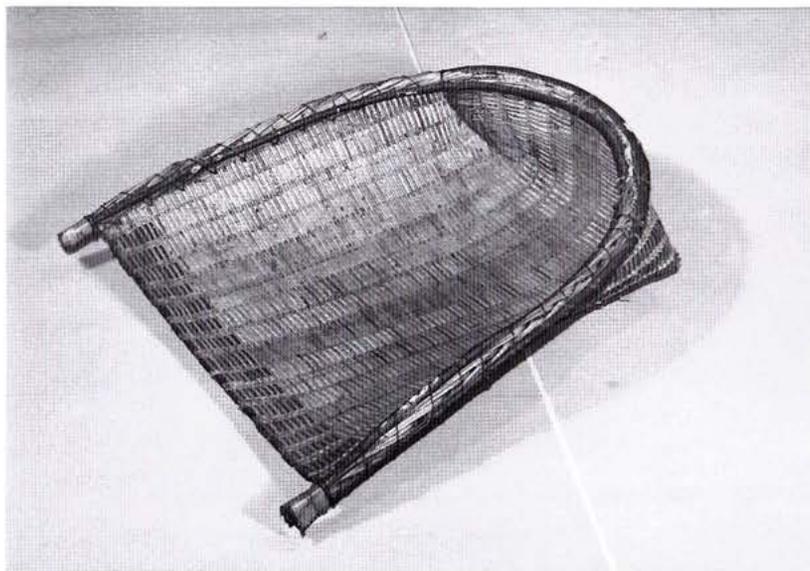
また、縄をなう基本として、左ないの左縄、右ないの右縄があり、加えてそれぞれに二本ない、三本ないなど本数の違いもあげられる。



俵編み台

雨っぶり仕事に、農家の土間で、年よりが小づかいかせぎに、すみ俵編みがよくおこなわれた。大野原のすすきが材料で、一人一日、15枚～20枚編まれたが、現在は紙袋になった。

社会科見学に来た小学生が「おじさんこれ何するもの」と質問。「これはね、炭俵を編むものだよ」と答えると「炭俵って何？」…「そうね、炭を入れる袋だよ」…しばらく考えていた小学生が「炭って何？」と、さらに質問された。いそいで炭を購入展示した。



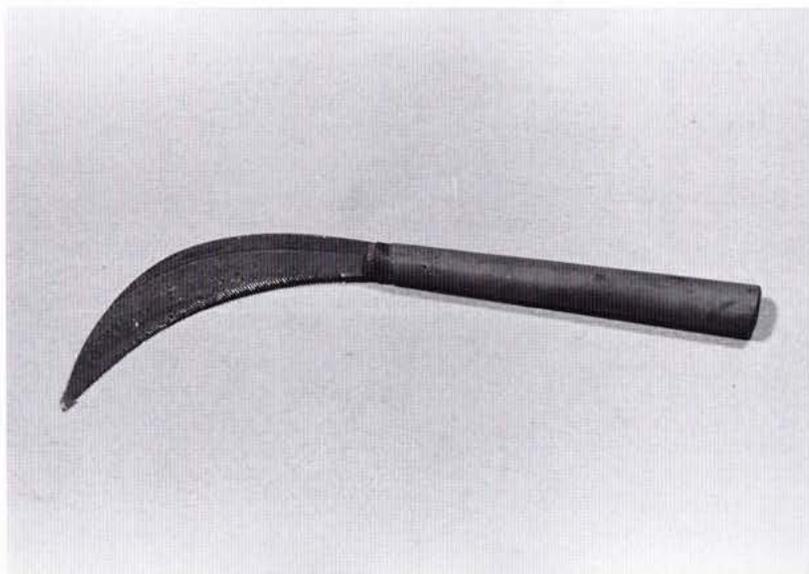
み(箕)

半楕円形をし、前方を開いて、三方に縁を作った容器の一種で、藤、竹など弾力ある材質で作られています。穀物の殻、ごみ、実などをえりわける他、運搬や乾燥などにも用いられていました。容器として一方に縁がないということは、こぼれやすいということですが、箕は、そのこぼれやすいという形態を利用して、選別しています。すなわち「ひだす」という動作はその上下に振動させることによって、軽い物を箕の外にふり落とす選別法です。生活の知恵である。



ふるい

ふるいは、浅い縁を持つ円形の容器の底に竹・つる・糸・銅・鉄線などで、網目をつけたもので、この中に穀粒や粉を入れて、ふりわけるものです。江戸時代の中ごろから普及し始め、カナドーシの名称のように、徐々に金網のものが作られてきた。その目の大きさによって、荒どし、中どし、米どしなどがあり、年貢米のちみつな規格化によって普及してきた道具といえます。



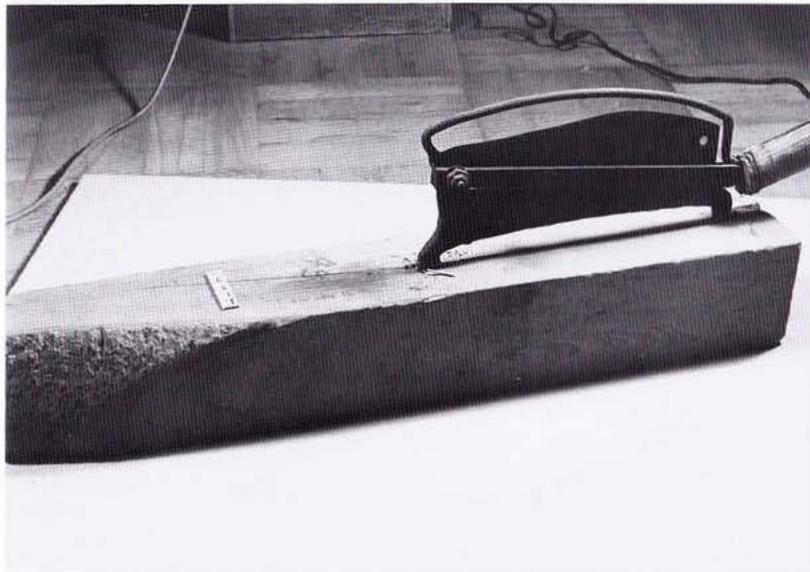
のこぎりがま

稲の刈り取りには、穂刈りと、根刈りの二つの方法があります。穂刈りは穂だけを刈り取る方法で、東南アジアでは今日も広く行われています。日本でも古くは石包丁による穂刈りが行われていましたが、奈良時代の頃より鎌で根元から刈り取る方法が始まり、現在に至っています。日本では藁わらの利用が早くから盛んであったことも、根刈りが行われた理由です。稲刈りは、草刈り鎌を使用することがありますが、柄の長さが20~30cmと短かいのこぎり鋸のような刃をもった「ノコギリガマ」で柄の方向（手前）に引くようにして稲を刈ります。



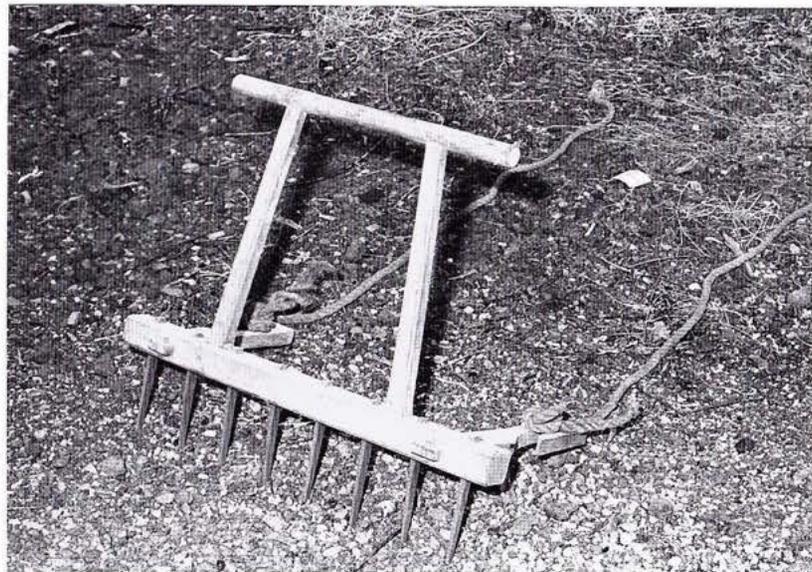
草かりがま

草かり（乾草刈り）は7月下旬から8月いっぱいかけて行う仕事である。大野原に生い茂るすすきを刃渡り一尺~一尺二寸。柄長五尺程の大きな鎌で、朝食前（朝草といった）に堆肥用にするため馬力で刈りに行った。また、天候のよい日を見計らって2、3日乾かし、乾燥したのを束ねて冬季の牛馬の飼料にした。戦時中は強制的に軍隊へ出させられた。炎天下の仕事で重労働であった。現在のかやかりは、12月~2月ころまで、機械でかり、茶畑、みかん畑へと敷くようである。



押し切り

押し切りは、どの農家にも1台はあった道具です。馬や牛を飼っている家では、ワラを切ったり、飼葉を切ったりするのに欠かせない道具だったのです。昔はワラでつくられたものが多く、写真の「押し切り」の用途は広がった。「飼葉きやあばを切ったかー、切っておけよー」と、小学生の高学年、高等科の子どもは、学校から帰ると飼葉作りが日課だった。「押し切り」は非常に危険な道具で、指を落してしまう事故もかなりあった。昔の人びとは、ワラ一つ切るのにも、なんとか能率的にと、頭をしぼって新しい道具を考案したものです。



まんが

稲は農作物の中で、もっとも重要なものでした。春、農家は苗代を作り、ここに前年収穫した種もみを播まきます。次に田ごしらえが始まります。牛馬を使って、すきで田を起し、肥料を入れ、写真のまんがでかきまぜ、平らにするのです。そして田植えの季節となります。まんがは牛馬にひかせて田畑をならす道具です。



すき(犁)

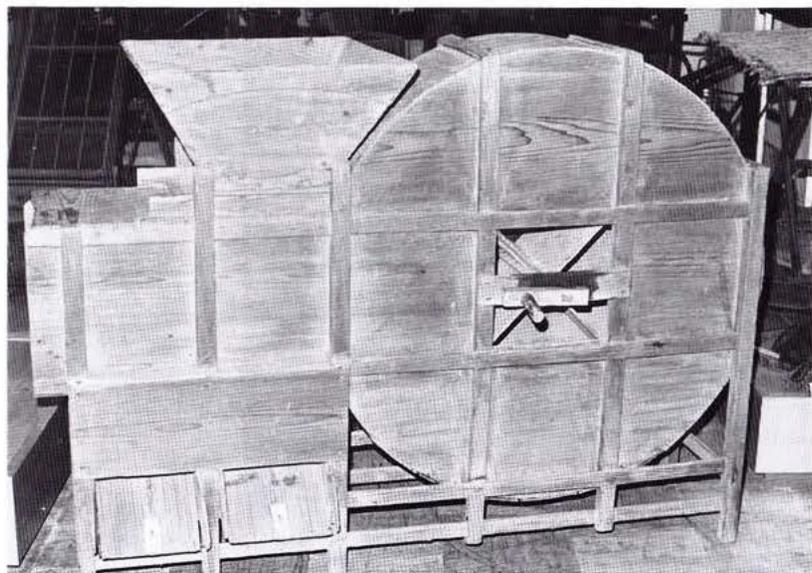
明治の中期、各地で改良、考案された刃先とヘラが固定されているため、土を一方の側にしか反転できなかった。しかし長野県で研究、考案され、刃先とヘラを左右に変えられる装置をそなえたため、耕地の往復で土地の反転方向を常に同じ方向へもっていくことができた。松山双用犁として大量生産され、最も多く用いられた時期は終戦ごろですが、畜力による犁は、急速に耕運機と替わられました。



ころがし

昔から「米」の字は八十八と書き、一粒の米でさえ八十八回の手がかかっていると言われた。農作業はなみだいていのもではなく、稲作の管理は水と除草と施肥と鳥獣の防除にあたり、それぞれの道具が工夫されてきた。

除草の方法は指の先に竹筒、ウツギの筒、虫の巣等をはめたり、カンヅメが工夫され長い間使われてきたが稲の葉先で眼、鼻をつつかれながらの作業で容易でなかった。明治以後正条植が進んで写真の「ころがし」が一般化した。現在は化学除草剤なので使われることが少なくなった。



とう 箕

唐箕は、三角形をした落とし口、長方形の筒、円形の風起こしの3部分からなり、^{もみ}すりのすんだ後の米を玄米、^{もみがら}しなす、^{ぬか}などに風力で選りわけの道具です。

ハンドルをまわすと、風車から風が送られ、そこへ上から玄米を落とせば一番口から重い米、二番口から軽い米、横からはすり糠、ごみなどが出ます。

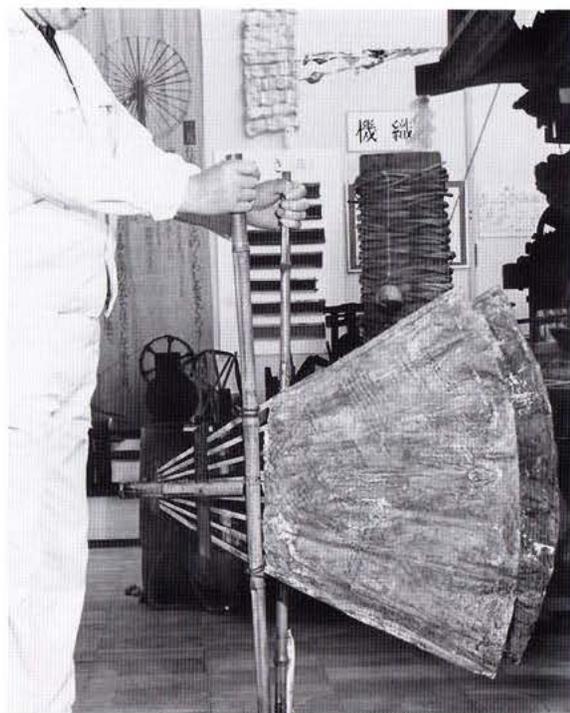
写真は紀年銘のある唐箕としては日本で四番目に古いものです。(安政4年製作)



万石どうし

米は稲→^{もみ}→玄米→白米の順に精選されます。このうち^{もみ}から玄米にする段階で使用されるのが「万石どうし」で日本独特の農具です。

玄米は^{もみ}より重くて、すべりやすい。網の上を^{もみ}と玄米の混合物が流れ落ちる時、玄米は沈んで下層に達し網目を通してのチャンスを与えられるが^{もみ}は上層を浮いたまま流れます。この事を工学語で滴下成層作用（ストラティフィケーション）といい、250年前に発見したことは日本人の世界に誇るべきことです。

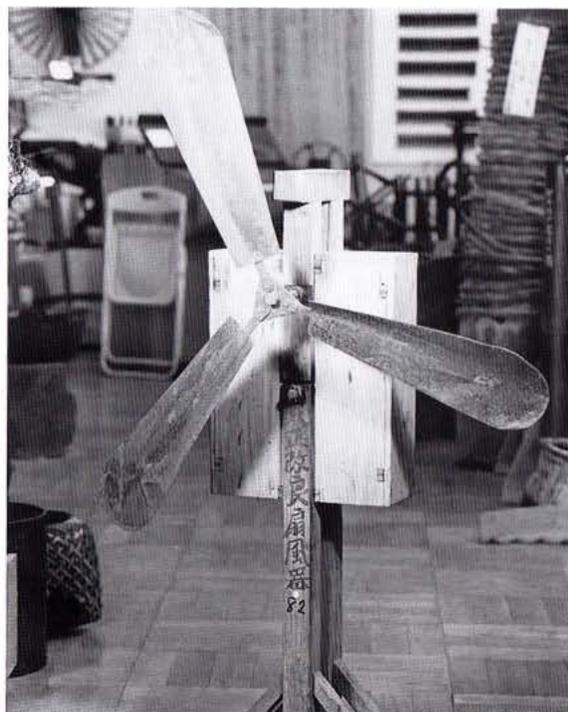


あ お り

家に運び込んだ稲は、千歯ごきで脱穀され粃にします。そして庭にむしろを敷きつめ天日乾燥させ（3日間）乾かし、粃は、唐臼で摺り取られ、さらに箕とアオリで粃穀と米に分別されます。穀物の実と穀を選別する時、風をおこす大型の団扇のことをアオリと呼びます。

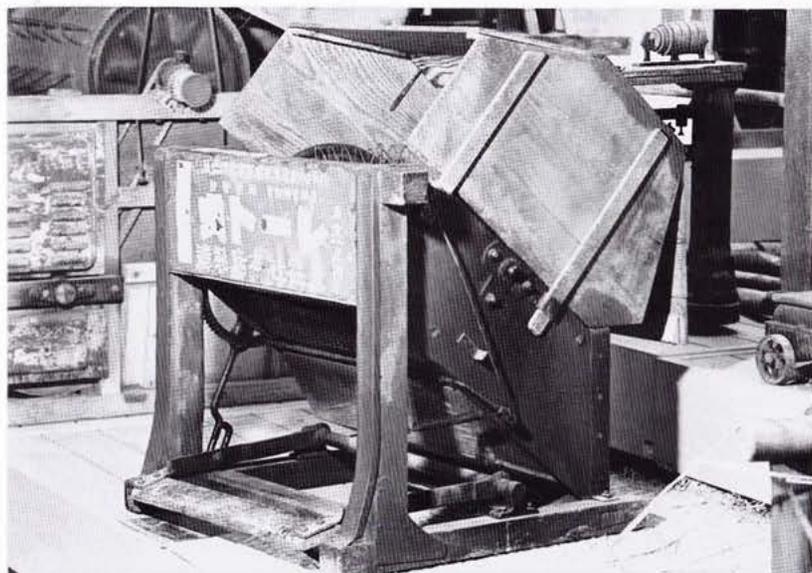
アオリは、竹の支柱によってつながれた2枚の団扇の取っ手を動かすことによって、風をおこします。

その後唐箕や、手まわしの扇風機が発明され急速に転換しました。



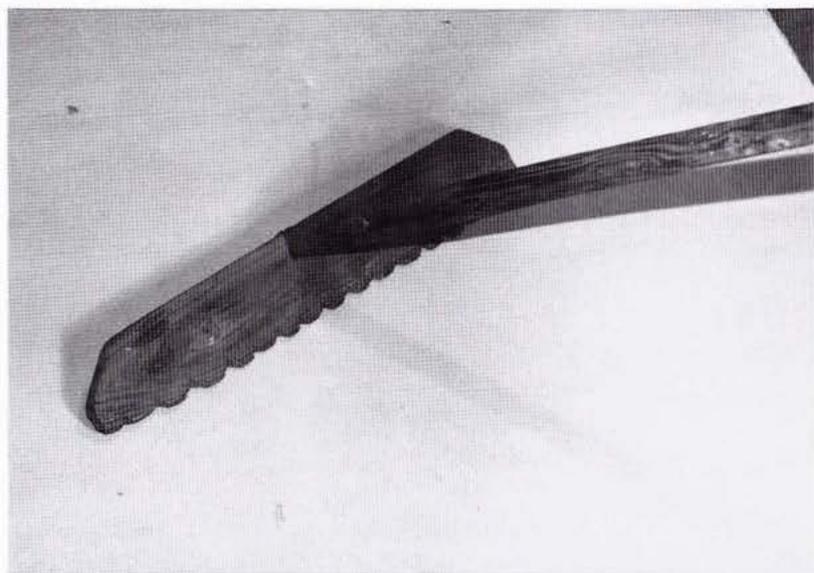
農 業 用 人 力 扇 風 機

扇風機は、天保3年（1832年）の「偽紫田舎源氏」に見られるが、その後明治18年の「納涼団扇車」の考案にも見られる。脱穀のときなどには、この機械を人力で回し、扇風機の前に脱穀したゴミ混じりの穀を箕に入れて、少しずつ肩の高さから落としてゴミやもみがらを吹き飛ばした。機械化された今日では、奇妙にさえ思われる農具である。貴重な機械のため共同で使用し、どの家にもあるというものではなかった。



回転式脱穀機

脱穀用具を歴史的にみると、弥生時代の脱穀は、石包丁で穂刈りし臼に入れてつき、粃をそぎ落した。平安時代の初期まで続いた。根刈りにかかわると「扱き箸」という道具で、穂首をはさんで引いて米粒をおとしたが能率が悪く熟練が必要とされた。江戸時代の中頃になると、扱き箸に代わり、より能率的な「千歯扱き」が考え出され、10倍といわれるほど飛躍し、大正の頃まで使われた。(種粃を取るためには、昭和30年頃まで)明治末頃には、写真の「回転式足踏み脱穀機」が発明され、千歯の20倍の能率を上げ、終戦頃まで利用された。



えぶり

えぶりは全国いたる所で用いられています。

田植えの前、田をならすのに用い、また穀物などをむしろにほす時、むしろいっばいにこれで広げていきます。塩田などでも使われ、田面に砂を広げる時に用いられます。

現在でも小、中学校では、運動会前や霜どけよけに砂を広げたり、集めたりするのに利用しています。

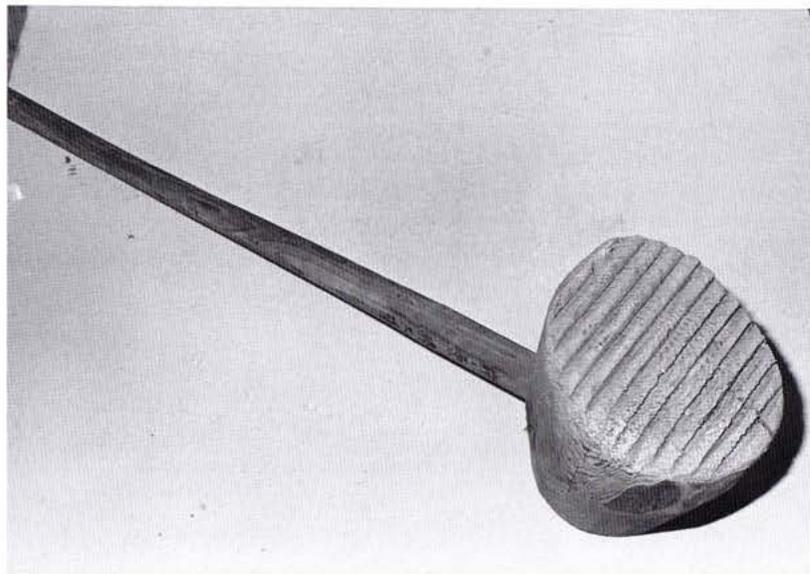
たいへん便利な道具です。



く ら い ぬ け

白ひき（土白ひき）で玄米と粳穀（もみがら）に分けた後、玄米を良質のものと不良のものに選別し、この良質なものの粒をそろえる。それが終ると俵につめる。

この俵づめの作業のときに、このくらいぬけを使う。竹で編んである写真の漏斗（じょうご）をくらいぬけという。



鬼 歯(おにば)

鬼歯は、稲の小打、大豆のこなしなどに使われたもので、横杵の頭部に鬼の歯のような凹凸（おうとつ）をつけたものである。打撃面を広く、かつ使用者の使用しやすいように頭部をななめに切つてある。材料は杉の木で、割れないように「あて」（木の根元に近い曲つたところ）を使用した。



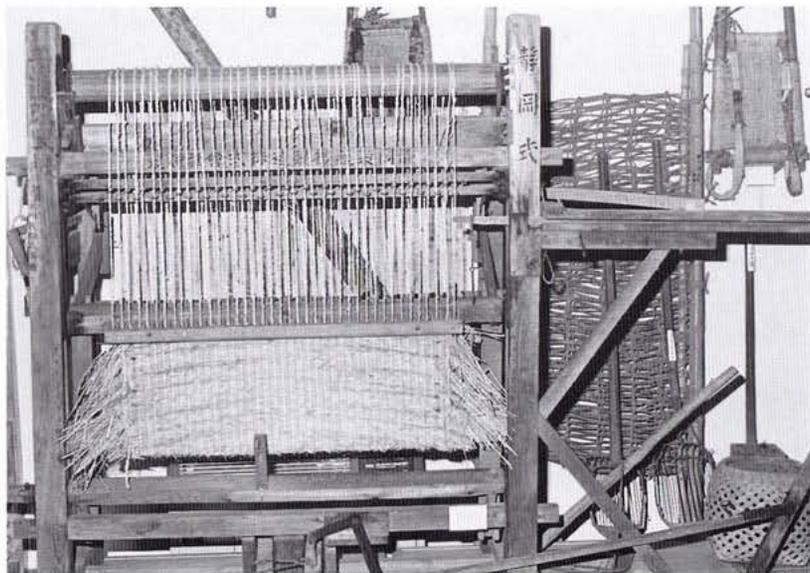
田 下 駄

田下駄は、下駄の名をもつが、はきものの下駄とは基本的に性格を異にし、農具の一種と考えるほうが適切である。現在でも県下各地の湿田で用いられているばかりでなく、弥生時代以来の伝統をもつもので、遺跡からの発掘例が多い。湿田、沼泥地で用いる一種の「かんじき」で用途は、そうした場所の歩行用のほか、田へ肥料をしたり、代かきのために用いる。名称はオオアシ、ナンバ、カンジキ、タゲタ等、形が大きいのでオオアシの名は特徴を表している。



よこ横 づち槌

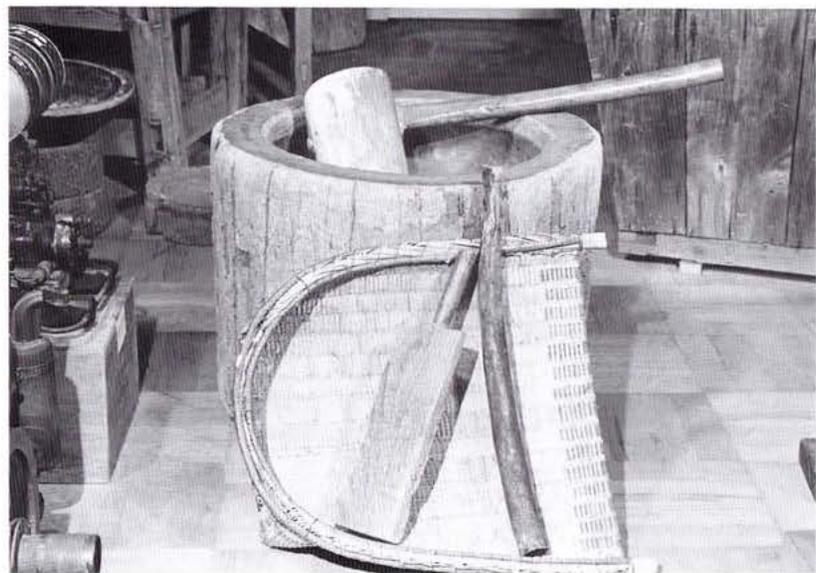
雨、雪などで外の農作業ができない日に、わらぞうり、縄、^{むしろ}蕨などわら細工に使うわらを、はかまを取り、水で適度に湿らせて土間に備えつけてあるたたき石の上にのせて、写真の^{つち}槌、または^{きね}杵で打って軟らかく加工してつかう。打ち方には一人で打つ場合と、二人打ち、三人打ちとがある。二人打ち、三人打ちの場合には槌のほか杵を使う。



むしろ編機

むしろは主に藁わらで編んだ敷物で、穀物の脱穀、調製、穀製、穀干し、さらには風を起こすあおりなどに使われてきた。

中世期頃までは、屋内で専ら用いられていたが、畳の普及にともなって、庭や土間を中心にした屋外の敷物になってきた。農家にとって欠かせない敷物であり、むしろ編機を使って農閑機に編まれていた。写真は寄贈者の奥さんが昔編みかけたものです。



うす 臼 と みの 箕 と つち 槌

臼は、餅をつくほかに、農家にとっては、脱穀につかう道具です。箕は、臼と杵による脱穀、精白作業の間に必要な道具であり、「つく」「ひだす」は一連の作業となっている。まず、あらずきをすると箕でひだし、穀をとりさる。次に二番づきをし、また、ひだしてぬかをとる。このように臼、杵、箕はセットになっている。また槌はごわごわした布や植物の繊維を柔らかくするために用いられる。箕でひだす方法は、技術のいることで、箕の中の穀物を空中にあげ、箕をストップさせて、ちょんちょんとしなすを外に……年期のいる仕事です。



もみすり臼

もみすり臼は唐臼（からうす）、土臼（どうす）と呼ばれ、江戸時代の中頃から普及してきたものです。

杵穀を取る方法が、つくから摺る方法へ移行し始めたのは、平安時代の終わり頃からと見られ、木臼が使われたものと考えられています。

このもみすり臼は、樫の木、竹などで歯を作り、その間に泥をつめてあります。そして重い上臼をまわすために、やり木の前後運動の臼の回転運動に変えて杵穀をとりのぞきました。

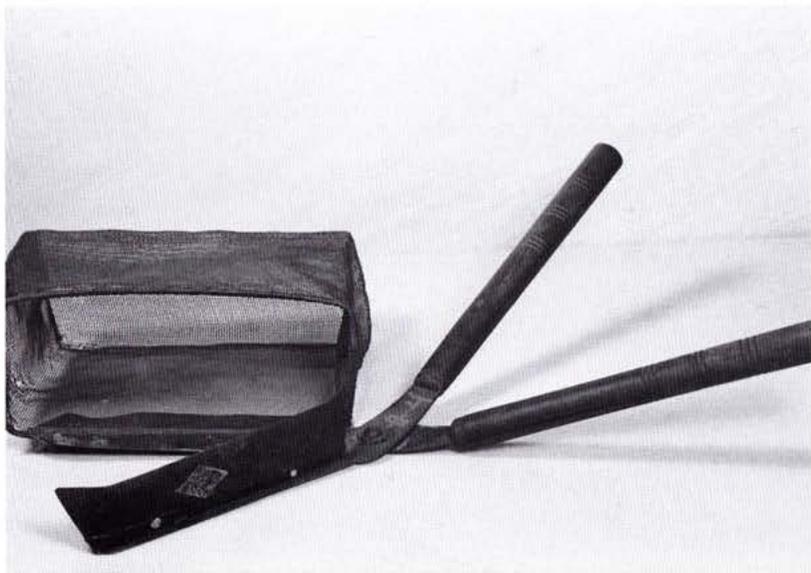


石臼

石臼は一般に左回しに回転させます。右手でにぎりをもって回し、上臼の上に盛った穀類を一回転毎に少しずつ、左手でモノクバリの穴へ落します。穀を入れ過ぎるとかるく回転しますが、上臼が浮いて荒粉になる。入れるのを忘れたり、少ないと空白をひき、臼の歯が削れて砂っ粉ができる。何ととっても忍耐を要する仕事です。

へ わたしゃ上臼 あなたに乗って
重ねて回して粉（子）をつくる。

アーヨイ、アーヨイ



茶 摘 み 鋏

茶摘み歌に「お茶はみっぱがけ葉じゃくをつけて、ぎんばめかけをいれぬように」・「お茶をつむならねはからおつみ、へたなおかたはうらなぐり」とあるように、一心三葉摘みいつしんみつぼが広く行われた。1日10kgが限度といい、作業能率はあがらなかった。そこで、能率のあがる鉄摘み法が考案され、茶摘み鋏は、明治時代に静岡県で創案されたものです。普及したのは大正～昭和初期で、1日100kg～150kg摘葉でき、作業能率はぐんとあがりました。それとともに、茶の木の高さ、樹形がととのい、茶畑の景観が美しくなりました。



爐(ろ)

爐は木炭を中に入れ、わら灰をかぶせ、その上に鉄板をおき、まんべんなく灰が爐の中に行きわたるようにした上に、わくにほいろ紙をはった上で、茶をもむ仕組みになっている。手もみ技術は上から名人、県無形文化財師範、教師のランクに分かれる。1人の技術者が一日に仕上げる生茶は5kg、仕上げた茶の重さにすると、わずか800g。このため、手もみ茶の小売価格は3,000円(100g)と機械茶の3倍です。



蓑(みの)

ハナ、ハト、マメ、マス、ミノ、カサ、カラカサ、カラスガキマス……日露戦争の前から半世紀、昭和の初めまで続いた全国统一教科書、国定教科書です。小学国語一年の最初がこんな始まりだった。国定と称する以上日本全国一斉にハナ、ハトなのです。

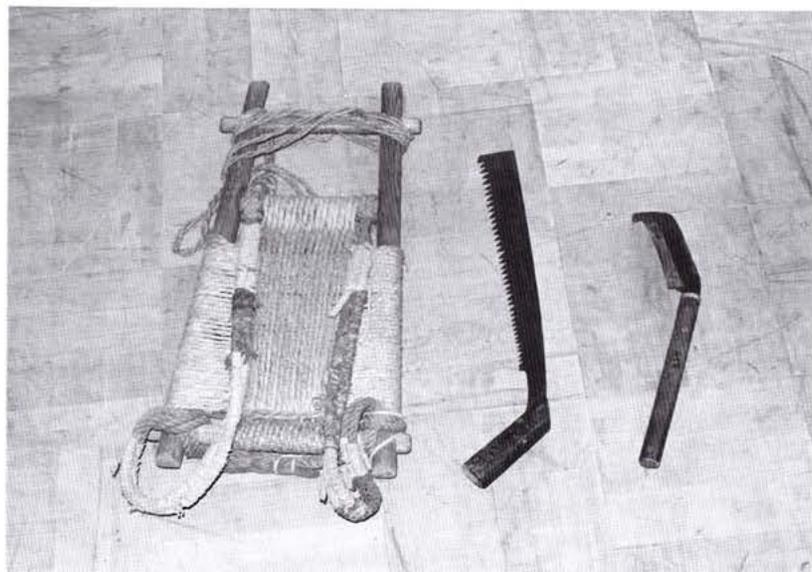
かつて、蓑は身近なもの誰もが知っているものだった。材料は、最初が稲のわら、ちがや、藤、ぶどうづるの細く裂いた樹皮、海そうも使われた。雨も通さず、いきれもなく^{きせん}貴賤を問わず使用されました。



とんぼ笠と日よけ

田畑の草取などを行った時に日よけとして背中にまとった。頭には「とんぼ笠」をかぶり強い日ざしから身体を守った。

最近はずっかり姿をけしてしまいました。日よけの材料は畳に使用された上畳を畳替の時、古い方は捨てないで細工加工して日よけとして、おもに田圃仕事など水につかり長時間にわたる作業に軽いので使用されたのではないのでしょうか。



たきぎとりの道具

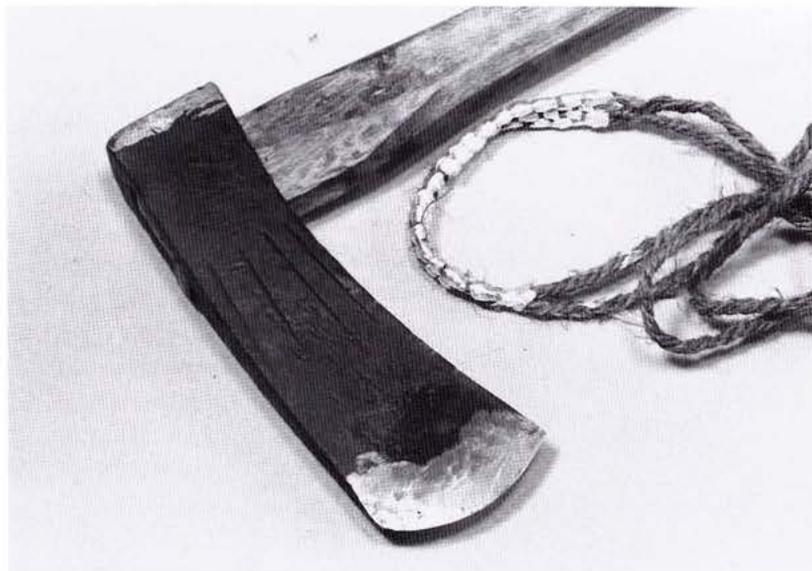
日本の昔ばなしには、かちかち山、桃太郎などたきぎとりがよく出てきます。なつかしい二宮金次郎の像の背中には必ずたきぎの束がありました。湯をわかし炊事をするたきぎ、よなべの家族が集まったいろりばた。このように生活のための切実な役割をつとめる燃料を人々は鉄の道具で山の木を切り割って作りましのこぎりた。鋸が使われるようになったのは古墳時代、おの斧、なたはさらに古くからのものです。

しかし今は、たきぎの役割を石油、ガスに譲りました。



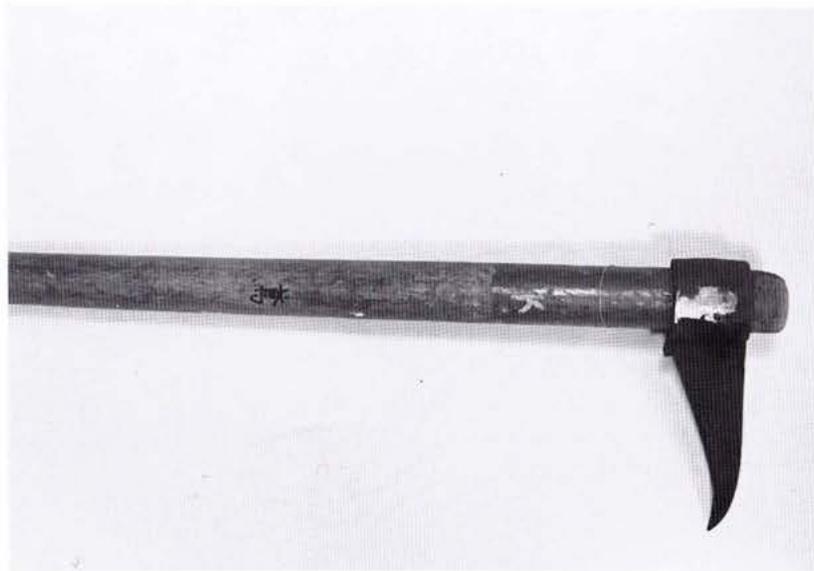
うま

写真のように材木をのせて木を切ったり皮をむいたりする。2又の元の所をくりぬき別の木をさしこんで安定性を持たせ、用途によって大小に作り効率よく使用された。うまの台は桑の木を使用しています。



斧(おの)

不燃物置場に捨てられた「さき山」用の斧です。おじいさんが、若いころ大木の伐採用に使った大事な道具だったので。刃のへり具合からみて、その後まき割りに使ったらしく、刃の上の方が極端にへっています。「道具も使いよう」という言葉がありますが、斧を「よき」に使うときわめて危険です。今では、チェーンソーが斧の仕事をするので、使われなくなりました。昔は、刃がへってきたり、もみの木などの節を打って刃が大きくとんだりすると、「かじや」に持って行き、「さきがけ」をし、わらじ(刃のカバー)をつけて山に出掛けました。



鷹(とび)

鷹は丸太を自在に転がし、あるいは梃子(てこ)として使う。太い樫(かし)の柄の先について片手では持ち上がらぬほどの重さです。それを自在に操って勇壮な山の仕事や貯木場での作業、嘴(はす)が折れるようなことがあったら、一命にかかわります。材料は古レールです。鉄という金属は自在の応用の利く金属で、それを火造りしてこの形まで変身させる鍛冶の技術もすばらしいです。特に、鷹口の柄穴は矢(や)を使って一気に打ち抜いて作るのです。



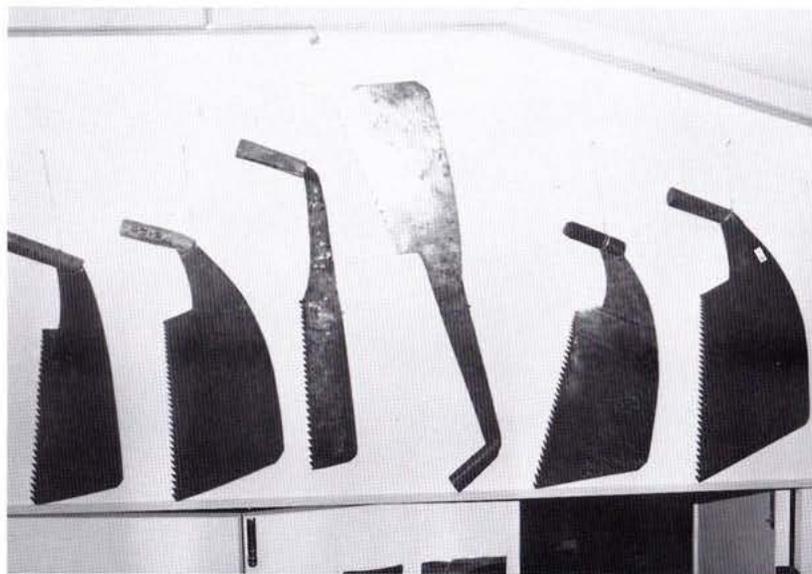
や(矢)

今日、製材といえば電動の帯鋸で、大量の板材・角材が簡単に作られますが、縦びき用の大鋸（おおが）が普及する江戸時代前は、矢を用いた打ち割り法で板材を作っていました。玉切りした太い丸太を、木の目にそってミカン割りしていくもので、木口（木材の切りくち）が三角形をした板材が基本で、この打ち割り法による木取りは、木矢・金矢が使われました。写真は、その矢で、掛け矢（大型の木づち）などで打ち込まれました。つい最近までは、この方法で、棒屋さんが檜の木で鎌、唐鎌の柄を作っていました。



わり 割 え 柄

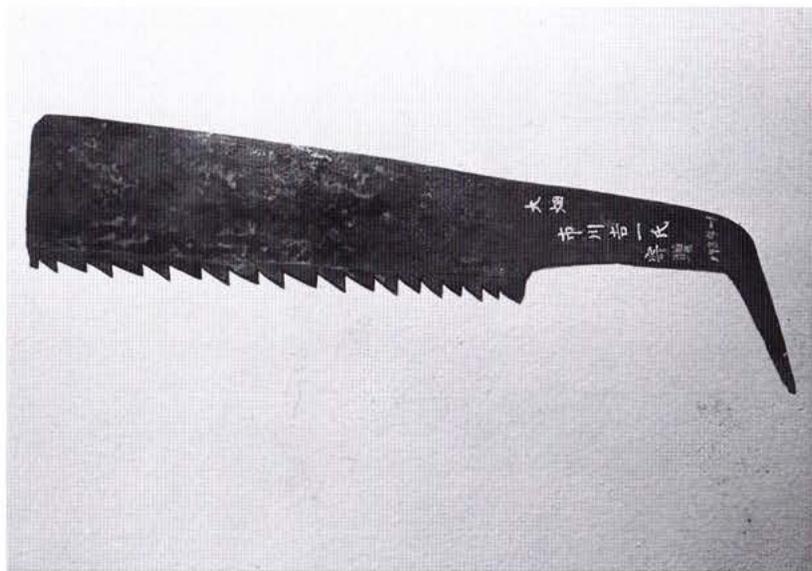
割木工といえば、私たちに割ばしが一番身近なものです。スパッと割れる感触こそ、割木工の真髓しんずいとも言えます。縦挽き用の鋸たてびきのこぎりが普及する以前は、木材を木取っていくにはこうした割木工だったのです。木の目にそって割った割材は、目が通って強い材になり、逆に目切れの材は折れやすい。鎌かまのへらザオは、檜かしのの木を専門に扱う「へら屋」「棒屋」によって作られ、へらや柄の荒木取りが、みかん割りした「割木」によって行われていた。今日の大量生産の柄は、製材された板材から木取るので目切れを生じ、まがったりおれやすかったりします。



きこりの道具

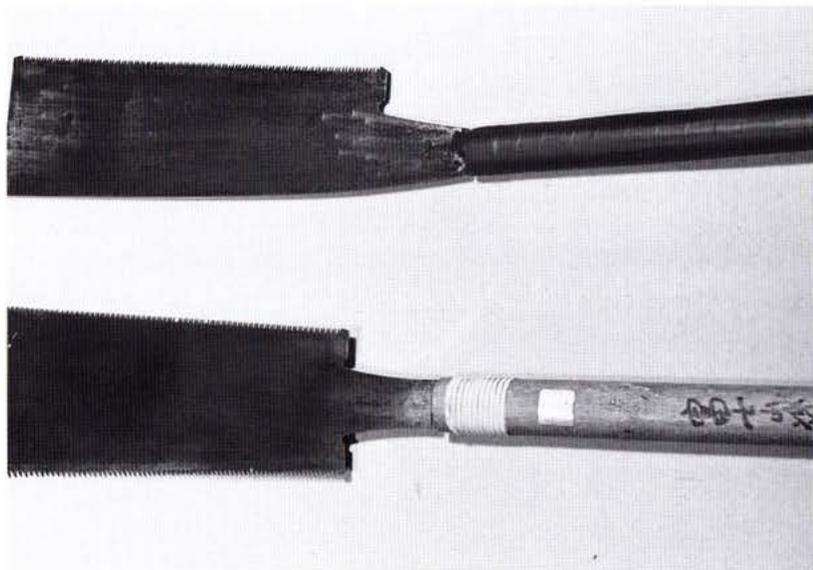
木挽^{こび}きの仕事とは、山の持主に雇われて木をきり出し、柱や板を取る作業を言います。今と違って鋸一丁で木をきり倒し、丸太を縦にひき割る労力のいる、しかも危険な仕事でした。

木挽きは1日1升の飯を食うと言い、「山小屋3年、白木屋3年」と称し「山で3年、里で3年」の修業をつんで1人前になると言います。チェーンソーの時代では、木挽きの仕事も過去の物語になってしまいました。



自分で作った鋸

道具は金物屋から買ってくるものではなく、自分で作るものだと言人は言う。買ってくるが、それは道具の素材にすぎない。自分の身体、くせに合わせて自分の道具を造り上げる。たとえば玄翁の柄、その長さ、握りの太さなど。写真の“のこぎり”は刃先をリベットではり合わせたすばらしい鋸です。扱う木の種題、太さなどにより、自分だけの道具に作りあげたのでしょ。平均値でしか考えられない人間工学など遠く及ばないものです。



鋸(ノコギリ)

両刃のノコというのは、いうまでもなく粗い目の方が縦挽き用。木材を繊維方向に挽くために歯がノミの形になっている。細かいほうが横挽きで繊維を横に切断するために小刀の原理になっている。昔はそれぞれ別のノコギリになっていたが、おそらく明治の初めころに一丁のノコギリに両刃を刻むようになった。ところでノコギリには表と裏があります。片刃のノコなら歯が右側にある状態が表。両刃の場合は横挽きの歯が右側にきたときが表。その表に銘が切られている。



ちょうな

ちょうなは古い道具です。2,000年前頃の登呂遺跡の出土材にも加工の痕跡が見られます。また、山梨県丸山古墳からの出土もあり、独特な曲がった柄をつけて盛んに使われていたようです。いわば生きた化石のようです。

柄に用いる木は「榆ヲ以テ上トシ、槐、ケヤキコレニ次グ」と和漢三才図にありますが。今でも古い農家にはちょうなけずりの柱、はり等があり、職人の業の魅力を見ることができます。



金槌の柄

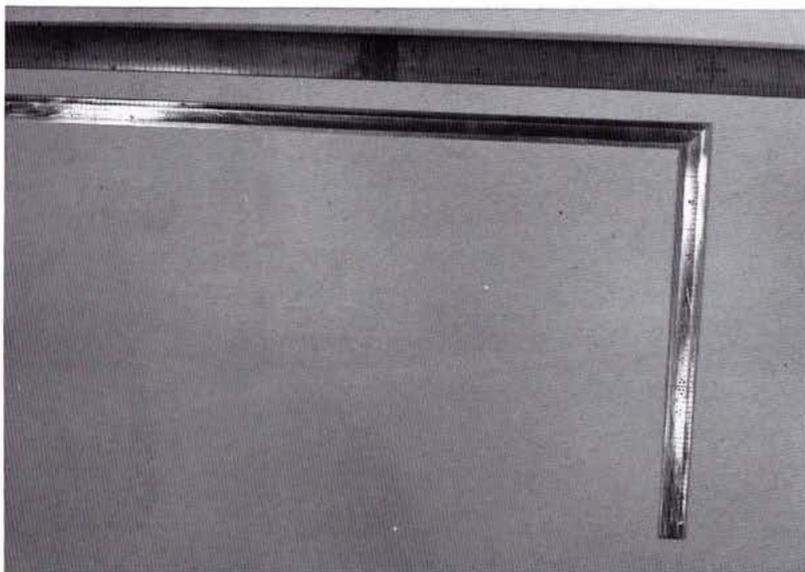
大工さんの使う金槌は、玄翁、玄能と書きます。釘をうつ部分が鉄でできているので金槌、樗、ひいらぎ、けやき等の堅木で作ったものを「木槌」といいます。金槌の柄は必ず木で作ります。鉄で作るとたたいたときの衝撃がもろに手に伝わって手がしびれて使えないからです。

おわんの字が二つある。木に漆を塗って作るおわんは木扁の「椀」の字。ご飯茶わんは石扁の「碗」の字、扁で素材がわかります。金槌の柄は、木で作るのが定石ですから柄という字は木扁です。柄の材料は、樗が最適、堅いので、樗は木扁に堅いと書きます。



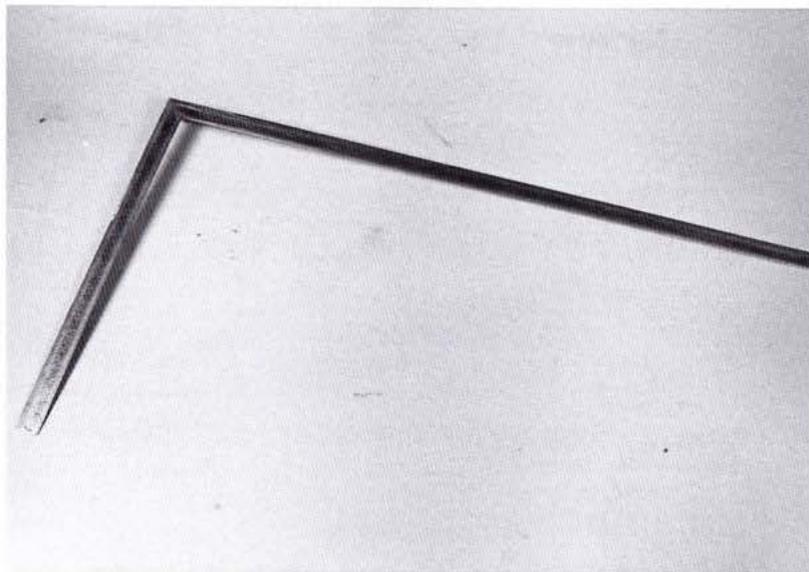
のみ

のみは、木工用と石工用の工具で、穴を掘るためのものです。歴史は古く古墳時代からすでに使われていたようです。木工用は、叩きのみと突きのみで大別され木製の柄に刃の根元を四角にとがらせてまっすぐさしこみ口金で柄をしめたもの、叩きのみは、柄の底に鉄の輪がはめこまれ、そこを玄能で叩いて使う。突きのみは、それがなく長い柄を押して使う。大は小をかねるというが、のみはかねられないので、工具の中で種類がもっとも多いのです。



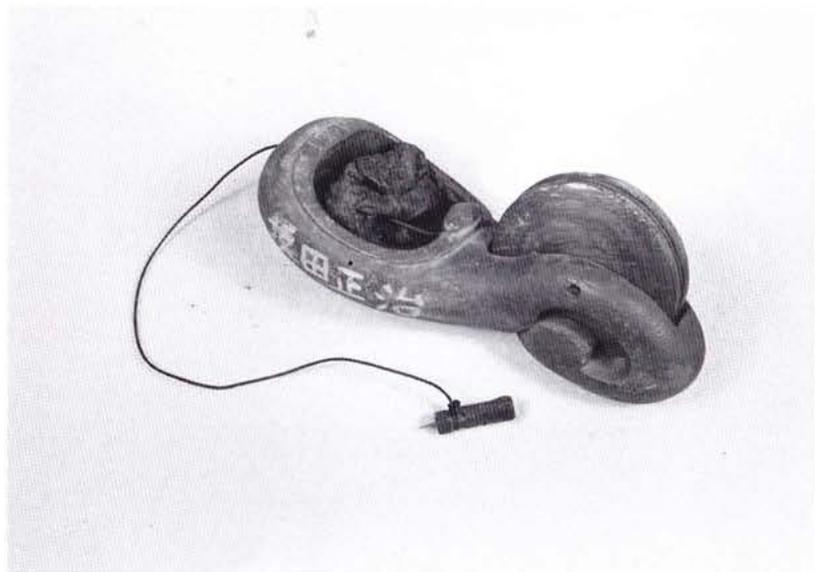
鯨尺と曲尺

大工さんの使っている曲尺、寸と尺が目盛ってある金属製の「L型」のものさし。鯨尺は、竹製で尺、寸、分が目盛ってあるがすこし粗めです。曲尺1尺は鯨尺の8寸で昔、女の人たちが裁縫に使っていました。曲尺と鯨尺の目盛りの比は、10対8です。鯨尺という呼び名は、鯨のひげを使ったからだという説と、鯨は大きい、つまり大きな目盛りのものさしという意味からきています。曲尺は男たちの大工に使い、鯨尺は、女たちが使い、箱膳、会席膳、お茶道具の一字盆もそろって鯨尺の1尺。女の腰の幅、お尻の寸法、これを1尺としたということです。



サシガネ(曲尺、指金)

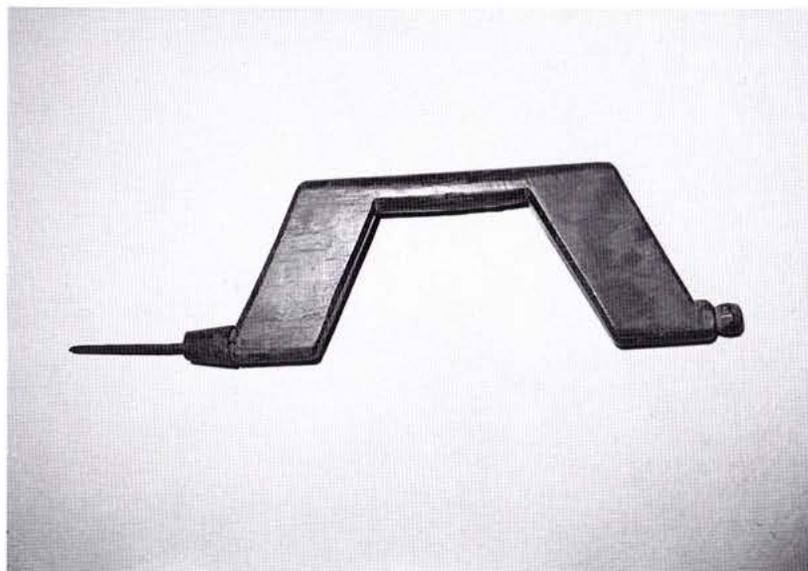
墨つぼとともに大工の生命、指金には十の用途があるという。直角を検し、長さを測り移し、定規の役、仕上げ面の平坦を検することもする。指金の幅をそのまま利用して穴や柄（ほぞ）の寸法をきめる。カネ1枚、カネ2枚がそれである。垂木のたるきのむなぎへの取付け口、それを地上で切って持ち上げてもピタッとおさまる。それは指金と規矩術、けっきょくピタゴラスの定理と、直角三角形の相似の法則である。指金一丁で乗除、開平、開立から比例配分まで、こうなるととても十ばかりではない。



墨 壺(すみつぼ)

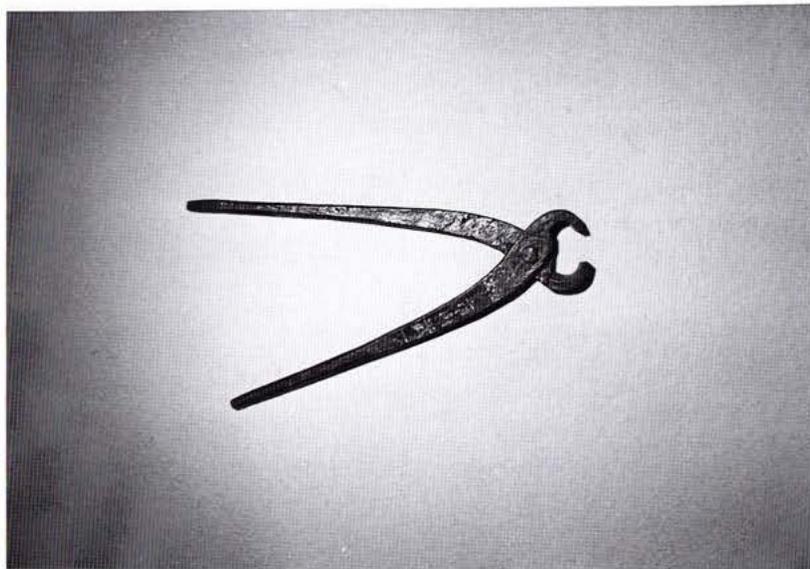
あたらしき 章邦部の工匠 懸けし墨繩 其が無けば 誰れか
懸けむよ あたら墨繩

名工章邦部の真根が殺されそうになった時の命乞いに歌った歌です。墨繩をかけることは、設計者としての大工の本領発揮を意味する。ピシッときまって見ている、爽快だ。その墨繩を巻き収め、また繰り出す道具が墨壺。材料は「桑ヲ以テ上トシ、櫟コレニ次グ」と「和漢三才図会」という江戸時代の本に書いてある。



お 緒 あな の きり 錐

これは下駄の緒孔あけ専用。クリコ錐である。クリコは英語で言えばブレース（曲がり柄、曲がり柄錐）おそらく明治の初め頃に西洋から入ったものらしいが、錐先以外はすべて堅木で作った。まぎれもなく日本の木工職人用に変貌したもの。丸いキャップをはめて左手で押え、右手で曲がり柄の円筒を握って回転させる。力がかえるときはキャップを肩や胸にあて、上体で押しつけて孔をあける。やわらかく、ねばりの強い桐下駄の仕事には刃物の切れが特に要求される。



くぎぬき(えんま)

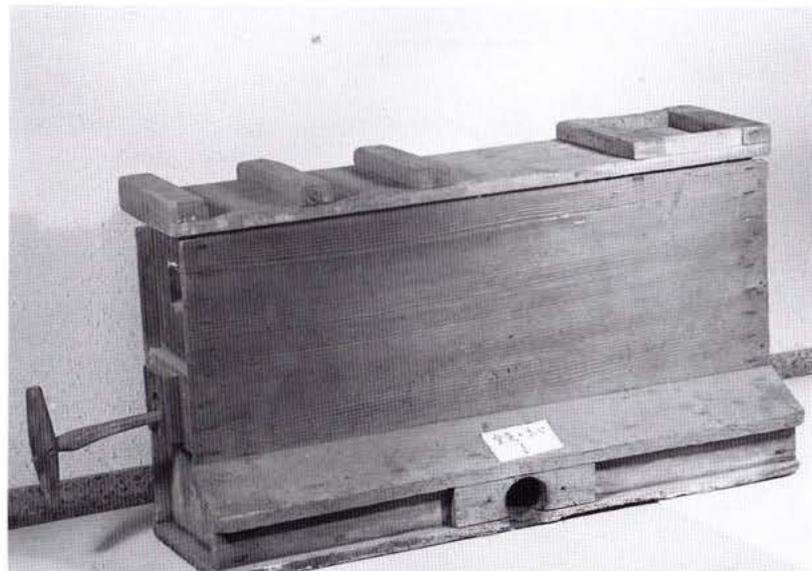
「うそをつくとえんまさんに舌を抜かれるぞ」と昔の子どもは親におどかされたものだ。ひげのえんま大王が、手にしていたのがこの舌抜きならぬ“くぎぬき”。

昔の釘は、和釘と呼ばれる四角な釘。頭は平らに叩いて、ちょっと折り曲げただけのもので、鍛冶屋が一本ずつ作った。法隆寺などには1m近いものも使われているが、小さいものは頭もなかった。だから今日のパールは使えない。これで釘の身をしっかりとほさんで抜く。丸く湾曲した部分がテコの支点となります。



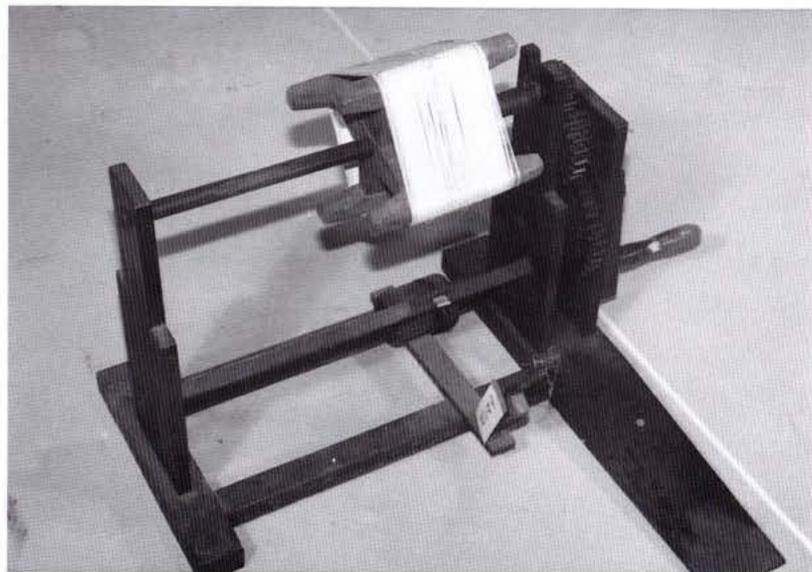
建具職の道具

箱の引き出しに整然と納められた各種の道具。今、研いだけばかりと思われる手入れのよい建具職の道具。道具にたくす職人の心意気、気どり。自分だけの道具は、職人の身体そのものであり、年期のこめられたさすがに堂々たる風格、まことにプロの道具だてである。建具職はこういう型の道具を使うこともあるとは聞いていたが、よくつかいこなされたものだ。まざまざ対面したのは初めてである。職人の誇りをこめた道具、粋な道具を手にして、仕事にさぞ甲斐を出し誇りをもったことでしょう。



ふいご(鞆)

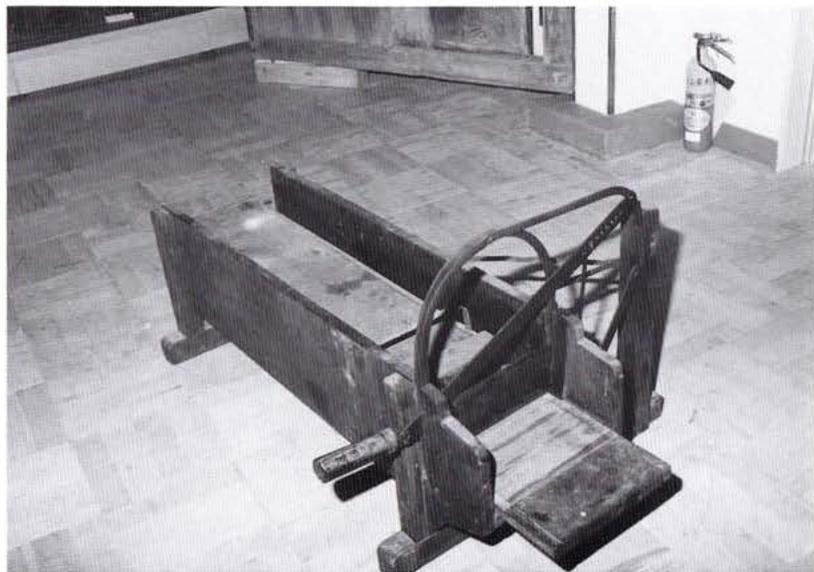
写真のふいごは「かなぐつ屋」さんが使用したもので横が90cmもある大きなものです。金属の精錬にはなくてはならないもので、とってを手で引いたり押ししたりして、風をおくる器具です。コークスの燃えている中に、「かなぐつ」を入れて、それをとりだしトンチンカン、トンチンカンとたたき、また火の中にくべて、一方では「ふいご」で風を送り、とりだしては、馬の足にあわせ、あばれ馬もあったり、なかなかの重労働だったようです。須山地方には馬が多く、2軒しかない「かなぐつ屋さん」は、忙しく、貴重な存在でした。



座繰器(ざぐりき)

座繰器は繭まゆをなべで煮て繭の糸をほぐし、5個位の繭の糸を一本にまとめよりをかけ枠にまきつける道具です。

江戸時代の中頃、枠の回転を早めるため、木製の歯車を組合わせた座繰器きくおが発明された。手挽りより進歩し、振手がつき、索緒装置もあり、そして幕末には二つ取座繰器がつかわれた。この器械は能率的であったが糸質が悪くそのために悪評を招き、明治初年には元の一つ取座繰器にもどってしまった。

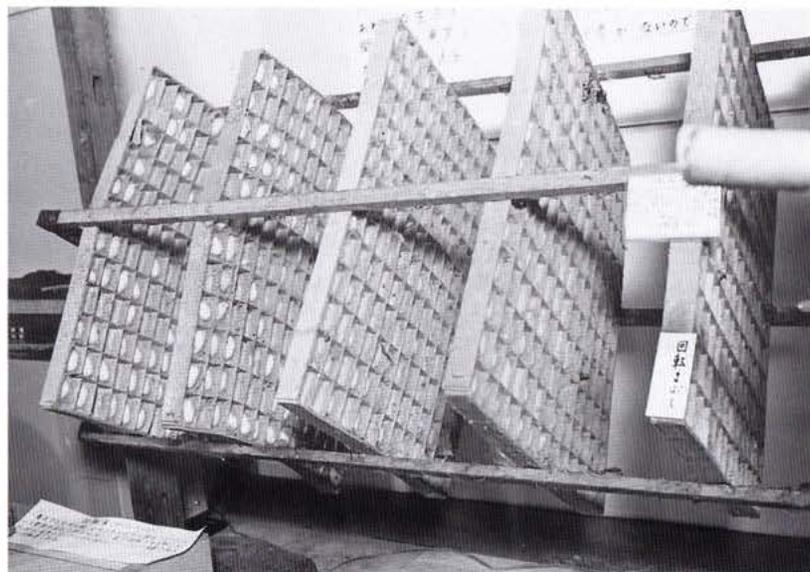


桑葉切り機

お盆も終わり、農手間がかからなくなる時期に、農家は現金収入のある養蚕ようさんを選びました。桑もぎや繭かきなど、夏休みの子どもまで動員されたのです。

掃き立てはだいたい7月末で、8月末になると丹精した蚕がみごとな繭を作りました。一戸当り15貫（1貫=3.75kg）から多い家で100貫ぐらいとれました。

写真はカッターで箱の中に桑の葉をつめ刃の取手を上下すると、切板の上に裁断された葉が等寸法で出てくるのです。当時の専売特許でした。



回転まぶし

蚕（かいこ）は繭玉（まゆだま）を作る時上方の穴から埋まっていくという習性があります。これを利用して、蔭（まぶし）が回転できる形になっていれば、自然と穴が埋まる。

こうして考案されたのが回転蔭である。写真は紙製の回転蔭で、資料館で飼育した繭です。現在は発泡スチロール製で紙製よりじょうぶです。

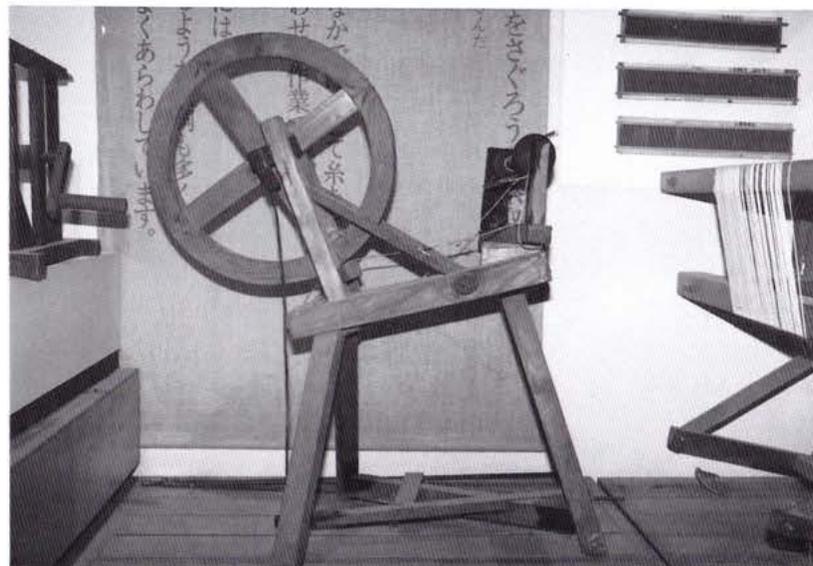


毛羽取機(けばとりき)

繭の外側についている毛羽をとる機械で、これが発明されたので非常に能率的になった。

※絹一反を作るのに必要な繭と副産物

生繭4030g、乾繭なら1693g、これを反物にすると約600gとなる。このほか副産物として、きびを53g、びす86g（この2つはベニーとして紬糸になる）、乾蛹615g（栄養価が高いので肥料、魚の飼料となる）。



紡毛機

ウール用に普及したフライヤー式の紡車で足踏みで糸によりかけし、ポピンに順序よく巻きとられる機構になっている。糸をつむぐときにその元の繊維の固まりを結びつけておく道具に糸取り棒があるが、フィンランドではしばしばこまかい彫刻がほどこされていて男が心をこめて自分の手で彫り、花嫁に贈る習慣があった。写真は終戦後、裾野地方にもたくさん綿羊が飼われ、毛糸を作った紡毛機です。



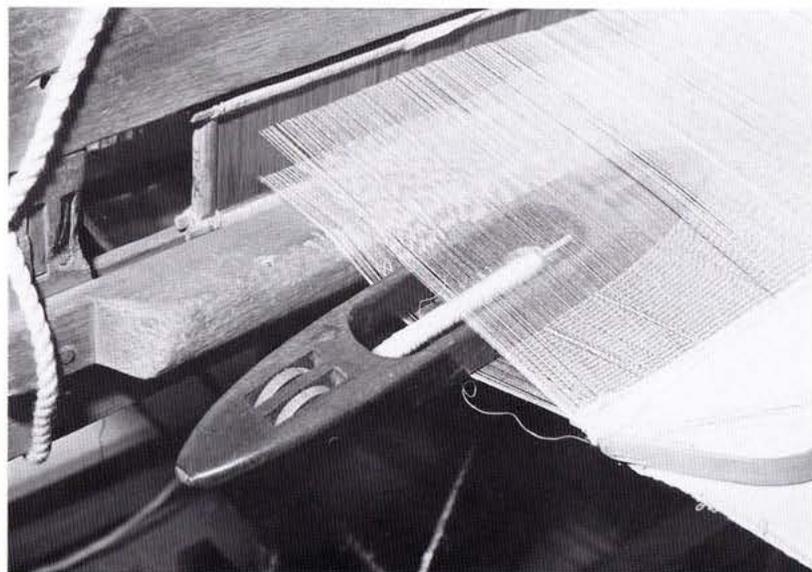
糸紡ぎ車

ピーだ 糸取りさんよ ちよっくらさんだ 糸目が出るか 糸目どころか みなさんよ ひまが出る

(糸取唄 採録 公文名)

糸取りとは蚕のまゆを湯の中でほぐして糸をとり、何本かをひとつにより合わせる作業で、若い女性の仕事でした。

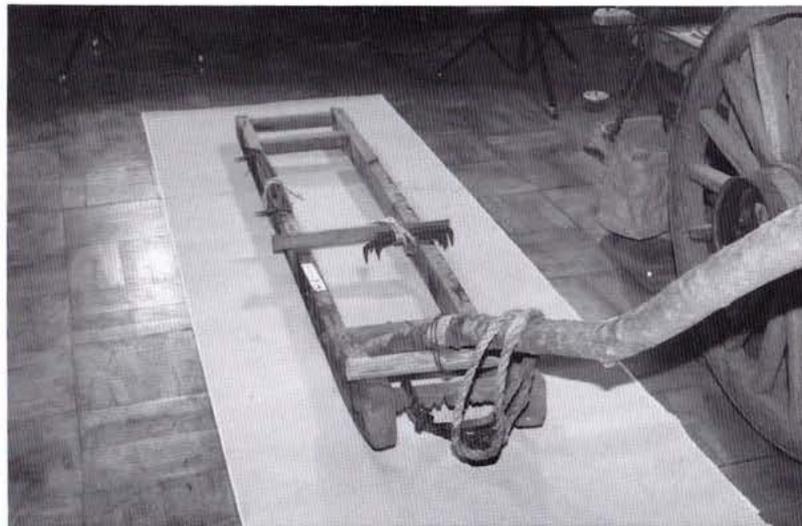
その時、歌う糸取り唄には、娘の恋ごころをかきたてるような歌詞も多く、昔の農家の人びとの生活感情をよくあらわしています。



梭(ひ)

織機の横糸を通す道具のことで、外国語でシャトルと言います。くり返し行ったり来たりするという意味で、ニューヨークのタイムス・スクエアとグランド・セントラル駅を、往復する地下鉄にシャトルという名がついています。スペースシャトルもこれから地球と宇宙を何十回となく織機の横糸のように往復することでしょう。軍事利用の道でなく、平和利用に徹してもらいたい。

(3) 交通・運輸・通信に用いられるもの



きんま(木馬)

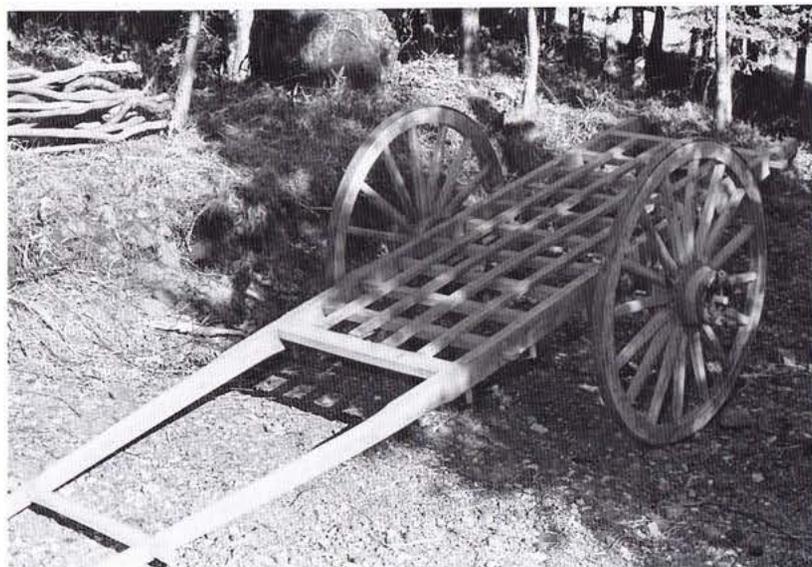
馬力の通れない山中から、木材などを搬出するのに、そりが威力を発揮しました。そり道は、けやき、くりなどの木を並べて廃油をぬり、すべりをよくした。橋は5寸釘とかすがいで固定し、スピードは、てこ棒を入れて調節し、急坂はワイヤーを使ってブレーキにしました。馬力が6石～7石位つけたが、木馬も同じ位積んだのです。

危険な重労働で、普通の人が80銭～1円ぐらいの時、3円～5円の高収入でした。現在は架線で木馬は姿を消してしまいました。



ゴト車

木炭や薪炭材をのせて運ぶ車で、車輪は大木を輪ぎりにして中心に穴をあけ木製のシャフトにはめこんだもので、大八車の前身です。一度に木炭を5～6俵のせることができた。その便利さから「ものぐさ車」とも呼んでいた。釘などを一本も使わず、ひのきの曲がったところ(あて)の利用と、輪が小さいことで重心が低く重いものでも一人でのせられた便利な車です。写真は車台がなく車だけで残念ですが、絵でご理解ください。



大 八 車

八人分の働きをするから大八車とも言われます。しかし、これには別の説もあって「大津の八町」は昔から雑車を作るところで、大津と八町の頭字をとって大八車とか江戸の町人「大八」なるものが、これを発明したからとも言われます。

昭和年代からはリヤカーなど小型で扱いの便利なものが工夫され、やがて小型トラックの普及によって大八車の鉄の轍わだちのきしむ音など、年配の人々にはなつかしい記憶となっているのではないのでしょうか。



さるの彫刻のあるくら鞍

さるまわし(さるを舞わして米銭を求める業者)が、厩祭の祈禱をして、祝言を述べてさるを舞わし、暮れから正月にかけて辻芸に出た。また正、5、9の月には厩にまいる膳経とうきょうを読んで、さるを舞わして馬に病災のないように、さらに小児こどもに痘瘡とうそうを病まない前に、さると杯をかわせば軽くすむといい、さるを迎えて祈禱しました。このように、さるを守神として馬の鞍にさるを刻み、馬の安全を祈りました。写真の鞍は、馬力用としては最上級のもので、真ちゅう鞍とも言います。



こ 荷 だ ぐら 小 荷 駄 鞍

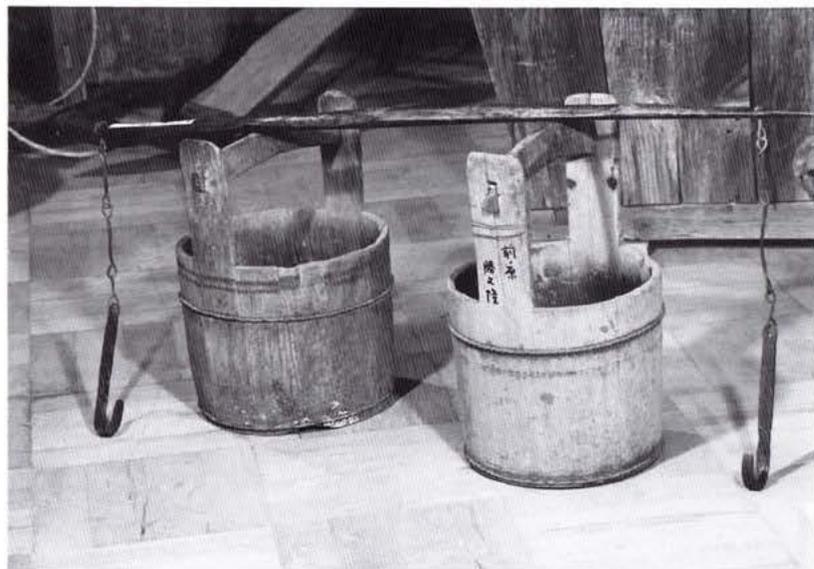
農村では人力や畜力を直接使った運搬が中心で、車の利用は少なかったが、道路が良くなってくると馬力や大八車も利用されました。畜力運搬には①背に荷をつける。②地面に置いた荷をひきづらせる。③荷車やそりなどをひっぱる。の3通りがあります。①の場合馬の背に写真の小荷駄鞍をになわせ、薪の場合6束、米は2俵つけました。鞍には「しと」と呼ばれるクッションがつき、鞍山は荷をしっかり固定するためのもので、ねばりの強い「えのき」が使用されました。



背負子(しよいこ)

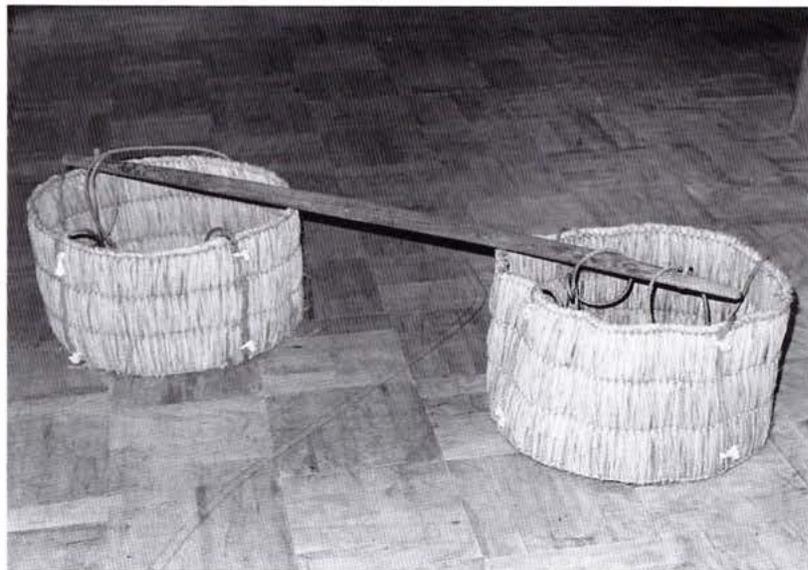
人力による運搬には、肩に担う、手に持つ腰にさげる、頭上に支える、前額運搬などがあるが、原始的形態です。背負う——地域によって呼称が異なりますが、例をあげると下記のようなようです。

- 東日本……しよ系=背負籠しよいかご、しよいこ
背負ざる、背負びく
- 西日本……おう系=負籠おいかご、こいぼこ
- 南西日本…かるう系=かる籠、かるい、かるでこ



てんびん

運搬方法には人力、畜力、そり、いかだ、船、車両、航空機、ロケットなどがある。人力による方法として、昔は盛んにてんびんが使われていた。棒につけて肩になうもので、これは険路には適さないので、主に平らな土地で使われた。てんびんには、棒の中央に荷をしばりつけて、二人で運ぶ方法に、おかごや、もっこなどがある、写真のてんびんは、井戸水をくみあげて、朝夕生活用水を運搬したもので、明治初期のものだそうです。裾野地方にもてんびんをかついで、夏には、「キンギョ、キンギョ」とかけ声をかけ金魚売りがきたものです。



いじこ(かつぎ俵)

水田の肥料としては青草を踏みこむことや草木灰、人糞^{ふん}などが、もっぱら使われていましたが、江戸時代の中頃から、干鰯^{ししか}（あぶらをしぼった生鰯のかすをほした肥料）や油かすの金肥が用いられるようになりました。いじこは藁製の容器で新しいうちは天びん棒で担いだり、肩にかけたりして農作物を運び、古くなると堆肥などの固形物を運搬するために用いられたもので、底を丈夫に編んであります。主に平野部の農家で使われたが最近では完全にプラスチック容器に替わりました。



背負籠(しよいかご)

竹編みは、織物のように平面に編むことが少なく、多くは曲面に編み、曲げた竹が元へもどろうとする性質を巧みに利用して機能に即した形を作るのが特色です。写真の背負籠は、プラスチックにおされたり、人間が背負うことがすくなくなっただんだん使われなくなってきましたが、軽くて、弾力に富み、じょうぶで使いよいものです。竹は本来は南国の産です。日本国土が南北に長い関係から、南の植物に雪がつもっている風景は、世界的に見ると、珍しいことです。



人力車

籠、人力車、国民車、タクシーと変わってきましたが、人力車は明治、大正、昭和初期の乗り物です。今のタクシーのように駅などで客待ちをしていました。浮世絵に見られる人力車は、大八車のように輪全部が木製でした。その後改良され、自転車の車輪を大きくしたようになりました。

もちろん日本人の発明ですが、発明年代、発明者は不明です。写真は、お医者さんが往診用に大正から昭和初期まで使用した人力車の輪です。

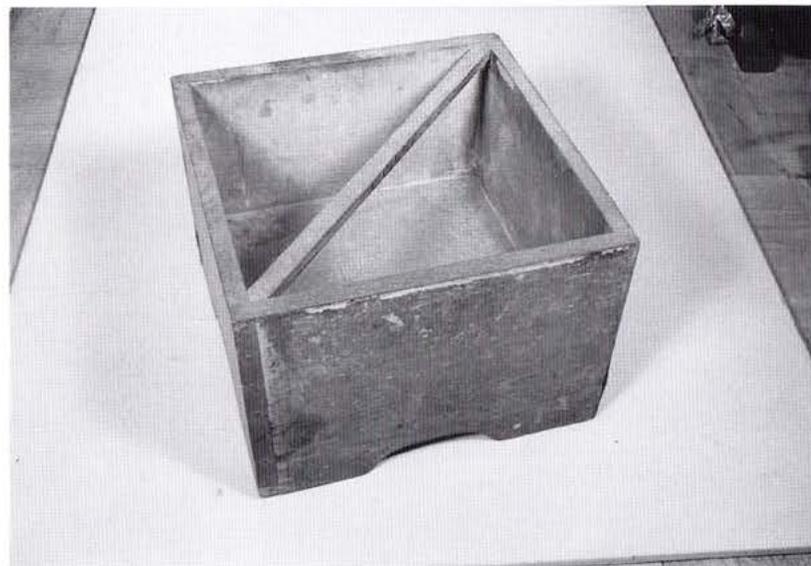
(4) 交易に用いられるもの



斗　　ま　　す

私たちの生活の周辺には、いろいろな物の単位があります。長さ、重さ、分量などは普通であるが、最近車の速度も常識化し、照明の度合いや温度も生活の中にしみこんできました。古くから度、量、衡ということばを使います。

たしかにこれらは生活の基礎的なもので古代から各種の器具が工夫され使われました。古くは斗ます、一升ます、五合ます、一合ますなどが多く用いられ、斗ますは立方体をしたものが使われましたが、明治以降は円筒形になりました。



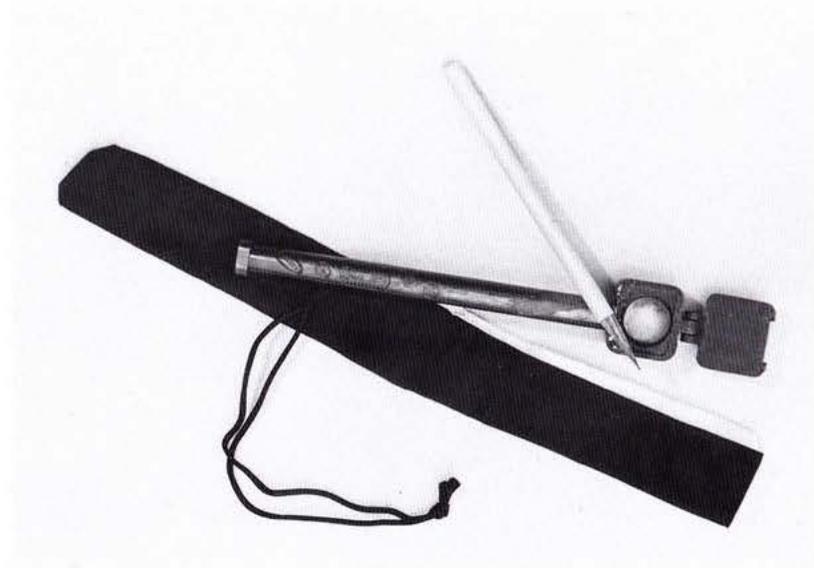
ま　　す

日本でますの制度ができたのは1360年も前だと言われている。約4合ますが基準になって使われ、その後量制が乱れ、個人で勝手にますを作る時代もあったとか。寛文9年(1669年)には、公定ますができ、明治8年には度量衡取締条例が出た。ますは液、粒、粉体の体積を測る道具で、方形、円筒形がある。写真のますは対角線のとってがついて持ちやすく、鉄のふち金がついた檜作りです。



計測の用具

6月7日は計量記念日です。農家の民具の中で、政府が規定している計測の用具は意外に少ないが、伝統的な計測法が今も生きている。たとえば、一尋（ひとひろ）二尋、両手を左右に広げた長さで背丈とほぼ等しい。海の深さ、綱や竿の長さ等、今でも使っている。昔は長い縄をなつて保存するときに、ひじと手の親指と人差し指の間にかけて巻いて100回になると一束にした。50尋である。手をにぎり親指と人差し指を伸ばすと5寸、手をひろげ中指を伸ばすと7寸など、自分の体に計測の用具を持っていた。



やたて(矢立)

明治にペン、鉛筆が普及するまで、文字はもっぱら毛筆で書かれていた。約1300年ほど続いた。しかし、これは硯と墨と水と筆の四者がそろっていることが必要条件。なかなかたいへんなことである。殊に旅先、仕事先での書信、記録、計算など……。こんな中で登場したのが矢立である。筆筒と墨壺がついていて、腰にさした。現代の万年筆、ボールペンということになる。



店番火鉢とそろばん算盤

商人になくなくてはならぬのが算盤で、備え付けから携帯用まで大小いろいろありました。「これ、いくらですか」「いくらまけてくれますか」……算盤に数字を置いてみせるのが取引の基本で、これにともなって符丁（商品につけるあいことば。隠語）も発達した。符丁は無形の商売道具といえます。

行商人の場合は、矢立、帳面、煙草入れ、秤、磁石、道中差など不可決の携帯品で商品を入れる箱も商売ごといろいろ工夫されました。



大 福 帳

大福帳は江戸時代から、明治、大正と使われ、売買の勘定をするす元帳で、勘定科目を分けず、取引順に書き流しにしたものが多いようです。

表紙に大福帳と書いた美濃紙を横二つ折りにし、紙包丁にて裁ち切りして、長つづりしたもので、昔商家では主な帳簿を毎年年初に新調するのが習わしで、正月11日には大福帳を作り蔵開きを祝う慣習がありました。



銭 入 れ

物の交易は、古くはほとんど物ぶつ交換のかたちで行われたが、奈良時代から銭が流通されるようになりました。ただし、すんなり人びとの間に浸透していったものではありません。

一般に銭が広く普及したのは、中国から大量の宋銭などが輸入された室町時代からです。銭が一般に用いられるようになると同時に、銭に対するいろいろな道具が使われるようになり、銭の貯えのためには、つぼ、かめが使われ木製の銭箱も広く利用されました。



は かり(棒ばかり)

物の重さをはかる器具、器械、天びん、竿ばかり、台ばかりなどの種類がある。

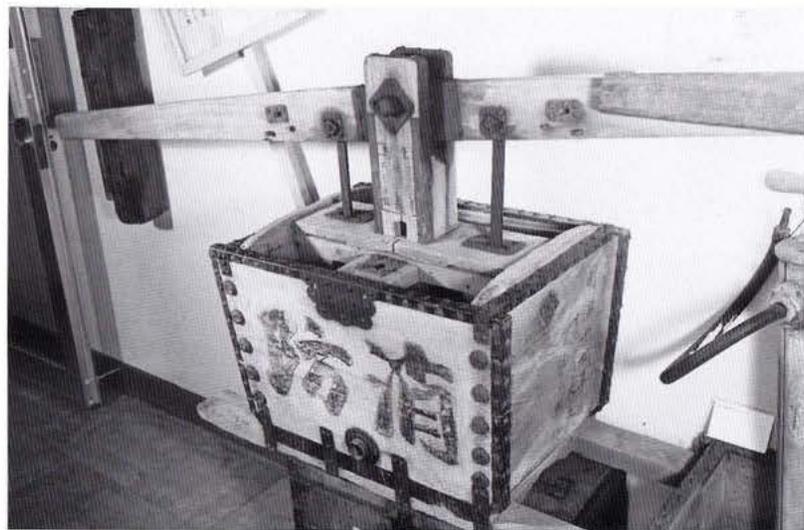
木製及び金属製があり、各々量目を刻んである。

重い物など二人掛りでかつぎ棒を使用してはかったりした。

比較的軽い物には、はかり皿を取付はかり竿の一端にかけてつるして計る物などある。

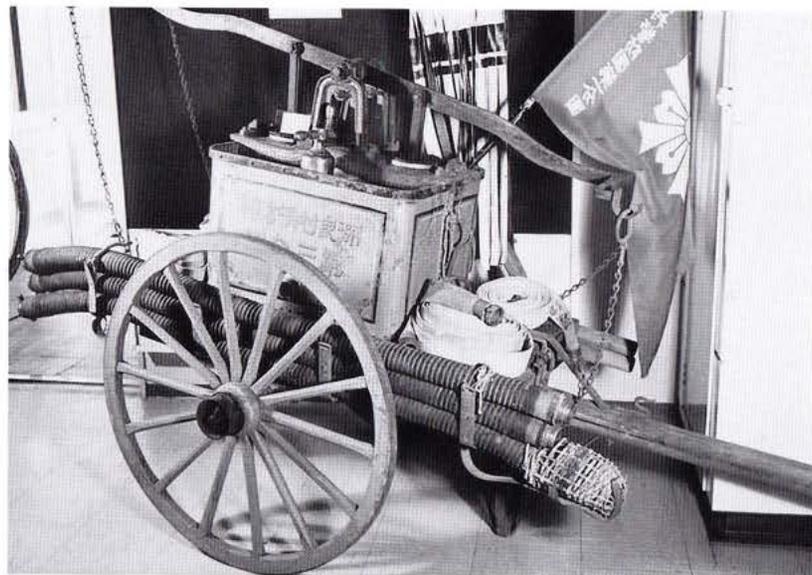
目盛りが平均が量目、特に商売上魚屋さん目盛の棒が上がっていても少々的小事では「ハーイオマケ」と云って元気一杯、商売繁盛でした。

(5) 社会生活に用いられるもの



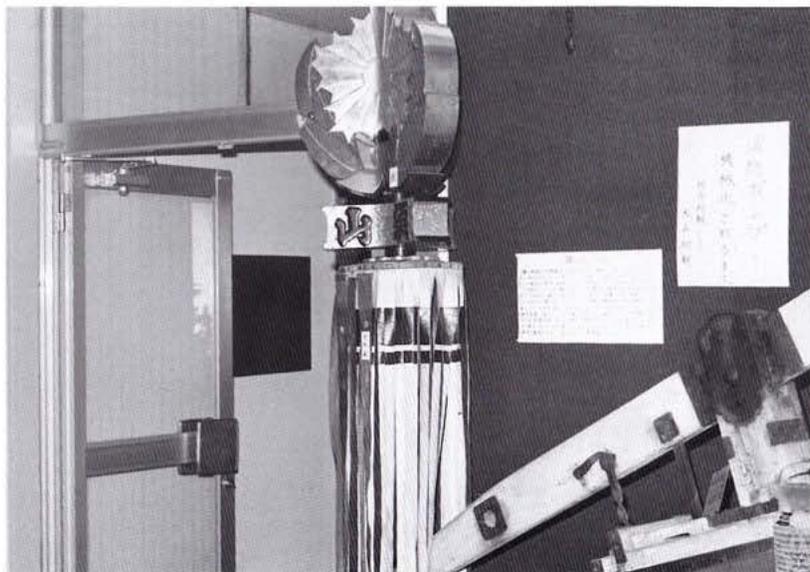
龍吐水(りゅうどすい)

宝暦4年(1754年)に発明されたもので、「龍が水を吐くよう」にみえたところから龍吐水と呼ばれていた。今日の消防ポンプからみれば幼稚なものです。江戸時代の唯一の消防器具でした。放水には手桶で井戸水を運びこんでポンプの中にあけ、空気の圧力を利用して、水を高く上げる仕掛けです。現在のポンプのように、防火用水などから水を吸い上げてはじき出すものではなかった。



腕用ポンプ

龍吐水は2人でかついで運搬しましたが、改良されて2輪車がつき、火事場へスピードアップされました。大正時代になると川などから水を吸引し、放水が同時にできる「ドイツ形ポンプ」と呼ばれる国産腕用ポンプが量産され、性能は吸引水量243ℓ、水力23mで、地域によっては終戦直後まで活躍していました。写真は深良村第3分団が使用したものです。裾野市の消防署で特別手入れをしてくだされ、今すぐにでも出動可能です。



纏(まとい)

纏は戦場での標識として生まれました。旗やのぼりよりも、いっそう目に明らかなように、竿の先端にさまざまな作り物をしつらえて、戦国の世を疾駆していた馬印がその初めの姿です。江戸時代になると纏は火消しの標具に転用され、長々と馬簾ばれんを垂らし「出し」と称する飾り物をいただいた纏が戦場ならぬ火事場へ出動したのです。

降りそそぐ火の粉をくぐって屋根に押し立てる先陣を争った。纏はそこで火をくいとめてみせるという火消しの意地の旗印でした。



竹製のヘルメット

戦時中鉄が不足し、各家庭から鉄びん・鉄がま・鉄なべなど、供出しました。それらの鉄は、弾丸・軍艦・戦車と変わり、前戦に送られた。空襲は、はげしく“空襲警報”とともに、防空ずきんをかぶって防空壕へ。写真左のヘルメットは、右の軍隊の鉄かぶとの型を模し作り上げた「竹製のヘルメット」で、竹25枚を火でまげ「あけびつる」であみ、見事に作り上げた「代用鉄かぶと」です。強度は十分で、この「竹かぶと」を見るだけで、戦時中の物資不足の苦しみがかがわれます。

(6) 信仰に用いられるもの



神 棚

神棚はどの農家にもあり、「なげし」に取り付け、神聖な場所なのでその下を通らず、また北向きにしたりすることは避けた。神棚には伊勢の大麻を真中に安置して、「だいじん様」と言っていた。ほかの部屋にも小さな棚を作って、えびすさま・だいくさま・てんじんさまなどを祭ってある。祭ることによって、精神の和（やわらぎ）として大切にされている。



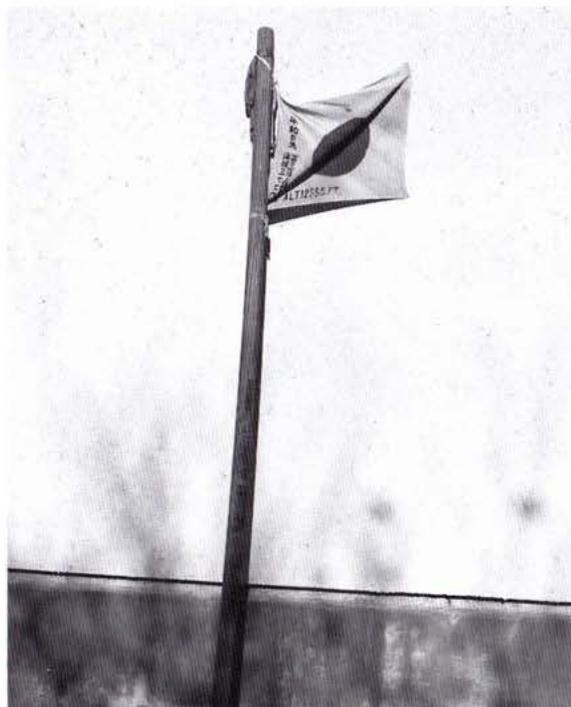
お ふ だ

どの農家にもおふだは貼られているのが普通です。神棚にはあちこちの神社のおふだがならべられ、その家の安全を守っているという。台所、玄関には秋葉神社（火の神）・盗難除けの神など、文化の発達しなかった時代には悪魔退散の道具でもあった。家の入り口にはこれらのおふだを貼っておくだけでも、病気、火災、盗難にはあわないと信じたのである。これらのおふだ類は消化ポンプ、病気退散、消毒剤の役割をし、家族の精神安定をはかった。



三 方(さんぼう)

神前に「もち」を供えるための器で、三方に穴があるので三方という名がつけました。昔、宮中で、納言以下3位以上の人を用いていたが、後になって、神前で、お供えものをする時に使われるようになりました。その後、一般家庭でも「もち」を供えたり、儀式用に使われています。材料は、「ひのき」のしらきです。今では、三方を使わず、半紙の上にあげる家庭が多いようです。神社では欠かせない祭の道具で、三方がいくつも飾られて、その上に、海の幸、山の幸など供えられます。



八角の金剛杖

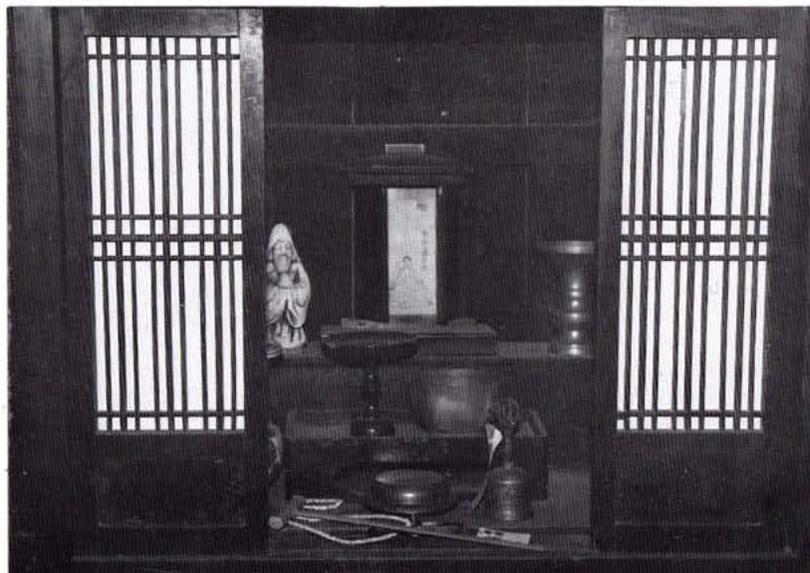
富士登山用の金剛杖は八角柱です。江戸時代「みろくぎようしや身禄行者」が、富士山の頂上で修行したときの遺言の中に、「八角の金剛杖を使って登ったがいい」とあり、富士山には、八岳の峰（三島岳・駒岳・じようじゆ成就岳・伊豆岳・大日岳・久須志岳・白山岳・剣ヶ峰）がある。また富士山には沢が八百八やっぴやち沢、その中で大きいのが八沢（大沢・佛石沢・白草流・大流・吉田大沢・不浄沢・不動沢・鬼ヶ沢）である。八角の杖はこれらを表し、杖の頭の丸いのは、富士山の御神体を表しているものだと言われています。



数 珠(じゆず)

今では、念仏が、昔ほど盛んではないようですが、村の地藏さんなどに集まってかねをならし、念仏を唱え、大念仏も公民館などでよく行われているようです。

念仏は唱えれば唱えるほどよい。その時に大きな数珠をもってそれをまわしながら光明真言を唱えた。これを百万遍という。そして三百万遍とか一億万遍とか唱えた。その時、写真のような数珠をまわして、回数をかぞえた10数人で、数珠をもってかぞえる。百万遍になるにはほんとうにたいへんなことです。



仏 壇

仏壇は、本来仏堂内陳中の仏像を安置する基壇をいい、石壇、土壇、木壇等があったが中世以降、木造が一般化した。家ごとに厨子形の仏壇が設けられるようになったのは江戸時代の宗教政策によるもので、それ以前は有力者の邸内に持仏堂や、仏間があって仏壇は普及していなかった。香炉、花瓶、燭台等の仏具も同様で、江戸期になって年忌、法事等が庶民の家で行われるようになって木魚その他簡便な供養具が考案された。



福を呼ぶ“だるま”

群馬県高崎市のダルマ市と共に、全国最大の規模を持つ昆沙門さんの“ダルマ市”毎年2月に市が開かれるが、3日間で5万個ぐらい売れるという。買い求めた人たちは本堂近くの開眼堂でダルマの片目を入れてもらって願いの成就を祈るとか。ダルマは、中国の少林寺の達磨大師を模した張り子の玩具である。真っ赤な体に付いた大きな目玉を見ると日本の庶民のユーモアを感じます。

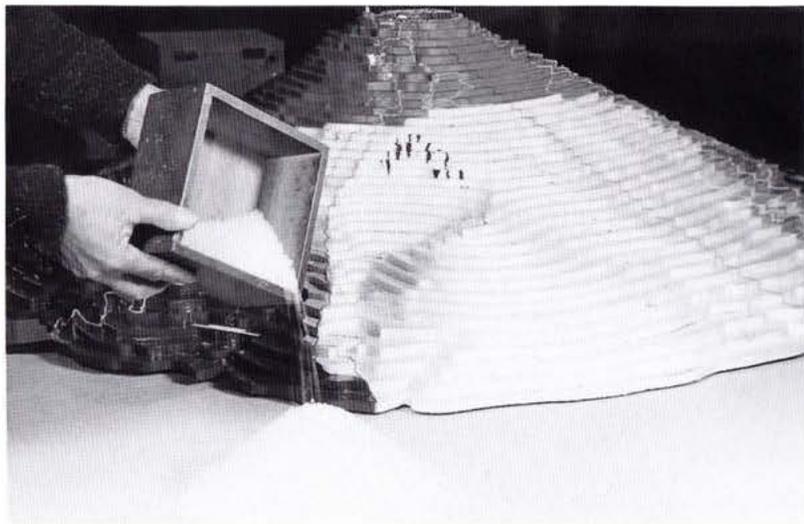


念仏のかね

唯念上人によって広められた念仏。

市内各地に見られる南無阿弥陀仏の名号碑「ほうかいさん」として親しまれている地区もある。幕末の不安な世相と度重なる大飢饉、病気。当時の人達に念仏を唱えることによってどれ程の勇気を与えたことが。現在も御年寄が中心になってこのかねを各自が持参、打ち鳴し念仏を唱える。念仏のあと唯念上人の功德を慕って御詠歌が詠られて念仏の終了となる。

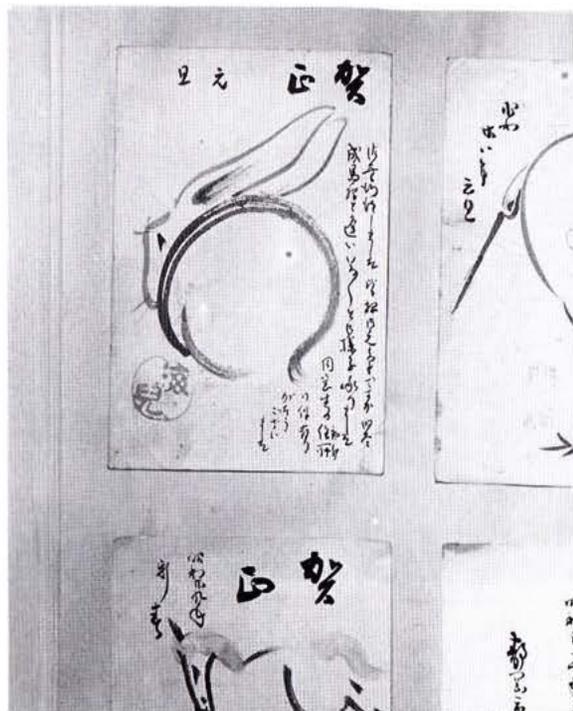
(7) 民俗知識に用いられるもの



こく 穀 しゅう 聚 ざん 山

「ます」に入れた米を、地上にあけると富士山のような円錐形の姿になり穀聚山といいます。そのます目を適用して、富士山の五登山道には登山の目当てに「合」をつけ1合目～9合目（頂上は10合）としたともいわれています。

合については、いろいろの説があり、富士山のご神体は、木花之開耶姫命という「女神」で、女体を山に型取り、胎生10か月を、10合にわけた。10合の直前を「胸つき」と呼んでいることが、その証拠とも……………。



干^え
支^と（十二支）

動物を玩具化することは古くから行われていたようである。干支ということがわが国で使用されたのは、応神天皇の16年、王仁が来朝してからのことといわれている。それは百済の国が、そのとき乙巳の年であったところからこの年を応神帝の年と定め、同時に干支すなわち十二支の使用をすることとし、上代へは逆算し、後年は順をおって十干十二支の歴数を用うようになった。そして一般にこの十二支が、大きな重宝となって今日に至っています。



菓子の木型

木型によって打ち出した菓子のことを「打ち菓子」といい、江戸時代から主に祝儀用に用いられてきた。古い時代の木型は硬いケヤキ、ウメ、サクラが主流だったが、明治以降になると多くの場合細工のしやすいホウを使うようになった。松竹梅、伊勢えび、鶴、亀、鯛、ボタンの花などが代表的な図柄だ。米粉、砂糖、水あめ等を混ぜてもみ、木型につめて型をとり、火を通してつくった。彫りは全部逆でなければならず、職人の腕の冴えをいまに伝えている。



獅子頭

須山地方では、30年ほど前まで、獅子舞が各戸を訪問し、舞を演じ、女性や幼児の頭髪をパクパクかみ、悪魔ばらいをしました。幼児は、怖くてただ泣き叫び、悪魔ばらいどころではありません。写真の獅子は、須山で神事舞踊を行ったものですが、いつごろかは不明で、1頭だけ残っています。獅子は、悪魔をはらい、1年の無病息災を祈り、また神社・祭礼でも舞われました。獅子面は、インド地方から日本に伝わった仮面の流れをくむもので、愛きょうのある顔は、皆から非常に愛されています。



須山の屋台

4月16日の祭礼の日に、いろいろな飾りものを作り、提燈ちようちんをいっぱいつけて、笛、太鼓を鳴らし、天降る神のために目じるしとして屋台を出して迎えた。神は祭りの日に「富士山の頂に天降ります」という古い信仰があったのが元で、村の青年たちによって須山をねり回り、村内の安全を祈った。

写真の屋台は須山一区、三区が明治25年から終戦近くまで使用した。戦争のため青年が出征し、男不足で引くことができなくなった。特に彫刻のすばらしい屋台です。



しん 神 輿

神体を納める小型の社で、かついで巡行します。かつぎ手はそれを前後左右上下に激しく動かすことによって、神威をふるいたたせ、同時に自らの心意気を示します。

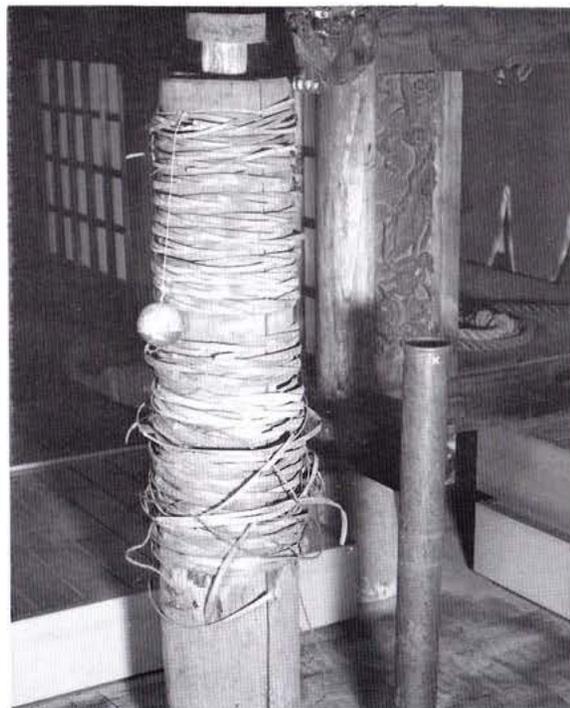
写真のおみこしさんは須山浅間神社の宝物で、氏子の方々と関係者のご理解とご協力により富士山資料館へお借りすることができました。

万延元年（1860年）製のものです。



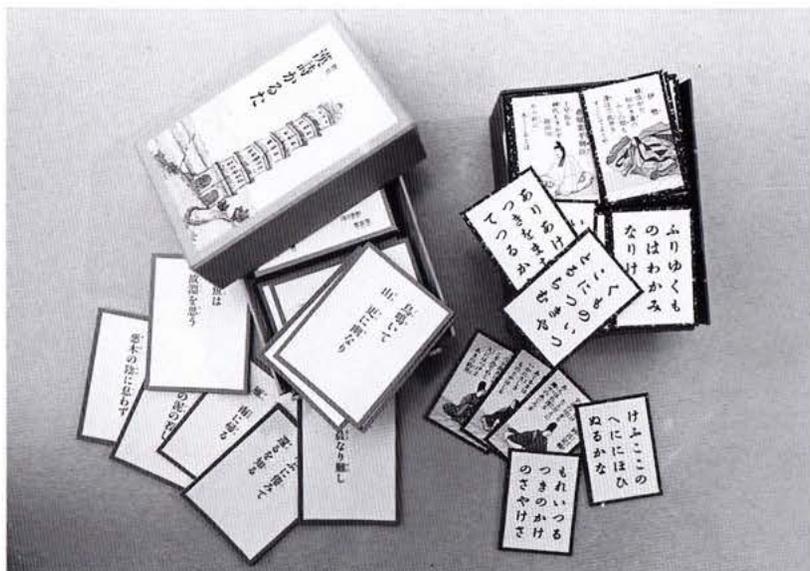
提 灯(ちょうちん)

ローソクを用いた携帯用の照明具である。始めは木わくに紙を張って携行できる籠提灯となり、400年前頃に折りたたみのできるものとなった。細い割竹をらせん状に巻いて骨にし、紙を張って上下に口と底をつけ、中にローソクをともした。用途によっていろいろな種類があり、馬上で腰にさした馬提灯、竹を弓のように張り曲げ、その上下をひっかけた弓張提灯、円筒形で折りたたみのできる小田原提灯などがあります。



花 火 の 筒

夜空を美しく彩る夏の風物詩、花火は、静岡県が生産額、日本一です。写真の右は、現在使用されている打ち上げ花火用の筒です。左の竹の「たが」をはめた筒は木製で明治初期のもので、丸太を二つわりにして中央に雨どいのような溝をほり、二つあわせて「たが」をはめると、木管ができます。現在のような鉄パイプがなかったのでしょうか。美しい芸術的な花火も、このような工夫が明治初期からあってこそ、世界一の花火国になったのです。



かるた(歌留多)

カルタはポルトガル語。日本語化してしまい、もうまるで完全な日本語扱いである。

鉄砲といっしょに伝来したこのカルタも、今では「百人一首」か「いろはかるた」ぐらいに限られているが、ポルトガル人から教えられて以来400年間には、実に多種多様が現われ、そして消えていった。

小倉百人一首、新百人一首、武家百人一首、崎百人一首、烈女百人一首、道化百人一首、戯場百人一首、犬百人一首などあり、百人どころか、二百首、三百首の大規模なものまであった。



たこ(凧)

安永2年(1773年)の江戸小咄に、

——息子がたこをあげるに上がらず。おやじ出て「どれどれおれが上げつけてやらう」向こうの河岸へ小僧を連れ行き、一途駆け走るとよくあがる。おやじおもしろがり、引いたりしゃくったり余念なし。「コレとっさん、もうおれにくんねいくんねい」とせつければ、「エエやかましい。われ連れて来ねばよかったもの」——江戸に限らず凧上げは大のおとも夢中にさせた。浜松まつりは、400年の歴史を誇る。永禄年間、浜松城主の長男誕生を祝って、名入りのたこを揚げたのが始まりです。



力石(力くらべの石)

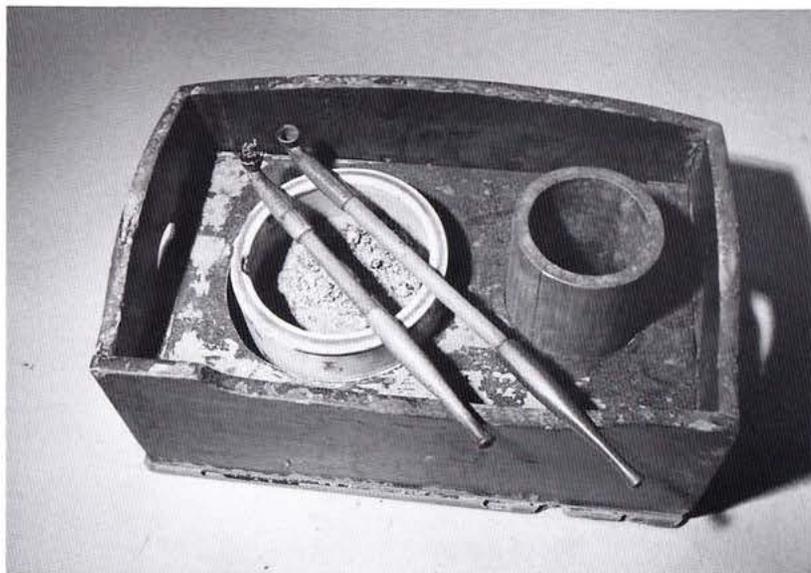
昔の青年は、米1俵をかつげるとか、農作業が人並みにできることが、1人前であった。夜学堂やがくどう(今の公民館)の庭先にこの石をおいて何歳のときにかついだとか、持ち上げたとか……力を競ったものです。また若者組へ入る者はこの石をかつがせられたりもしました。大きい石は17貫400あうたい(65.3kg)、風袋を含めた米1俵の目方です。

さて今の1人前とは……責任感、自主、心配り…?



化粧まわし

すもう用語で、腰部に、まわして締めるのでまわしの名称が生じた。テレビなどで見る競技用の「取まわし」と区別して、土俵入り専用の「化粧まわし」が用いられるようになったのは220年も前からのことです。元禄の頃は、色絹に動植物をししゅうして華美を競うようになった。当時は競技にも、土俵入りにも1種類のまわしを用いた。写真は須山出身の石乃戸いしのと(中村勝平さん)がしめたもので、長さは5mもあります。



煙 管(きせる)

たばこ屋の店先から急に「^{きぎ}刻み」が姿を消した。売れないから。400年の刻みが幕を閉じる。当然煙管も消え古民具ということになるでしょう。煙管は竹の両端に吸口と雁首をつけたささやかな仕掛け。だが「きせる」はカンボジア語で管の意味で、竹の部分は「^ろ羅字」ラオスそのもの。雁首の先の火皿につめる「たばこ」がポルトガル語、小さい道具ながら、なかなか国際派です。



とうふ屋さんのラッパ

物売りの音は、遠くから近づいてくる音である。その売り声は、前ぶれの音として響き誰が近づいてくるかを知らせた。用のある人は、音の遠近をみはからって表に出ていった。「あめやさんのデンデコデン」「紙芝居の拍子木の音」「なんかやさん(日用品をなんでも売っていたので)のチリン、チリン」「ラーメン屋のチャルメラ」(穴が7つある木管楽器)など懐しいものです。写真上は、関西方面、下の太いのは、この地方のとうふ屋さんのラッパです。

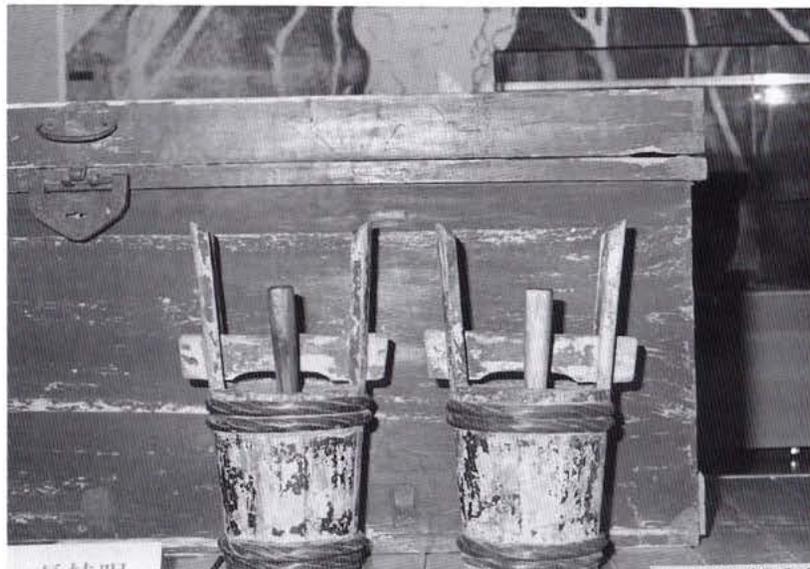
(9) 人の一生に関して用いられるもの



オチョウ・メチョウ

オチョウ・メチョウは、結婚式用に使われる銚子の一種です。注ぎ口があり、つるをかける取っ手があるので、「銅製のどびん」?のなかまです。縁起を考えてのオチョウ・メチョウで、これで一組。これに酒を入れて、盃に注ぐことになる。普通は、金・銀のメッキです。

昔は、婚礼用に用意して持っている家があり、近所にも貸しだし、かわいい男の子と女の子が晴れ着を着て、このオチョウ・メチョウで新郎新婦に酒をついだが、今は式場で結婚式が行われるので不要になった。



角 樽(つのだる)

お前ナー 百まで わしゃ九十九までナー とともにナー しらがのヨ
はえるまでナー

歌詞は、めでたい唄として全国的に知られている熊本の「お蔭節」を歌っています。さまざまな祝いごとの中でも婚礼は、もっとも盛んな儀式です。その儀式の時に使われるのがこの「祝い樽」です。さわら(椏)やひのき(檜)、まき(榎)などの高級品でつくられ漆(うるし)塗りです。

(10) 年中行事に用いられるもの



お 皺 さ ま

大きなものをそれと同じように小さく作る、それは雛型である。雛人形のよび名はそこに起因がある。源氏物語のなかにでてくる雛遊びとか雛型人形などの例を見ると、いずれも大きなものを小さく作る、すなわち雛遊びは今日の「ままごと」遊びと大同小異とみるべきで、人間生活が子どもの世界に反映して、彼らを楽しませる一つの対象としての現れであります。江戸時代にはいって、発達が速度を加え、考案され、何百種にのぼる変わり雛が作りだされました。



宝 船(たからぶね)

江戸時代の宝船は、七福神の乗合船の絵が多かった。
——宝船逃げて来たよな御姿——、——船頭の居処に困る宝船——、など、いろいろな格好で小さな船に押しあいへしあいの七福神を、江戸の川柳はおもしろく伝えています。七福神は安土桃山の狩野松栄の絵に始まるとされています。江戸時代に入って少しずつメンバーが入れかわり、今のように大黒天、恵比寿、弁財天、毘沙門天、寿老人、布袋和尚、福祿寿の7人に落ち着くのは、江戸時代も終わりに近い頃のようにです。

写真は、わらで作った宝船です。

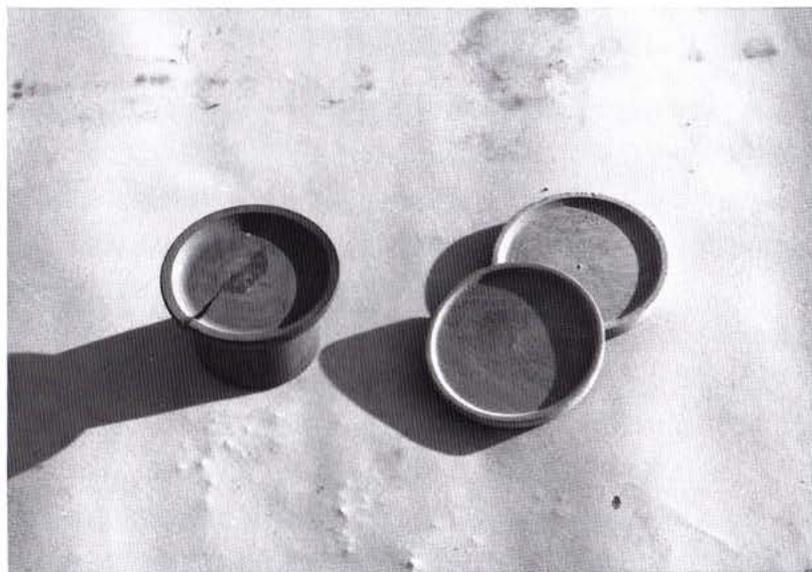


しめなわ 注 連 縄

しめなわは藁わらを利用して作りあげる見事な立体構成です。

武士たちは正月を祝福するためにこれを門口に飾りました。もともとは注連縄は災厄の入りくる事を防ぐために吊したもので呪言じゆげんを書いた札をつけることもあり、これこれを門守りと呼び鎌倉時代にも見る事ができます。

一戸一戸が門口に注連縄を張るだけでなく、村のはずれの道の上や川の流れの上に張ってあることもあります。



おぶっけ

おぶっきとも云われた。家庭内祭祀、神棚、大黒さん、荒神さん等家庭内に祭り特に正月など三ヶ日間はおぶっけに餅の入った雑煮を各々の神さんに上げ新年の年神が各家庭を訪れて、その年の幸福を授けてくれる昔からの農耕中心の五穀豊穰を祈り新年正月を祝った。

又その他にその家に目出度事などがあると赤飯等をおぶっけを使用し神さんに供えたりする。

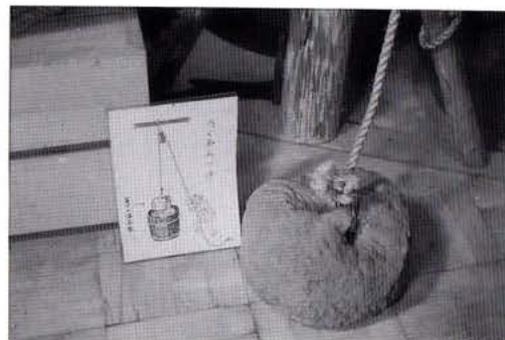
III. 富士山資料館収蔵の民具資料

富士山資料館では、昭和53年5月開館以来多くの方々から富士山資料、岩石標本、郷土歴史・民俗資料、文学・芸術資料、考古資料などの提供や寄贈をいただき、収蔵資料も現在では開館時の3倍以上に達しております。特に民具におきましては、以前須山小学校が中心となり須山全区的に収集保管いただいた民具や裾野郷土研究会が中心となり収集された民具を中心に、このほか裾野市全域から市民の皆様からの申し出による寄贈民具も数多く資料館に収蔵され、現在この数は大分類による資料点数だけでも3000以上に達しております。

このような収蔵点数の中で、展示室に展示できる民具は裾野市全域的に見たなかでの郷土館全体の展示構成や民具それぞれのもつ特性によって、長期にわたる展示ができないものもあり、寄贈者や資料提供者の皆様にはたいへん申し訳なく感じております。資料館に寄贈、提供された資料はすべて年間を通して害虫・カビのガスくん蒸処理を中心とした同一の管理によって保存され、未来に生かされるべく収蔵されております。

民具は時代の流れの中で庶民による生活の知恵によって誕生し、発達して行くものですので今後もさらに庶民の文化遺産をしっかりと未来に伝えるべく、できる限り収集・収蔵していきたいと考えております。

民具は庶民文化によって誕生したものですので、骨董品の価値は少ないものも多く、知らず知らずのうちに姿を消してしまいます。一度姿を消してしまった民具は思うように発見することはできません。私達の身の回りの道具で、思い出深い民具がありましたらその思い出とともに民具の寄贈をいただきたいと考えております。



たくあん漬と重石

IV. 編集後記

富士山資料館・郷土館に展示閲覧されている民具、古くから郷土に伝わる生活、農耕具・養蚕・風習等、近年社会の中で年々忘れられて行く、これらの民具、必要が生み出した生活の知恵が一杯つまっています。

永年の歴史的風土によって、培われて来たこの文化を、収集・整理・保存・展示して未来社会のために活用し、新しい文化を創造したいと思います。

民具には、必要が生み出した知恵とその土地の顔があり日常生活の必要から、衣・食・住、生業、運搬、儀礼等、いろいろなに分かれますが、いずれも実用品として日常の生活に適応する生活の知恵こそ、その土地の歴史を物語る資料であると言わなければなりません。

富士山資料館民俗資料収集専門員として勝又俊彦氏が収集・整理・保存した民具を、広報すその「なつかしい民具」と題し、毎月9年間に渡り連載し広く市民に紹介し、これらの家庭に眠っている民具を散逸することなく資料館に収蔵出来ました業績、志の途中で急逝されました勝又先生に慎んで哀惜の意を表わし、御冥福をお祈りいたします。

「なつかしい民具」資料館開館以来市民多数の方々の協力又資料の提供等、ここで改めて御礼申し上げます。

なお、市民の皆様に愛され今後とも御理解と協力を切にお願いし、一層充実した資料館に発展するよう心掛る次第であります。

平成3年2月

裾野市立富士山資料館々長 渡 辺 徳 逸
井 上 輝 夫
杉 山 義 則

「なつかしい民具」

編集・発行者 裾野市立富士山資料館

発行 平成3年2月

印刷 有限会社 小野印刷所